

平成12年鳥取県西部地震 震災体験記録



【平成12年10月7日 日本海新聞】

鳥取県



鳥取県知事 片山善博

はじめに

平成12年10月の鳥取県西部地震から、早くも1年が経過しようとしています。県民の皆様の方強い意志のもと、復興が着実に進んでいく様子に頼もしさを感じ、大変喜ばしく思うとともに、県民の皆様の生命及び財産を守るという、行政としての責務の大きさを改めて痛感しています。

鳥取県西部地震の災害対策では、被災地に出向き対策が必要と判断した住宅再建支援制度をはじめとして、各種災害復旧事業、風評による観光へのマイナスイメージの払拭など、復旧、復興に向けて全力で取り組んできました。一方で、災害対策や防災行政に関して、被災された県民の皆様や防災関係者の皆様の体験やお考えを広く求め、教訓として生かしていくことが、今後の防災体制を充実させていくために、きわめて重要なことと考えます。

県においては、被災された県民の皆様や災害対策に従事された防災関係者の皆様の震災体験を風化させることなく、貴重な財産として今後の防災対策に生かすため、「鳥取県西部地震震災体験調査」を実施し、約780名の被災された住民の皆様と約250名の防災関係者の皆様から地震発生時の状況やそのときの行動、防災に役立つ情報、対策などについてアンケートを中心として御回答をいただきました。その結果と皆様からお寄せいただいた震災の体験談、防災対策への提言等と併せて震災体験記録としてとりまとめることができました。

本書が、今後の防災対策の基礎資料として活用され、教訓として後世に引き継がれることにより、将来、県内で再び大きな地震が発生した場合に、被害をより少なくするための一助となることを祈念いたします。

終わりになりますが、御協力をいただいた皆様にご心からお礼申し上げます。

平成13年10月



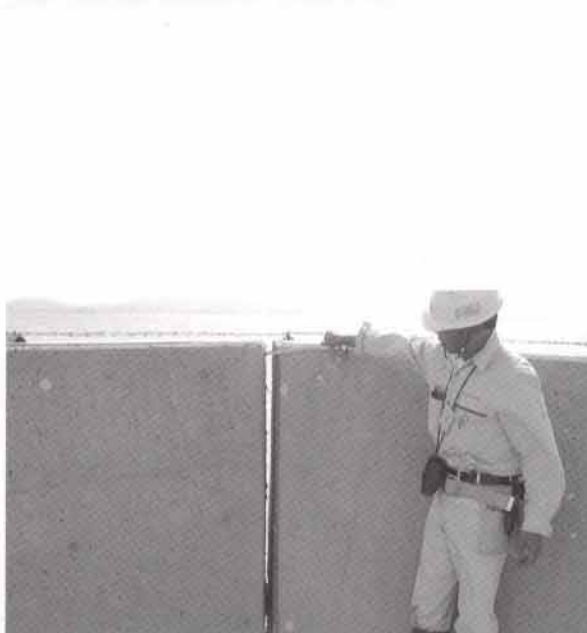
亀裂が生じた岸壁【境港市】

損傷した境漁港・通称カニかご岸壁【境港市】
写真提供/日本海新聞





路上に落石(車両を直撃)【溝口町中祖】



地盤の揺れで開いた護岸【境港市】



工業用水路の護岸が崩落【境港市】



倒壊した米子市内の民家【米子市】
写真提供/日本海新聞



国道180号の法面崩落【日野町小河内】



液状化のため波打つ道路【境港市】

第1章 ●平成12年鳥取県西部地震の概要

| | |
|-----------------------|---|
| 1.震度等 | 2 |
| 2.平成12年鳥取県西部地震の特徴について | 3 |
| 3.鳥取県内での地震の発生状況 | 5 |
| 4.住民の避難状況 | 6 |
| 5.鳥取県西部地震発災からの対策等実施経過 | 7 |

第2章 ●県民及び防災関係者アンケート調査結果

| | |
|---------------------|----|
| 第1節 アンケート調査の目的と方法 | 10 |
| 1.アンケート調査の目的 | 10 |
| 2.調査の概要 | 10 |
| (1) 調査形式 | 10 |
| (2) 調査時期 | 10 |
| (3) 調査対象者 | 10 |
| (4) 調査票の回収状況 | 12 |
| 第2節 県民アンケート調査結果 | 13 |
| I 地震発生時の状況 | 13 |
| 1.地震発生時の在宅状況 | 13 |
| 2.地震発生時の在宅人数 | 13 |
| 3.在宅者の地震発生時の居場所 | 14 |
| 4.在宅者の地震発生時の行動 | 14 |
| 5.自宅の2階以上にいた人数 | 15 |
| 6.自宅(母屋)の構造 | 15 |
| 7.自宅(母屋)の建築年 | 15 |
| 8.自宅での地震の揺れ方 | 16 |
| (1) 揺れの感じ方 | 16 |
| (2) 揺れを感じた時間 | 16 |
| (3) 揺れに対する恐怖感 | 17 |
| (4) 地震発生時のとっさの行動 | 18 |
| 9.家屋の被害 | 19 |
| (1) 家屋の倒壊などの被害 | 19 |
| (2) 家屋内の家財等の破損 | 20 |
| (3) 電話、電気、ガス、水道等の被害 | 20 |
| 10.人の被害 | 21 |
| 11.地震発生の予兆 | 22 |
| 12.地震発生前の地鳴りの体験 | 22 |

| | |
|------------------------|----|
| II 防災活動の状況 | 23 |
| 1.地震発生の予想 | 23 |
| 2.日ごろの防災への備え | 24 |
| 3.有効だった日ごろの備え | 25 |
| 4.地震発生時に最も危険と感じたこと | 26 |
| 5.地震直後（2時間以内）の行動 | 27 |
| 6.最初に知りたかった防災情報 | 28 |
| 7.今後、充実すべき防災情報 | 29 |
| 8.県、市町村が提供すべき防災情報 | 30 |
| 9.有効だった災害対策 | 31 |
| 10.とても不満と感じた災害対策 | 32 |
| 11.同規模の地震の発生の可能性 | 33 |
| 12.家族で取り組みたい防災対策 | 34 |
| 13.県・市町村で早急に強化すべき防災対策 | 35 |
| 第3節 防災関係者アンケート調査結果 | 36 |
| I 地震発生時の状況 | 36 |
| 1.地震発生の予想 | 36 |
| 2.地震発生時に最も危険と感じたこと | 36 |
| 3.同規模の地震の発生の可能性 | 37 |
| II 防災活動の状況 | 37 |
| 1.防災活動の実施 | 37 |
| 2.防災活動のために最初に必要とした防災情報 | 38 |
| 3.十分得られなかった防災情報 | 39 |
| 4.県、市町村から提供すべき防災情報 | 40 |
| 5.有効であった災害対策 | 41 |
| 6.不十分であった災害対策 | 42 |
| 7.県、市町村で早急に強化すべき防災対策 | 43 |

第3章 ●体験談

| | |
|-----------------|----|
| 第1節 県民の地震体験談 | 46 |
| 第2節 防災関係者の地震体験談 | 78 |

第4章 ●調査結果からみる災害対策の課題

| | |
|-----------------------------|-----|
| 第1節 県民及び防災関係者が感じた災害対策の不十分な点 | 92 |
| 第2節 まとめ | 101 |

第1章

平成12年鳥取県西部地震の概要

第1章 平成12年鳥取県西部地震の概要

1 震度等

鳥取県西部地震は、日野町、境港市で震度6強を観測したのをはじめ、中国・四国・近畿地方の広い範囲でも揺れが感じられました。

鳥取県内でのマグニチュード7以上の地震は、昭和18年以来であり、鳥取県西部を震源とする地震は、平成9年のマグニチュード5.1の地震以来のことでした。

(1) 発生時刻及び震源地

平成12年10月6日 午後1時30分

鳥取県西伯郡西伯町～日野郡溝口町付近（北緯35.3° 東経133.4°）

(2) 規模

マグニチュード 7.3

最大震度6強（境港市・日野郡日野町）

(3) 鳥取県内の震度分布



(4) 余震回数

地震発生から平成13年3月31日までの間に、有感（震度1以上）の余震は1,129回を数えました。

（単位：回数）

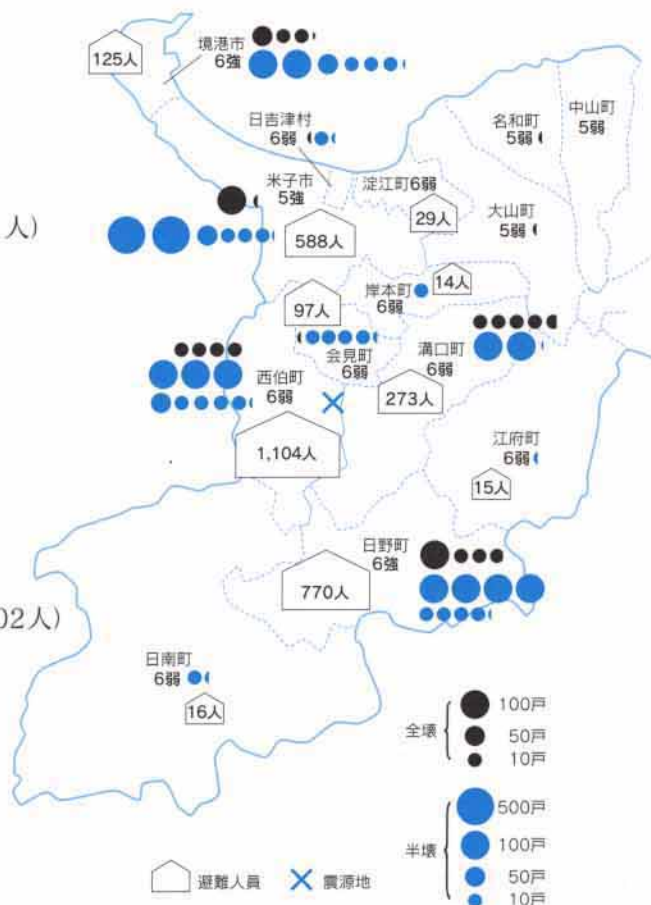
| 区分 | 最大震度別回数（有感） | | | | | | | | 合計 |
|----|-------------|-----|----|----|----|----|----|----|-------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5弱 | 5強 | 6弱 | 6強 | |
| 回数 | 712 | 304 | 98 | 13 | 2 | — | — | — | 1,129 |

(5) 被害の状況 (平成13年8月31日現在)

- 負傷者
141人 (重傷31人、軽傷110人)
- 住民の避難
1日当たり避難人員最大値 2,703人
(各市町村の避難人員最大値計 3,031人)
- 住家の損壊
全壊 392戸
半壊 2,482戸
一部破損 13,561戸

(6) 救援活動 (のべ人員)

- 自衛隊 1,546人
- 消防署員・消防団員 3,908人
(消防署員 1,406人、消防団員 2,502人)
- ボランティア (平成13年1月7日現在)
5,351人
(うち県外者 1,900人)



2 平成12年鳥取県西部地震の特徴について

(1) 震度分布

| | |
|------|----------------------------|
| 震度6強 | 日野、境港 |
| 6弱 | 西伯、溝口 |
| 5強 | 米子、新見、岡山哲多、落合、美甘、香川土庄 |
| 5弱 | 松江、東郷、岡山、玉野、福山、徳島、観音寺、兵庫津名 |
| 4 | 鳥取、出雲、倉敷、広島、高松、松山、高知、大阪、神戸 |

(2) 震度の特徴

- ① 山間部の日野町と沿岸部の境港で「震度6強」が記録されている。
- ② 震度の大きな地域が震源の南側 (岡山県から四国まで) に広がっている。
- ③ 松江、鳥取、出雲などは、震源までの距離が近いが、比較的震度が小さい。

(3) 被害の特徴

被害は震度6の地域に集中しています。マグニチュード7.3の地震にしては、死者もなく、火災も発生しなかったなど被害が少なくなっています。これは、発生時刻が午後1時30分とおおむね昼食後であったことや、震源及び激震域が山間部で住宅が密集していなかったこと、地盤が比較的良かったためと考えられます。

(4) 被害の種類

- ①家屋の倒壊、山間部での斜面崩壊、落石などの地震動による被害
- ②沿岸部での液状化現象による地盤被害
- ③都市型の被害

境港市、米子市など都市部では、港湾岸壁の崩壊、マンホールの抜き上がり、電信柱の沈下など、ライフラインの被害が随所に見られました。

(5) 本震と余震分布

本震は、西伯町の地下10キロメートルのところを震源として、震源断層が北北西-南南東の走行で、20キロメートルの長さの左横ずれ断層を示しています。

余震活動は、震源断層に沿った細長い帯状の地域に集中しています。この中で、最大余震マグニチュード5.0が北の端近くに発生しています。そして、誘発地震群が二カ所あり、割算型の分布をしています。南西の日南町-横田町ではマグニチュード5.5の地震が発生しています。

(6) これまでの地震活動

①山陰地方の歴史地震

明治以来、日本海沿岸に沿った大地震は浜田地震、北丹後地震、鳥取地震と発生して、鳥取県西部では起きていません。

②最近20年間の中地震

1983年鳥取県中部の地震 (M6.2)、1985年大山付近の地震 (M4.9) が大山山頂から数キロメートル東に発生。1991年には鳥根県東部の地震 (M5.9) が発生。1983年からの地震活動は、東から西へと移動しています。

資料 鳥取大学工学部 西田良平教授

余震活動

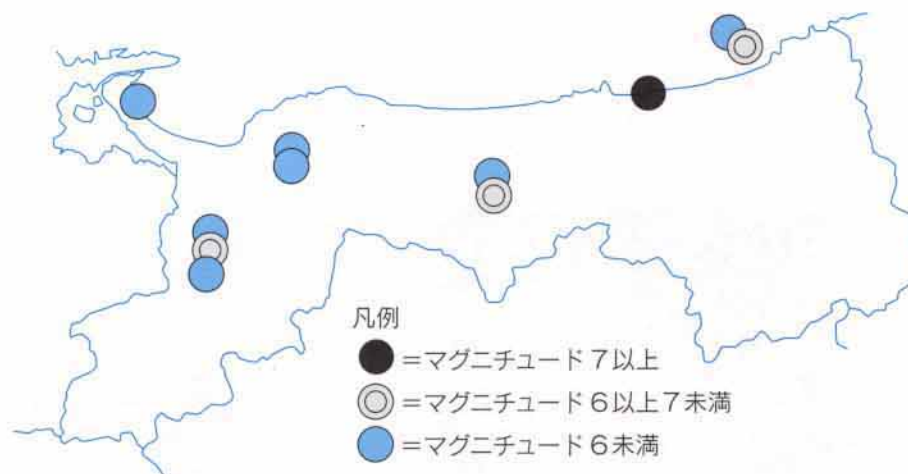


3 鳥取県内での地震の発生状況 (過去100年間)

| 発生年月日 | 場所 | 規模 | 概要 |
|---------------------------------|-------|-------------------------|---|
| 大正14年 7月 4日 | 美保湾 | M=5.8 | 境・米子付近で被害が大きく、壁の亀裂、屋根瓦の落下、道路・堤防の亀裂、石垣の破損、地割や井戸の埋没が見られた。 |
| 昭和18年 3月 4日 3月 5日 | 鳥取沖 | M=6.2 M=5.7 M=6.2 | 鳥取県東部が被害を受けた。建物の倒壊68戸、同半壊515戸、湖山村では延長300メートルに渡り崖が崩れ、温泉にも異常が見られた。 |
| 昭和18年 9月10日 | 鳥取付近 | M=7.2 | 鳥取市の被害が全体の約80パーセントに達した。 死者1,083人 家屋全壊7,485人 土木関係のほか交通網、通信網にも大きな被害を受けた。 |
| 昭和30年 6月23日 | 鳥取県西部 | M=4.3 M=4.6 M=5.5 | 日野郡根雨町付近で石垣や橋の脚台が破損 |
| 昭和58年10月31日 | 鳥取県中部 | M=6.2 M=5.9 | 負傷者13人。約200戸が断水(青谷町)。 住家一部破損689戸、非住家98戸、被害総額2億2,455万9千円 |
| 昭和60年 7月 2日 | 大山付近 | M=4.9 | 群発地震 |
| 平成元年10月27日 11月 2日 | 鳥取県西部 | M=5.3 M=5.4 | 被害総額1億円 |
| 平成 2年11月21日 11月23日 12月 1日 | 鳥取県西部 | M=5.1 M=5.2 M=5.1 | 目立った被害は見られなかった。 |
| 平成 9年 9月 4日 | 鳥取県西部 | M=4.6 M=5.1 | 一部断水が生じたり、屋根瓦の破損や墓石の倒壊が見られたが、目立った被害は見られなかった。 |

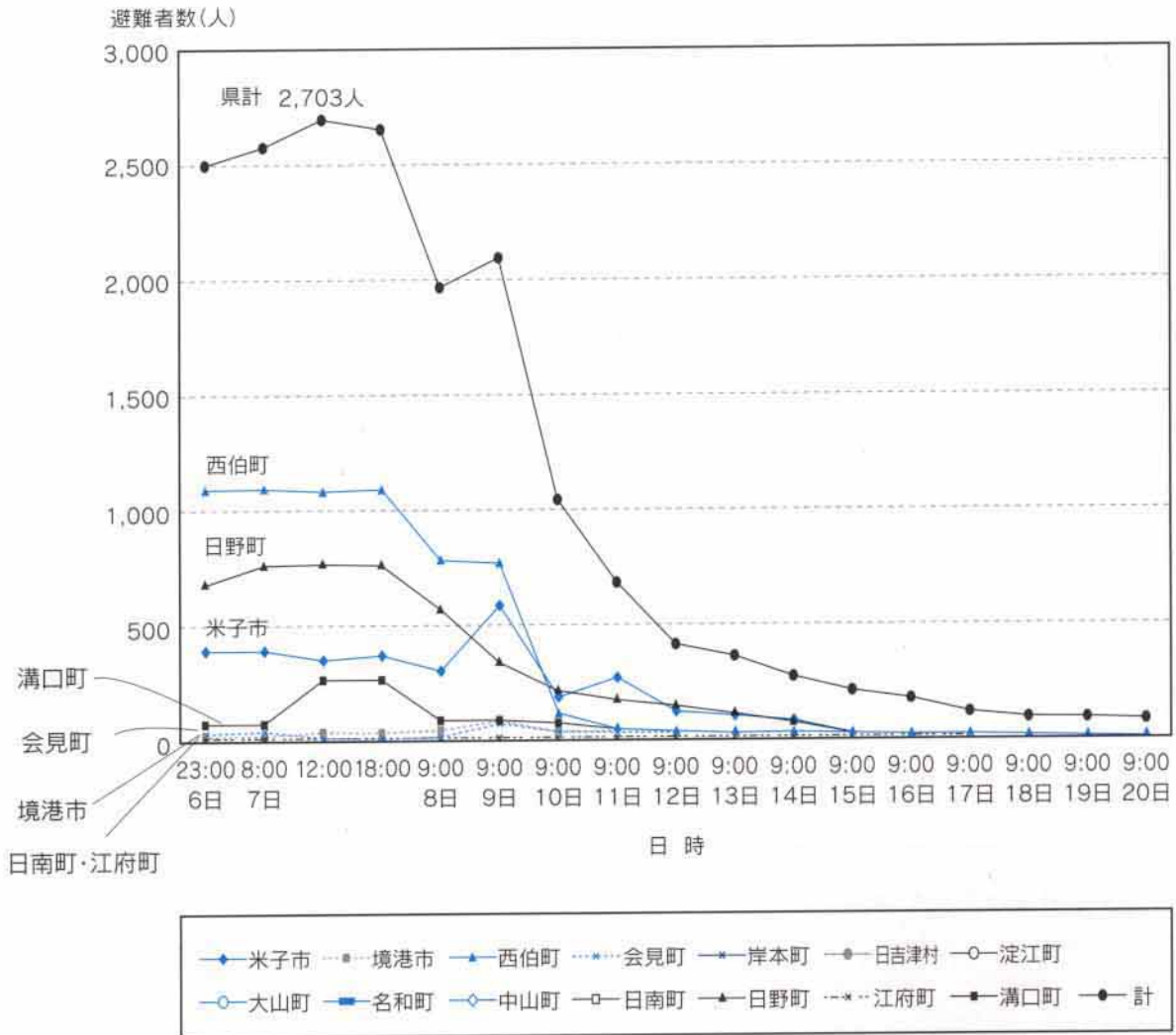


過去の地震の震源地 (過去100年間)



4 住民の避難状況

鳥取県西部地震における市町村別避難者の推移



日野町内の中学校に避難した人々

5

鳥取県西部地震発災からの対策等実施経過

| | | | | |
|--------|---|---|---|---------------|
| 10月 6日 | 13:30 13:40頃 14:29 14:40頃 18:00 19:00 22:35 | 鳥取県西部地震発生、災害対策本部設置 西部総合事務所で西部本部の立ち上げが始まる 陸上自衛隊第八普通科連隊へ災害派遣要請（県西部地域における人命救助活動、生活救助支援） 森総理大臣から知事に支援の電話 国土庁蓮実総括政務次官がヘリで急行、被災地視察後、政府の全面協力を表明 日野町根雨1区及び根雨2区で23世帯37名に対して避難勧告 米子市、西伯町、日野町に災害救助法を適用 その後、翌1時30分頃まで各市町村からの緊急要請を受け、即対応を指示 |  | 鳥取県西部地震災害対策本部 |
| 10月 7日 | 15:30 16:10～ 21:00 | 副国土庁長官ほか、国土庁調査団が被災地の視察 溝口町大坂地区で2世帯10名に対して避難勧告 自衛隊災害派遣要請（境港市竹内団地地域での排水溝の土砂撤去、西伯・会見・日野各町の損壊した独居高齢者宅等への防雨用シートの展張） 溝口町に災害救助法を適用 | | |
| 10月 8日 | 11:33 13:30 14:25 20:40 | 溝口町父原地区で4世帯18名に対して避難勧告 自衛隊災害派遣要請（日野町での入浴支援） 自衛隊災害派遣要請（西伯町での崩壊土砂の除去） 境港市、会見町に災害救助法を適用 | | |
| 10月 9日 | 11:32 12:00 23:30 | 自衛隊災害派遣要請（西伯町での県職員による緊急調査へのヘリコプター支援） 自衛隊災害派遣要請（溝口町での損壊した高齢者世帯家屋に対するシートの展張） 自衛隊災害派遣要請（西伯・日野町の損壊独居高齢者宅、身体障害者宅の防雨用シートの展張） 境港市に被災者生活再建支援法適用 | | |
| 10月10日 | 12:00 13:00 | 宮内庁渡辺侍従長を通じ、天皇皇后両陛下から、被災者へのお見舞いと災害復旧関係者へのねぎらいのお言葉が届く 日野町本郷地区で10世帯40名7事業所に対して避難勧告 米子市、日野町に被災者生活再建支援法適用 | | |
| 10月12日 | 14:10 15:10 15:46 | 米子市宗像で1世帯3名に対し避難勧告 自衛隊災害派遣要請（米子市での損壊した独居高齢者宅等への防雨用シートの展張） 米子市宗像で2世帯5名に対し避難勧告 鳥取県全域に被災者生活再建支援法適用 | | |
| 10月13日 | 18:30 | 谷 農林水産大臣が災害対策本部来訪 | | |
| 10月14日 | 14:10 | 米子市青木で2世帯8名に対し避難勧告 | | |
| 10月15日 | | 谷 農林水産大臣が被災地視察 | | |
| 10月17日 | 16:00 | 参議院災害対策特別委員会調査団が被災地視察 | | |
| 10月18日 | | 鈴木消防庁長官が被災地視察 | | |
| 10月20日 | 11:00 | 自治省 嶋津財政局長が被災地視察 | | |
| 11月 2日 | | 鳥取県西部地震災害復興本部設置 |  | |

第 2 章

県民及び防災関係者アンケート調査結果

第2章 県民及び防災関係者アンケート調査結果

第1節 アンケート調査の目的と方法

1. アンケート調査の目的

鳥取県西部地震発生から半年（調査時点）以上が経過し、各地で復旧作業が進み、公共施設、道路、人々の暮らしなども震災前の姿に戻りつつある。しかし、予期しなかった地震の発生により、家屋の倒壊、半壊などの被害に見舞われた県民の方々の心の傷跡は大きく、また、今なお屋根に青いビニールシートが被さったままの家が見受けられる。

この調査は地震を体験された多くの県民の方々の地震発生時の状況、行動、災害への対応策などを体験記として後世に残すとともに、災害対策にあらゆる面から取り組んだ防災関係者が震災で得た教訓を記録として残すことを目的とするものである。

2. 調査の概要

(1) 調査形式

この調査では調査の精度と回収率を高めるため各自治会の代表者にアンケート調査票の配布を依頼し、回収用封筒に密封された調査票を郵送により回収するという留置法で実施した。調査様式は、選択肢方式と、より詳細な意見や実態を把握するための自由記述方式を併用した質問紙調査法をもちいた。

(2) 調査時期

2001年3月

(3) 調査対象者

① 県民調査

米子市、境港市、西伯町などの鳥取県西部の各市町村における建物被害件数（2001年2月2日現在）を点数化し、さらに集落、丁、区などを建物被害件数により点数化ののち被害件数が10件以上の地域を対象地区として選定した。そして、対象者の選定については、選定地区の自治会代表者に震災の影響を直接的に受けた地域住民の方を任意で抽出していただいた。

〈対象者の選定〉

1) 市町村別の配分方法

- ア 各市町村の建物被害件数（2001年2月2日現在）を点数化
全壊—4点、半壊—2点、一部破損—1点
- イ 市町村の点数に応じて、1000件を按分
- ウ 調査地点（丁目、大字等）当り10件とし、地点数を配分（合計100地点）

2) 市町村への地点配分表

| 区分 | 全壊 | 半壊 | 一部破損 | 合計点数 | 按分件数 | 地点数 |
|------|-----|-------|--------|--------|------|-----|
| 米子市 | 100 | 1,029 | 4,542 | 7,000 | 373 | 37 |
| 境港市 | 69 | 264 | 1,162 | 1,966 | 104 | 10 |
| 西伯町 | 40 | 389 | 1,202 | 2,140 | 114 | 11 |
| 会見町 | 2 | 43 | 879 | 973 | 51 | 5 |
| 岸本町 | | 10 | 1,097 | 1,117 | 59 | 6 |
| 日吉津村 | 1 | 12 | 170 | 198 | 10 | 1 |
| 淀江町 | | | 330 | 330 | 17 | 2 |
| 大山町 | | 1 | 100 | 102 | 5 | 1 |
| 名和町 | | 1 | 19 | 21 | 1 | 1 |
| 中山町 | | | 7 | 7 | 1 | 1 |
| 日南町 | | 12 | 368 | 392 | 20 | 2 |
| 日野町 | 129 | 441 | 945 | 2,343 | 125 | 13 |
| 江府町 | | 1 | 847 | 849 | 45 | 5 |
| 溝口町 | 45 | 199 | 708 | 1,286 | 68 | 7 |
| 計 | 386 | 2,402 | 12,376 | 18,724 | 993 | 102 |

3) 市町村内での地点の選考

ア 同様に集落、丁目等を単位として、建物被害件数を点数化

イ 被害件数が10件未満の単独集落等は、原則選考外

ただし、近隣の複数の集落などを集合して10件以上となれば、総合的に勘案し、対象とする

ウ 第一に全壊のある集落、第二に半壊のある集落等を優先し、一部損壊しかない集落は、後順位とする

エ 点数の高い集落等から優先し、地点を決定

ただし、いくら点数が高くても、その決定した集落等は1地点まで

②防災関係者調査

被害のあった市町村をはじめ、自衛隊、所轄の警察署、消防署など実際に災害対策活動に携わった関係機関、そして電気、ガス、水道などのライフラインの復旧に従事された企業、鳥取県庁内の各関係部署を抽出し、郵送にて配付、回収を行った。

(4) 調査票の回収状況

① 県民調査

調査対象者数 1,000名
回収票数 784票 (回収率78.4%)

② 防災関係者

調査対象者数 390名
回収票数 256票 (回収率65.6%)

県民調査の市町村別配布、回収状況表

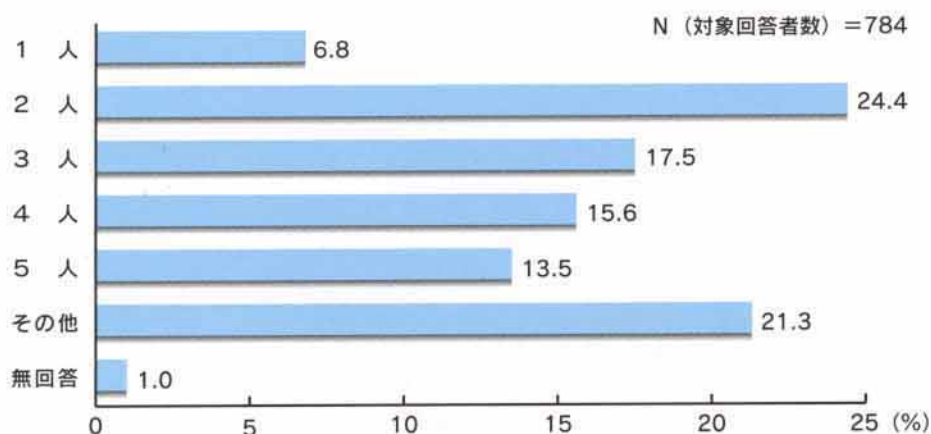
| 区分 | 地点数 | 配布枚数 | 回収枚数 |
|------|-----|-------|------|
| 米子市 | 35 | 350 | 279 |
| 境港市 | 10 | 100 | 78 |
| 西伯町 | 11 | 110 | 86 |
| 会見町 | 5 | 50 | 39 |
| 岸本町 | 6 | 60 | 38 |
| 日吉津村 | 1 | 10 | 6 |
| 淀江町 | 2 | 20 | 19 |
| 大山町 | 1 | 10 | 4 |
| 名和町 | 1 | 10 | 9 |
| 中山町 | 1 | 10 | 8 |
| 日南町 | 2 | 20 | 16 |
| 日野町 | 13 | 130 | 104 |
| 江府町 | 5 | 50 | 39 |
| 溝口町 | 7 | 70 | 59 |
| 計 | 100 | 1,000 | 784 |

第2節 県民アンケート調査結果

I 地震発生時の状況

1. 地震発生時の在宅状況

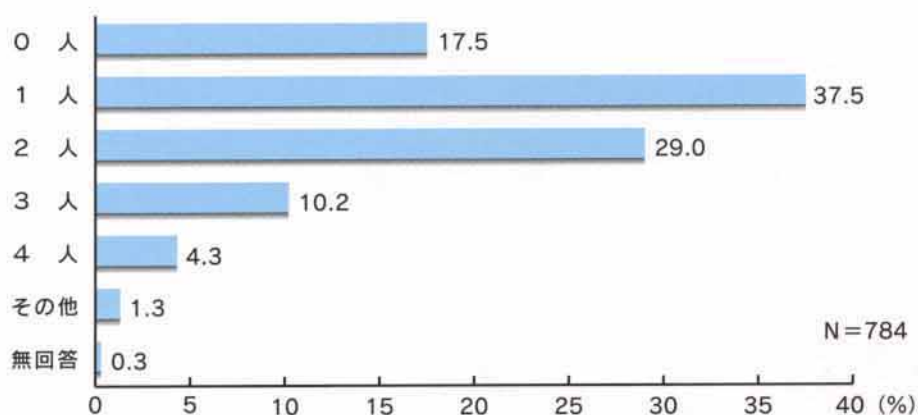
問 あなたの自宅には、何人住んでいましたか。複数世帯の場合は、その合計人数をお答えください。(○印は一つだけ)



2. 地震発生時の在宅人数

問 地震発生時、自宅にいた人は、何人ですか。(○印は一つだけ)

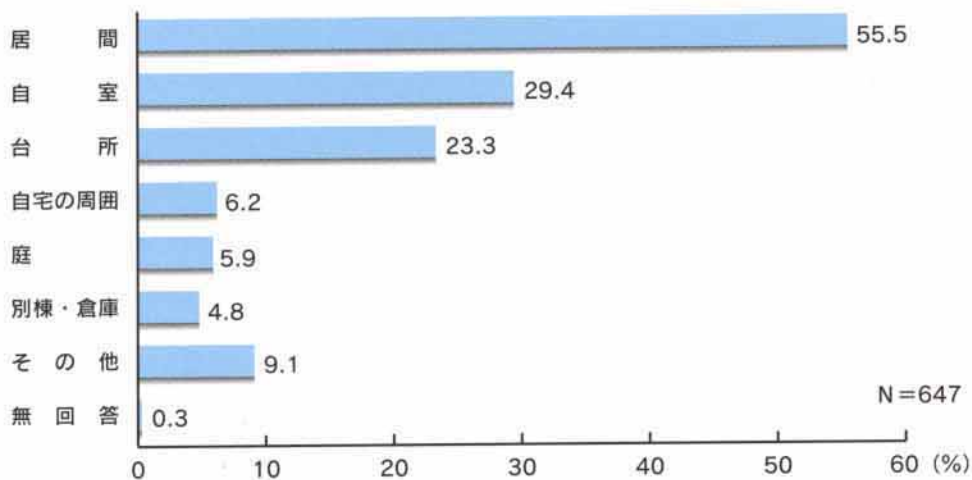
地震発生時には、回答者世帯784世帯のうち647世帯(82.5%)で、何人かが在宅していた。



3. 在宅者の地震発生時の居場所

問 自宅にいた人は、自宅のどこにいましたか。(あてはまるものすべてに○印)

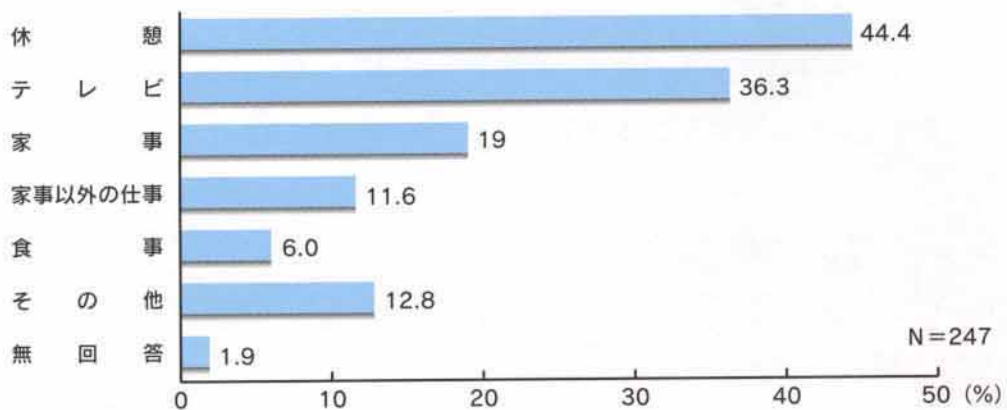
自宅に居た人の多くは、「居間」(55.5%)、「自室」(29.4%)にいた。



4. 在宅者の地震発生時の行動

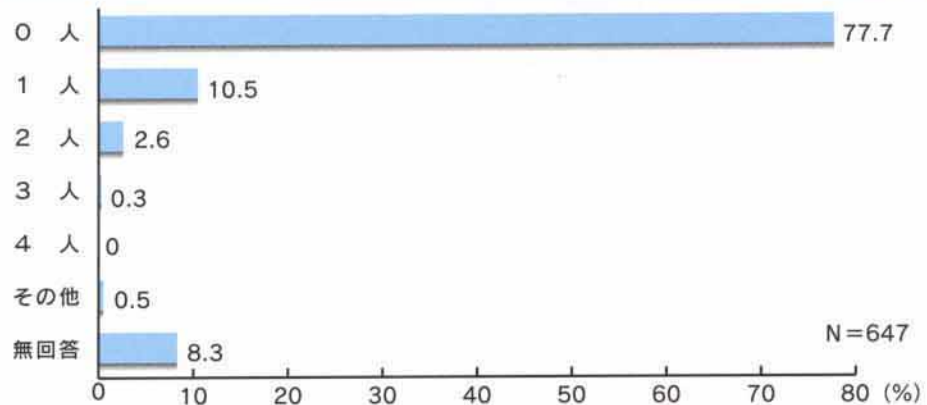
問 自宅にいた人は、何をしていましたか。(あてはまるものすべてに○印)

地震時には、「休憩」(44.4%)、「テレビ」(36.3%)とほとんどの人がくつろぎのひと時を過ごしていた。



5. 自宅の2階以上にいた人数

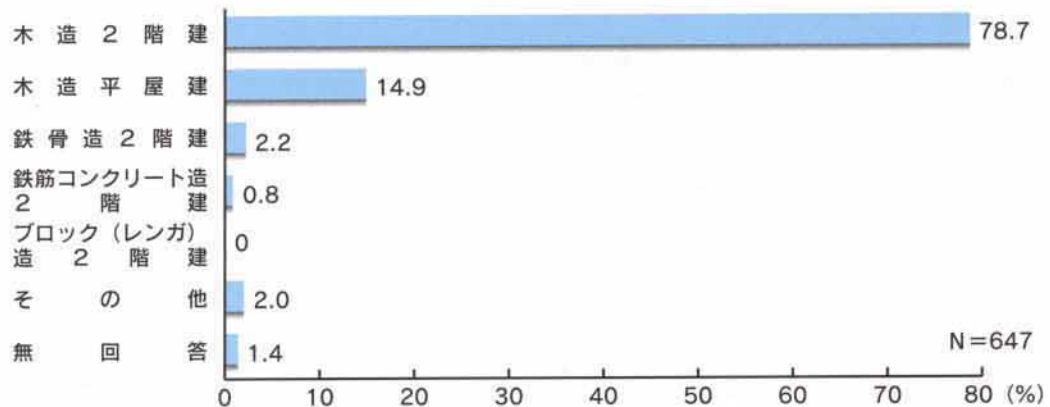
問 自宅にいた人で、自宅の2階以上にいた人は、何人ですか。(○印は一つだけ)



6. 自宅（母屋）の構造

問 自宅（母屋）の構造は、何ですか。(○印は一つだけ)

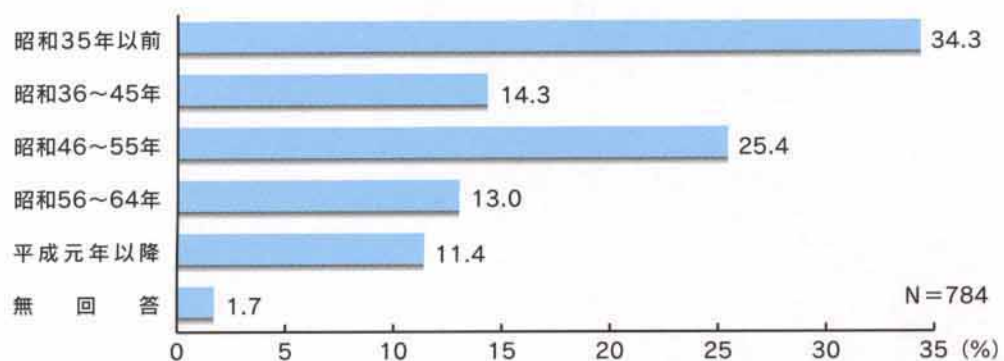
家屋（建物）の構造は、「木造2階建」78.7%、「木造平屋建」14.9%と、家屋の構造のほとんどは木造である。



7. 自宅（母屋）の建築年

問 自宅（母屋）が建てられたのは、何年ですか。(○印は一つだけ)

母屋（建物）の建築年は、「昭和35年以前（築後40年以上）」が34.3%と最も多い。

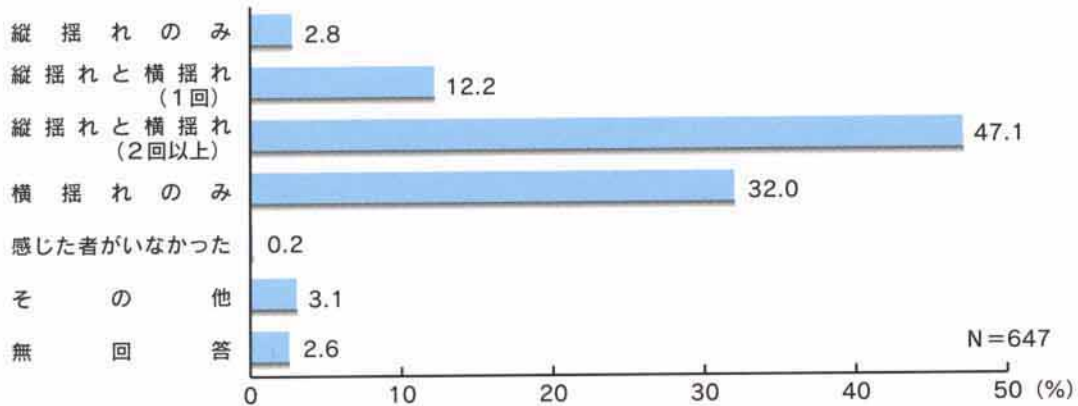


8. 自宅での地震の揺れ方

(1) 揺れの感じ方

問 自宅での地震の揺れ方は、どのように感じましたか。(○印は一つだけ)

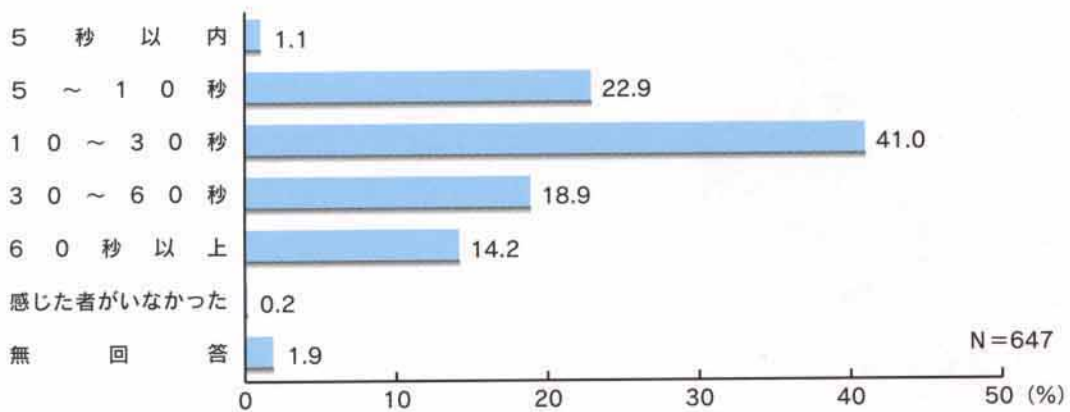
地震の揺れについては、「縦揺れと横揺れ(2回以上)」(47.1%)、また「横揺れのみ」(32.0%)を感じている人が多い。



(2) 揺れを感じた時間

問 揺れは、何秒くらい続いたと感じましたか。(○印は一つだけ)

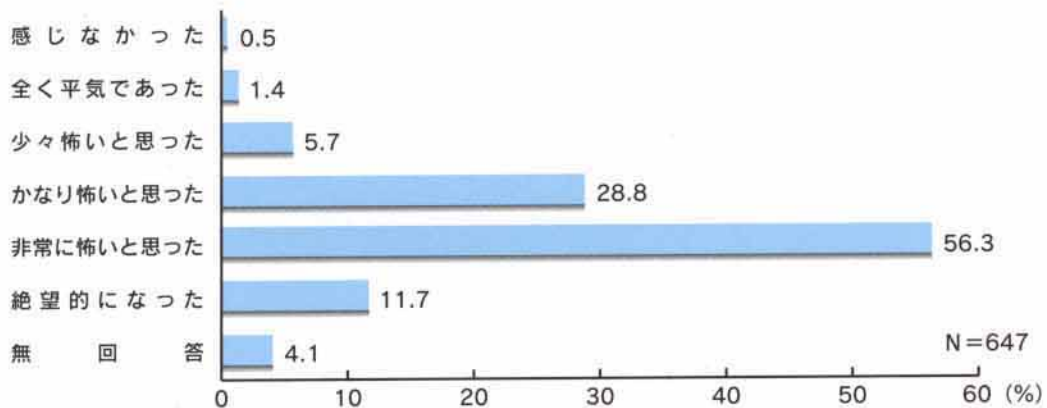
揺れを感じていた時間は、「10~30秒」(41.0%)、「5~10秒」(22.9%)、「30~60秒」(18.9%)と30秒以内と感じていた人が多い。



(3) 揺れに対する恐怖感

問 揺れを感じたとき、怖さの程度は、どのようなものでしたか。

揺れに対する恐怖感は「非常に怖いと思った」(56.3%)、「かなり怖いと思った」(28.8%)、「絶望的になった」(11.7%)と、ほとんどの人が強い恐怖感を覚えている。



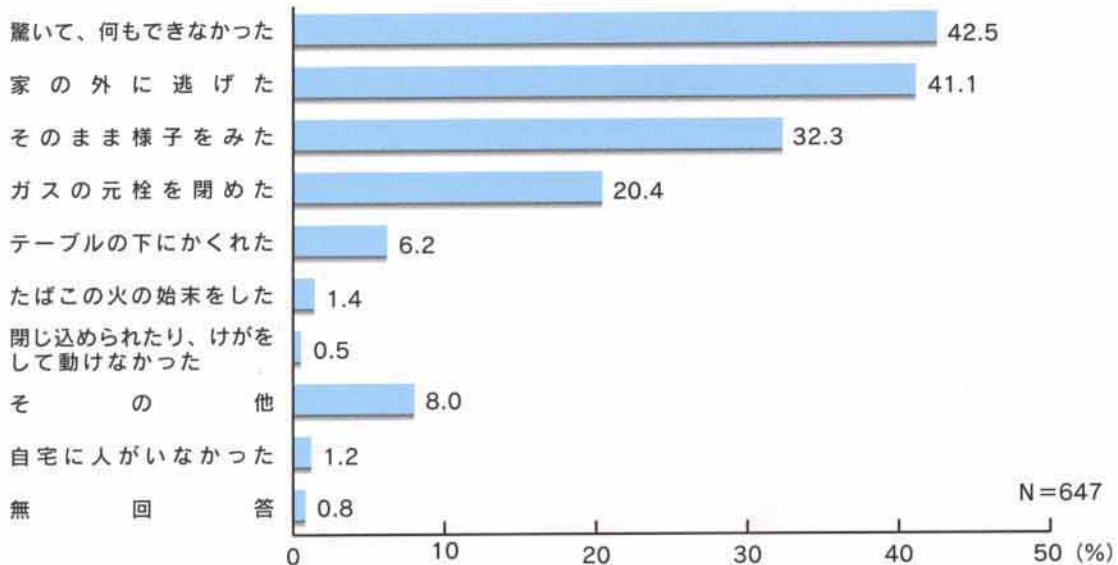
- 昼食のご飯を口にした瞬間「あっ地震だ」と感じたまま固まってしまった。
- 腰が抜けたように動くにも動けず、驚きのあまり声も出なくなりました。
- 私の実家は阪神・淡路大震災で半壊という被害を受けました。今回の地震では、その時の事がよみがえり、私は大変な恐怖でした。
- 孫の怖がる大声の泣き声で何もできず抱いておりました。
- 少し大きな地震があると、防災無線からサイレンのような音がするので、地震よりもその音を子供や病人は恐がった。
- 自宅に帰り、朝出かけた時と様変わった我が家の中を見てガックリというか、涙が出てきた。
- この歳になって地震で度肝を抜かれたことが一番である。わずかな時間で長年かけて築いた人生が一瞬にして終わってしまうような恐ろしさです。

(自由記載欄から抜粋)

(4) 地震発生時のとっさの行動

問 自宅にいた人で、地震発生時に、とっさにとった行動は何ですか。(あてはまるものすべてに○印)

地震が発生したときの行動では、「驚いて、何もできなかった」(42.5%)人と、「家の外に逃げた」(41.1%)人が同程度となっている。



- マグニチュード7くらいになると、とっさには何もできないものです。外に出るのが精一杯です。火災にならないように、元栓を止めるくらいだと思う。余震に対しては、テーブルの下に入るくらいだ。
- 病人(介護5)を家で介護している者が寝たきり老人をそのままにして避難できない状態であった。隣と距離があるため、手伝いを求める事もできず困った。
- 後になって考えてみれば、瓦なども屋根から落ちていて危なかったのですが、慌てて外に飛び出していました。

- 2~3年に一度防災訓練に参加しておりました。出口を確保し、ガスの元栓を閉める。非常持ち出しリュックを作り、いろいろ準備していたはずですが、いざという時はテーブルの下に隠れるだけで驚いて何もできませんでした。
- 自宅には老女しかいなくて、早速電話(市内の職場から)したものの、耳が遠いため、出る訳もなく安否が気掛かりで職場の好意ですく自宅に向かいました。

9. 家屋の被害

問 自宅で、どのような被害が発生しましたか。(あてはまるものすべてに○印)

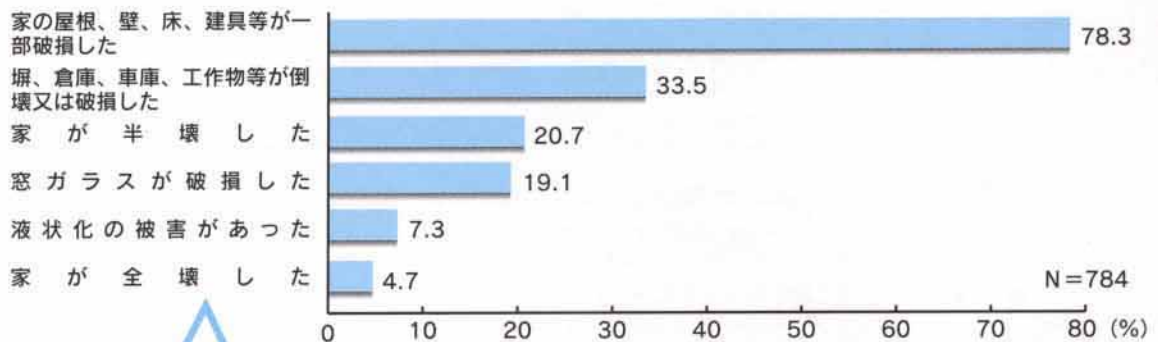
自宅で発生した被害の状況を『家屋の倒壊などの被害』『家屋内の家財等の破損』『電話、ガス、水道等の被害』に大別してみる。

N=784

| 被害状況(複数回答) | % | 件数 |
|-----------------------|------|-----|
| 『家屋の倒壊などの被害』 | | |
| 家の屋根、壁、床、建具等が一部破損した | 78.3 | 614 |
| 塀、倉庫、車庫、工作物等が倒壊又は破損した | 33.5 | 263 |
| 家が半壊した | 20.7 | 162 |
| 窓ガラスが破損した | 19.1 | 150 |
| 液状化の被害があった | 7.3 | 57 |
| 家が全壊した | 4.7 | 37 |
| 『家屋内の家財等の破損』 | | |
| 食器・電化製品・装飾品等が損傷した | 68.0 | 533 |
| 家具が転倒した | 46.9 | 368 |
| 『電話、ガス、水道等の被害』 | | |
| 電話が不通となった | 25.3 | 198 |
| 水道が止まった | 15.2 | 119 |
| ガスが止まった | 7.9 | 62 |
| 停電した | 7.4 | 58 |

(1) 家屋の倒壊などの被害

家屋の被害で最も多いものが「家の屋根、壁、床、建具等が一部破損した」で78.3%と8割弱を占めている。



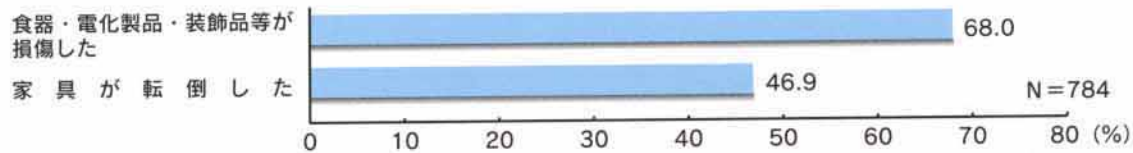
- 地震・火災に強いことを望んで鉄筋コンクリート造りの家建てたが、今回の液状化によって裏目の被害(不等沈下)が出た。
- 墓石の移動、灯籠の破損もあった。隣りの大きな石灯籠が家の墓へ全部倒れたため、壊れたり、倒れたりした。
- 家の中は物が倒れて大混乱。その他襖が全部建て付けたままばらばらに引き裂かれ、風呂場のタイルは斜めに亀裂が入り一番醜いのは、屋根の頂上の瓦がばらばらに崩れ

落ちていた。

- 数十トンもある建物を一瞬のうちに土台ともに20cmもずらした。しかし、建物自体は木組も構造材も大きかったので倒壊は免れた。
- 母屋の棟が倒壊し、裏の納屋の二階の屋根もあちらこちらずり下がっておりました。
- 家屋は一部破損したがそれ以上に裏山が崩れ、家屋への土砂の流入はなかったものの、約1ヶ月避難生活を強いられた。

(2) 家屋内の家財等の破損

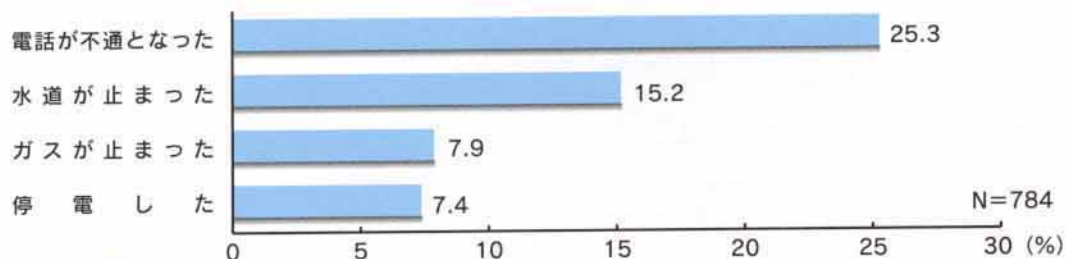
窓ガラス、食器等の家財の被害については、「食器・電化製品・装飾品等が損傷」が7割近くある。



- 冷蔵庫の扉が開き、中から器ごと飛び出て、食器棚からは器が散乱し始め、横揺れにより部屋の中のあちこちで、高い所から物が落ち始めました。
- タンス・棚に積んでいる物は、ほとんど落ちてきた。特に「観音開き」の戸棚・本棚は中の物が飛び出していた。
- テレビがアンテナ、電源も全部線がちぎれ、ブラウン管が下になって落ちていて電気店の方も来てもらい結線修理してもらった。
- タンスの上の大型テレビが家内の寝床の真上に落ちてきたが、これが夜中だったら大事故になったと思いゾツとした。
- 本棚の前側に戸がないので、一番下の段まで全部振り出されて、何百冊の本がごみ捨て場のように散乱してしまった。

(3) 電話、電気、ガス、水道等の被害

生活を行う上で必要なライフラインの被害は、「電話が不通となった」が25.3%と最も多い。

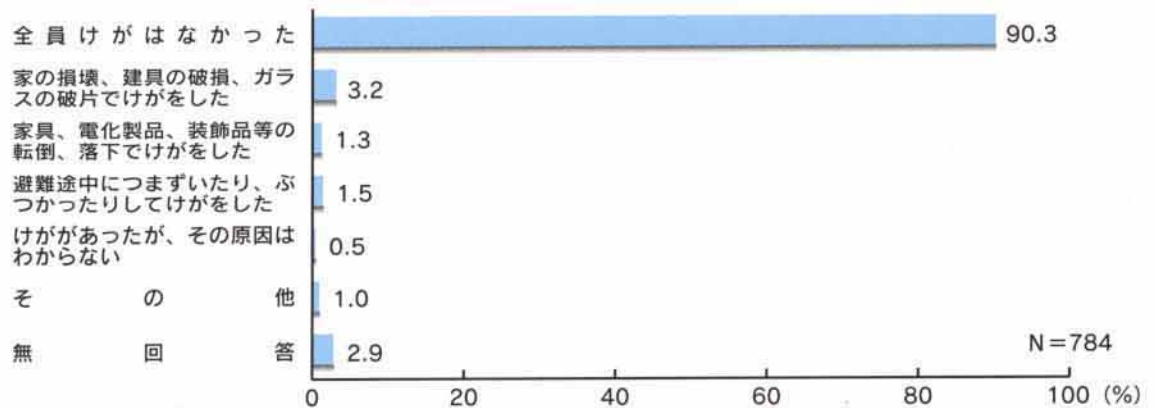


- 自宅前の道路に埋めてあった水道管が破裂し水が吹き出すなど、水が出なくなっている状態で数回電話をしても復旧作業を開始するまでには、かなりの時間がかかった。
- 5ヶ月を過ぎた今ごろになって、水道配管など（家の床下の）に地震の時のゆがみや、揺れで少しずつ傷が出てきたりして水道の水漏れが起こっていた。表面上のことに気をとられていて、土の下のことを忘れていた。
- 断水が続き、これが一番不便であった。

10. 人の被害

問 家族の皆様は、けががありましたか。(あてはまるものすべてに○印)

家族のけがの有無は、「(家族) 全員けがはなかった」90.3%と、多くの世帯で地震によるけがはなかった。

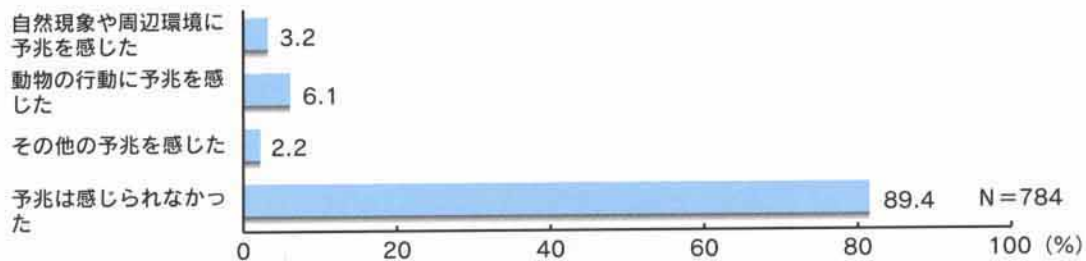


- 地震が起きたとき、慌てて外に飛び出し骨折をしました。後で、つくづく慌てて外に飛び出したりせず、机の下等に入っていたら骨折せずにすんだと思いました。
- 私の母は散歩中に地震に遭い転倒し、大腿骨骨折のケガをしました。
- 地震のショックで父が入院した。全面移転のため、精神的苦痛が大。
- 地震で父が生き埋めになり、死にかけました。まだ病院に入院して治療を受けています。

11. 地震発生の予兆

問 自宅又は自宅付近で、鳥取県西部地震が発生する予兆（異常）を感じましたか。
また、それはいつ頃ですか。（あてはまる項目について、具体的に記入）

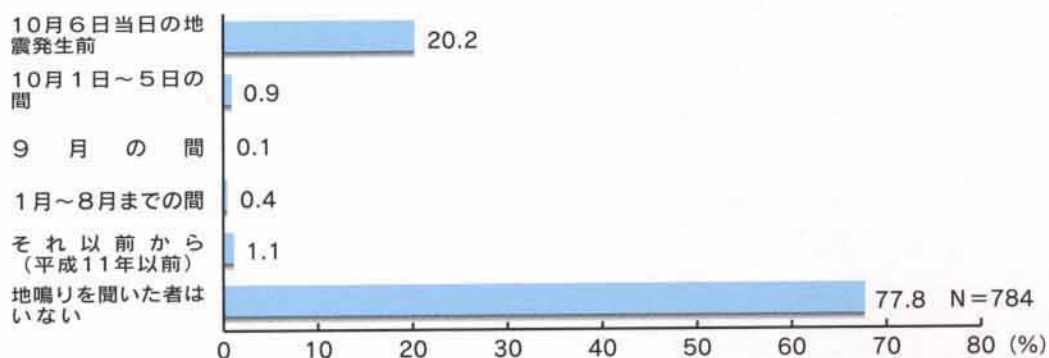
地震発生の予兆については、わずかながら『黒く長い一条の雲が見えた』『水田の一部で雑草が枯れ、水稲も枯れた』などの「自然現象や周辺環境に予兆を感じた」や『ねずみがいなくなった』『鳥やカラスが一斉に鳴きだした』などの「動物の行動に予兆を感じた」とする意見がみられる。なお、「予兆は感じられなかった」には、無回答も含めた。



12. 地震発生前の地鳴りの体験

問 地震発生前に、地鳴りを聞きましたか。地鳴りを聞いた時期は、いつ頃ですか。
（あてはまるものすべてに○印）

地震発生時前に地鳴りを聞いたという回答が2割強ある。なお、「地鳴りを聞いた者はいない」には無回答も含めた。

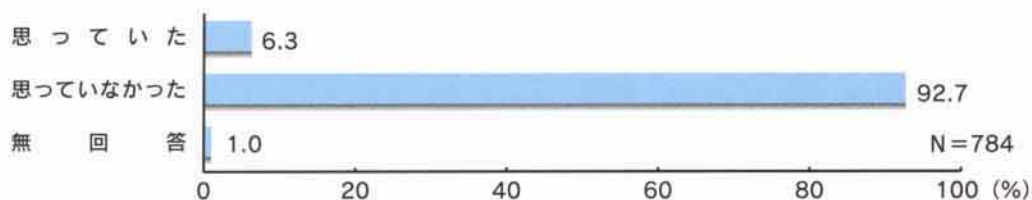


II 防災活動の状況

1. 地震発生の予想

問 鳥取県西部地震のような大きな地震が、近々発生すると思っていましたか。
(○印は一つだけ)

9割以上の方が、このような大きな地震の発生を予想していなかった。

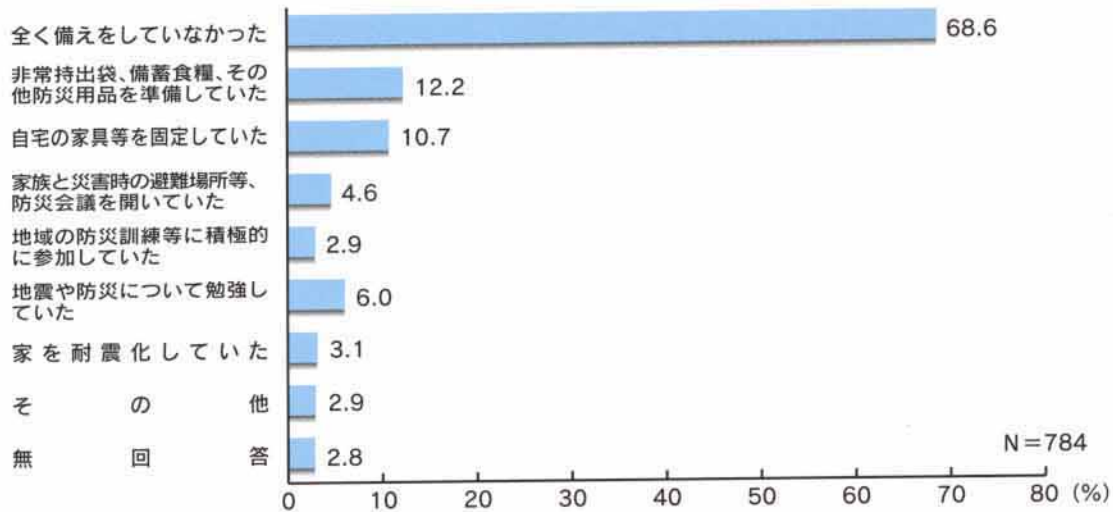


- 自分の所だけは大丈夫ということはないと思った。日本列島のどこが大地震になっても不思議ではない。地震に対する関心を持った。
- 地震雲が毎日のように天空に広がっていて悪い事が起こらなければ良いかと思っていた。
- こんな強い地震が来ない地区と思っていた。
- 数年前、鎌倉山を震源とする地震が連続して発生して多少の地震の発生はありうると感じていた。
- 2~3年前頃から、頻繁に地震があるので「もしや!」と思っていた時に、地震が起きました。
- 西部地域は全く安心と思い込んで暮らしていました。
- 自然災害はやはり、いつ発生するか分からない。

2. 日ごろの防災への備え

問 地震発生前から、日ごろの防災への備えをしていましたか。(あてはまるものすべてに○印)

「全く備えをしていなかった」という意見が7割弱と圧倒的に多く、「何らかの備えをしていた」は3割強となっている。

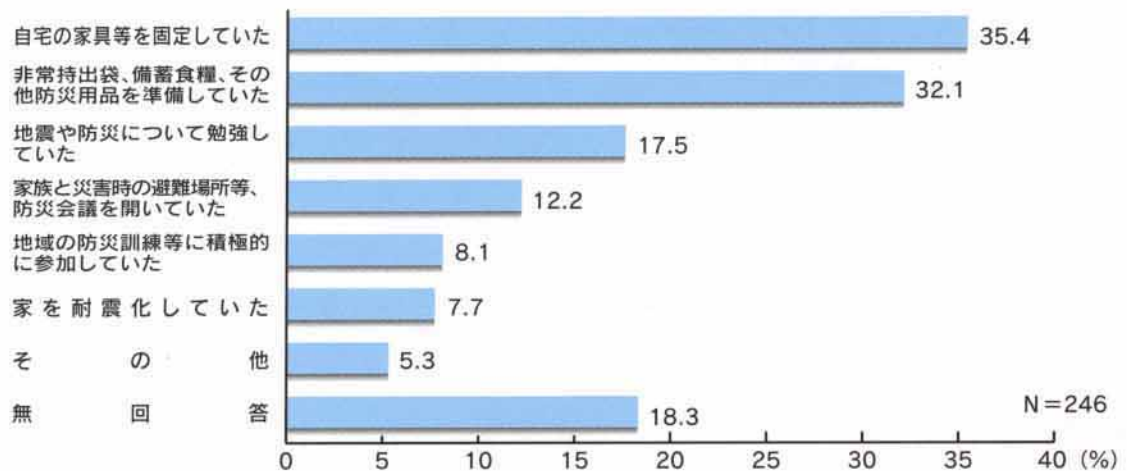


- 阪神・淡路大震災以来、非常持ち出しの用意をしていたが、いざ起こってみると到底一緒に持ち出せない。
- 阪神・淡路大震災後、非常持ち出し袋・備蓄食糧・その他防災用品を準備し、地震保険にも加入したが、次第に危機感も薄れていた。
- 普段から家族に地震があるかもしれないと話していたので、夜寝る時にも頭の上に物が落ちないようにしていた。
- 長男(高知女子大学助教授・地球物理学専攻)から「近いうちに地震が来るかも知れないから、注意するように」との忠告を受けていましたから、常に危機感を持って暮らしていた。
- 出口を確保し、ガスの元栓を閉める。非常持ち出しリュックを作り、いろいろ準備していたはずですが、いざという時はテーブルの下に隠れるだけで驚いて何もできませんでした。
- 多少の防災用品、備蓄食糧等を用意していましたが、転倒した家具の下敷きになり取り出せませんでした。
- 日頃、地震が来たら電気を切って、火を止めて出ると話し合っていたが、この前のようにグラグラと大きなのがくると気がついてみると外に出ていた。
- 持ち出し袋等々、準備していたものの自宅にいなかったため、用をなさなかった。

3. 有効だった日ごろの備え

問 日ごろの備えをしていて、有効だったと考えられることは、何ですか。(〇印は3つ以内)

地震時に役立った日ごろの防災の備えとして「自宅の家具などを固定していた」(35.4%)、「非常持出袋、備蓄食糧、その他の防災用品を準備していた」(32.1%)などの回答が多い。

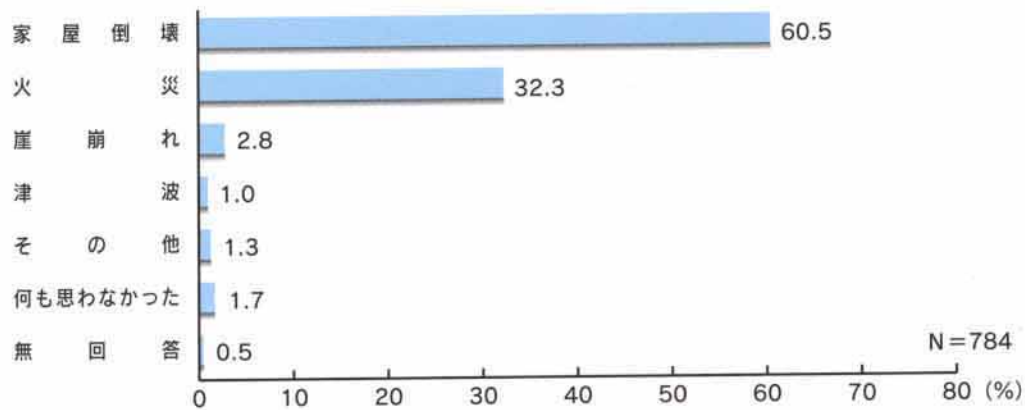


- 家具・調度品は鴨居に針金で転倒防止の予防措置をしていましたので、大きな被害は防げました。
- 阪神・淡路大震災があつてから、自宅の家具等をすべて固定していたので転倒したり、落下したものはなかった。ただし、家具と柱とを木ビスで強く固定していたので、家具の上部が水平に裂けていた物があつた。
- 自宅も地震に強い耐震構造住宅であつたため、今回の大地震でも被害は最小であつた。
- 神戸の地震を見てタンス等家具類を金具で固定していたので、家具等の転倒がなく被害が大変少なく助かりました。(内部の陶器類は仕方なかったです)
- 主人がモチ類が好きで、おはぎを冷凍して7日間、それで食いつないでいた。

4. 地震発生時に最も危険と感じたこと

問 地震が発生した時に、最も危険と感じたことは、何ですか。(○印は一つだけ)

ほとんどの人が「家屋倒壊」または「火災」を最も危険と感じている。



- 避難場所へ行くまで、家々の建っている所を通り抜けるのに屋根瓦また、窓ガラスの飛び散る危険があった。
- 隣の近くに原子力発電所があり、一番に異常がないかと不安になった。
- 私は二階にいましたが階段の側まで行くのがやっとで、柱につかまったまま身動きが

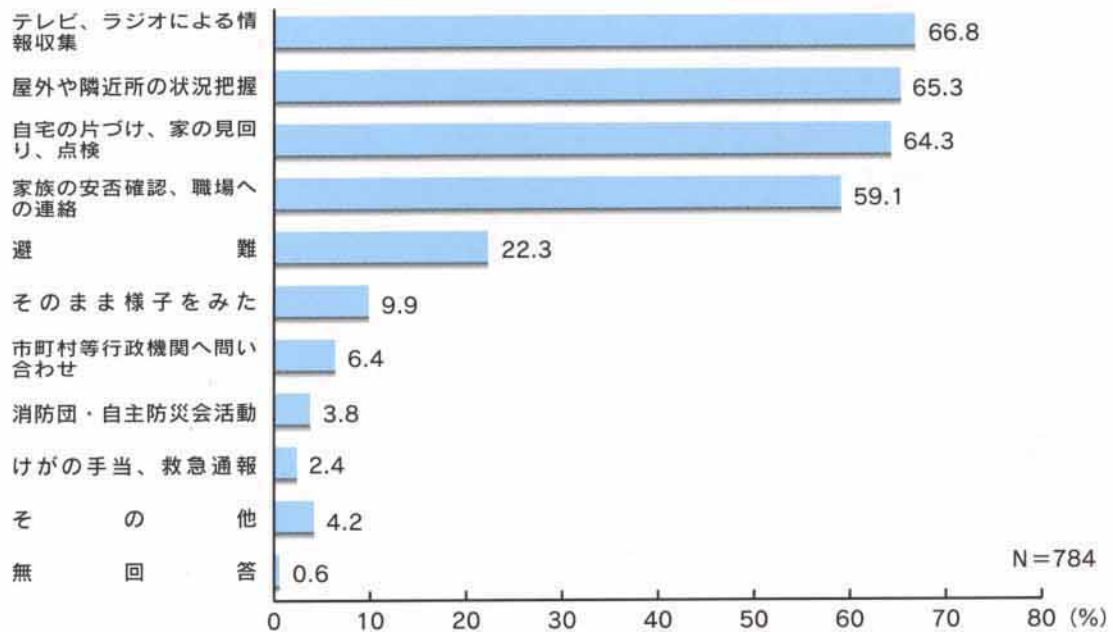
できませんでした。そして家がどちら側に倒れるかそればかり考えていました。

- 会社事務所の揺れは大変すごく事務所が倒壊しないかと一瞬机の下に体を入れました。揺れがおさまらず外に出ました。

5. 地震直後（2時間以内）の行動

問 地震の揺れがおさまった後、約2時間以内に行ったことは、何ですか。（あてはまるものすべてに○印）

地震直後の行動は、「情報収集」「自宅などの点検」「家族の安否確認」に集中している。

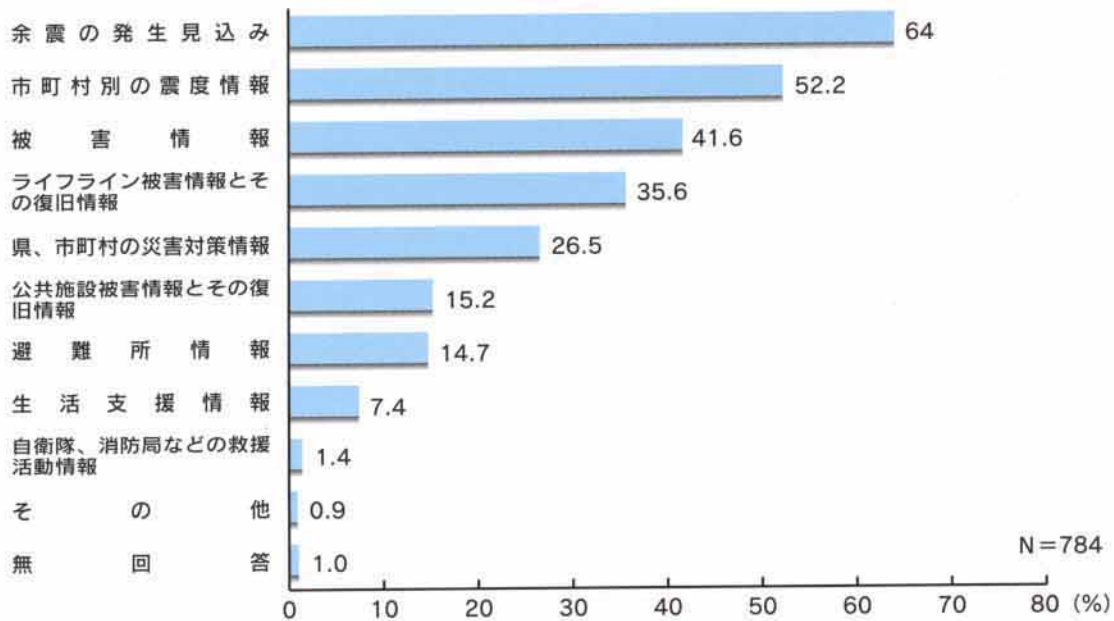


- 自分自身の家の直下が震源であるような感じがして、非常に不安であった。すぐに門前の道路へ出て、隣り近所と被害状況を確認しあった。
- 事前の夕食のために電気釜にお米を研いで準備していたので、電気が使えなくなる前にすぐスイッチを入れてご飯を炊きました。
- 民生委員のため、地震後速やかに「独り暮らしのお年寄り」の家へ、主人（自治会長）と共に巡回しました。
- 家への連絡をして安否の確認をしようにも混乱のため、通信連絡の手段がなく非常に心配であった。

6. 最初に知りたかった防災情報

問 地震発生後に、真っ先に知りたかった防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

半数以上の人々が地震発生後、最初に必要とした情報として、「余震の発生見込み」、「市町村別の震度情報」をあげている。



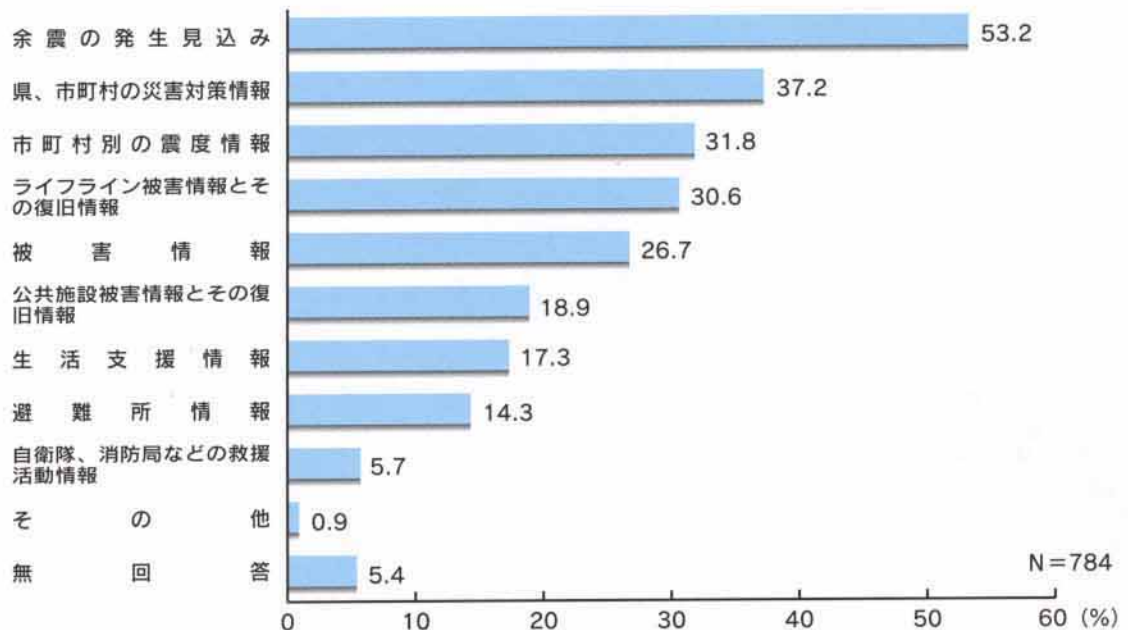
- 地震発生の見込みをしてもらいたかった。余震の見込みもなかった。
- 地域の情報提供や確認のルールやルート。
- 地震や活断層に関する専門的な情報が欲しい。

- 市町村別の震度情報の詳細を早々に知らせること。
- 余震の発生見込みをもっと詳しく知らせること。(テレビ・ラジオを通して)

7. 今後、充実すべき防災情報

問 知りたかった防災情報は、十分得られましたか。十分でなかった防災情報、今後充実すべき防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

今後充実すべき情報は、「余震の発生見込み」が5割以上を占め最も多く、次いで「県、市町村の災害対策情報」「市町村別の震度情報」と続いている。

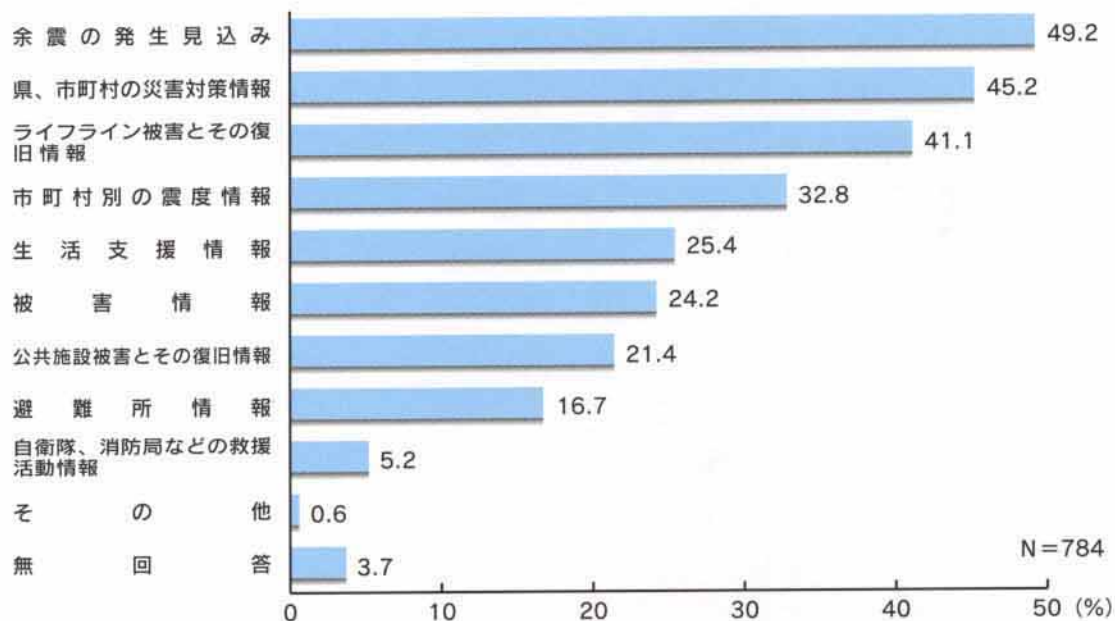


- 余震による不安感は大きかった。専門家による地震のメカニズム情報をもっと多く流していただきたい。情報が少なく非常に不安であった。各家庭への行政から災害情報を流す手段を検討していただきたい。
- 地震発生後（一週間位経ってから）新聞等では有識者により、「鳥取県西部に活断層があり、近い将来地震の発生が予測された」との記事が出た。何事にもよらず、事件が発生してから発表されることに対し、不満を感じると共にこれ等の大害予測を常日頃から掲載して欲しい。
- 学者は研究発表するが、その所在を自治体など公的機関が住民に具体的に情報開示しないので、住民としては不安である（防災マップなどで）
- 地震や活断層に関する調査・研究が進み、危険な地域、時期がある程度特定できるようになることを望みます。

8. 県、市町村が提供すべき防災情報

問 特に、県、市町村から提供すべき防災情報は、何ですか。(〇印は3つ以内)

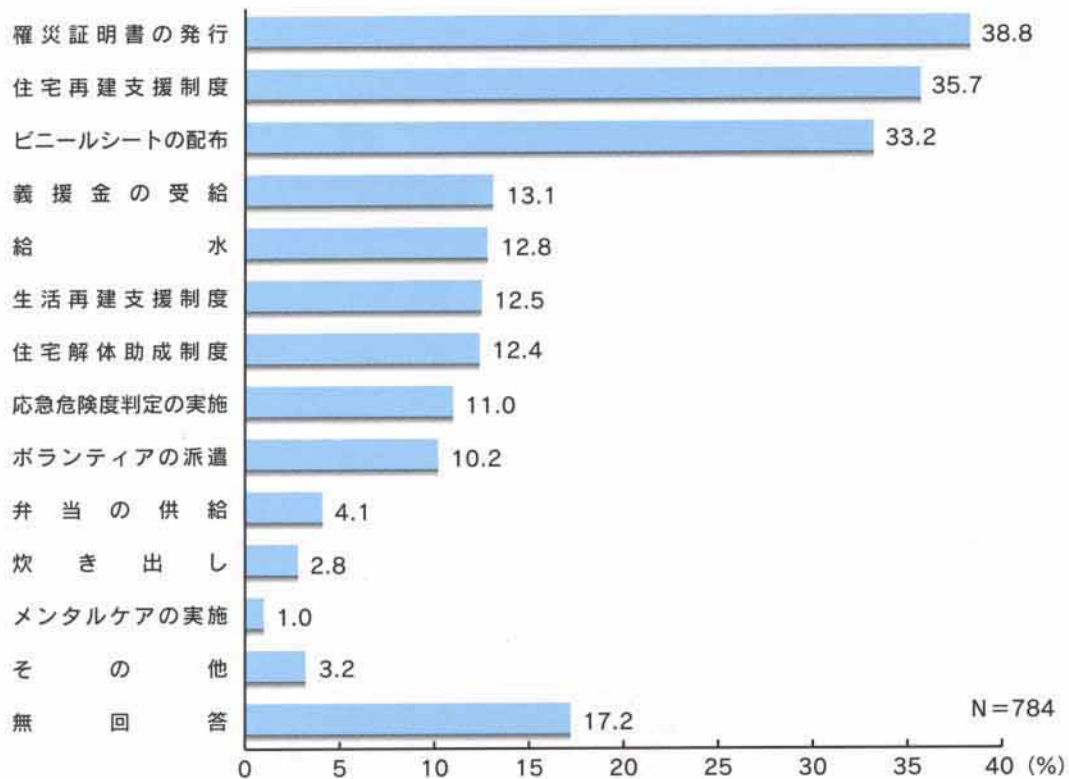
県、市町村から提供すべき防災情報として、「余震の発生見込み」が最も多く、次いで「県、市町村の災害対策情報」「ライフライン被害とその復旧情報」「市町村別の震度情報」などが続いている。



9. 有効だった災害対策

問 御家族にとって、とても有効であった災害対策は、何ですか。(○印は3つ以内)

「罹災証明書の発行」「住宅再建支援制度」「ビニールシートの配布」が有効だったという回答が多い。



- 家の損壊による補修資金の助成をしていただいて、本当に助かりました。災害を受け、落ち込んだ気持ちの時に一筋の希望の明かりを見つけた思いでした。
- 県知事、市町村の職員の方々、またボランティアの人々がいち早く一生懸命努力されて被害に遭われた方も心強かったと思います。
- 息子たち、兄姉、親戚、友人等遠方にいる人々たちからの連絡を「災害用伝言ダイヤル」

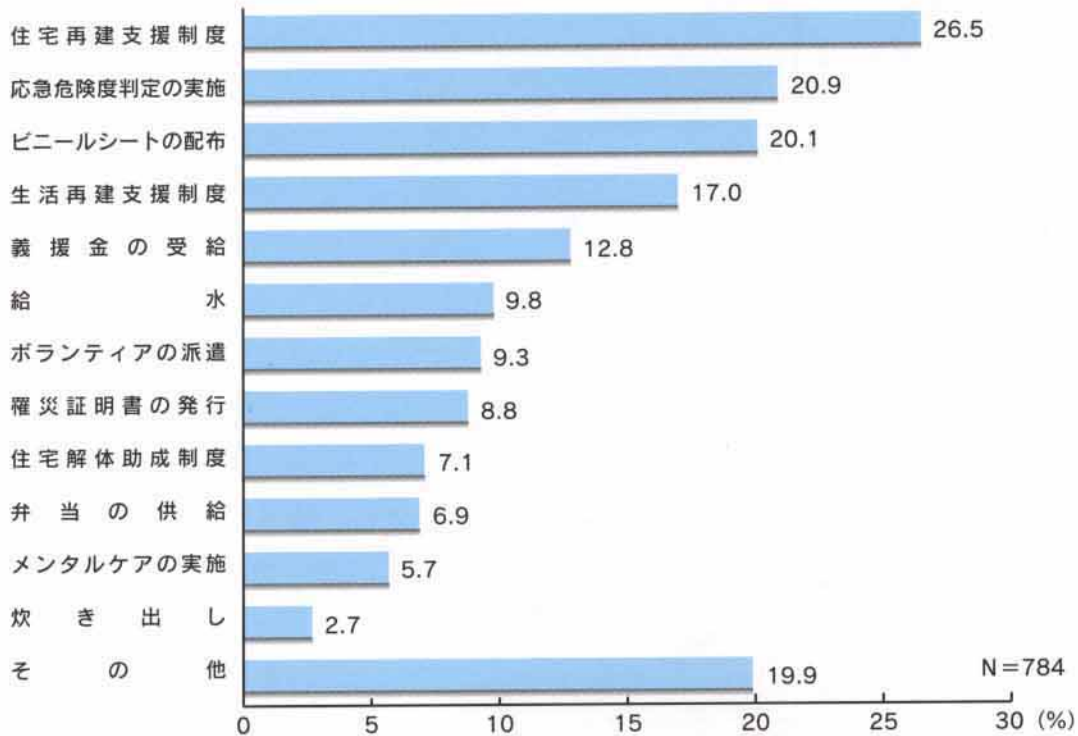
“171”ダイヤルで知ったことは、大変嬉しく励まされました。

- 住宅損害に対する補助金は額の大小はともかく、非常に心の支えになった。
- 片山知事の速やかな決断、対応はすばらしいと思う。この事により県民、被災地とも鳥取県は安心して暮らせるという精神的にも救われたような気がします。
- 奥日野温泉がその日から無料で入らせてくださった。涙が出るほどありがたかった。

10. とても不満と感じた災害対策

問 御家族にとって、とても不満と感じた災害対策は、何ですか。(○印は3つ以内)

不満を感じた災害対策は、上位に「住宅再建支援制度」「応急危険度判定の実施」「ビニールシートの配布」などがあがっている。なお、各項目の具体的な不満内容については、第4章・第1節「県民及び防災関係者が感じた災害対策の不十分な点」において後述する。

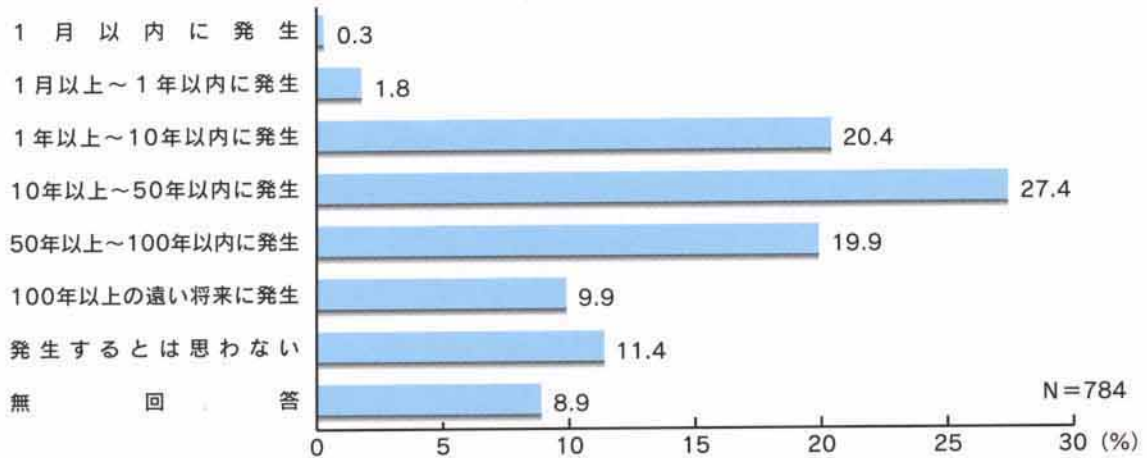


- 災害時に青色ビニールシートが配布され、各家庭にお配りいただきましたが、雨が降り出してもお年寄りの方々が多く、だれも屋根に上る人もなく困りました。
- 報道のヘリがうるさく、大切な市の放送が聞こえない。ヘリは1機使用し、むやみに飛来しないこと。不安をかきたてる。
- 行政機関の各被災者に対する見舞金、援助制度が各市町村によって違っていたこと。不公平の生じない一律の金額にて日本国民として扱って欲しい。
- 震災後、災害調査がなされ被害程度の罹災証明書を受けた。いつ、だれが調査されたか分からない。外観と中身は違います。
- 風呂も町中は自衛隊等が来て対応したみたいですが、私達は1週間も風呂なしでした。弁当も3日目から配布された、もう少し山間部も気にかけて欲しかった。
- 仕事場に防災無線(室内用)がなかったため、外に設置してある防災無線が頼りであったが、設置場所が悪いのか全く聞き取りにくかった。

11. 同規模の地震の発生の可能性

問 近い将来、鳥取県の西部地域で、同様の規模（マグニチュード7.0以上）の地震が発生すると思いますか。（○印は1つだけ）

今後、今回と同様の地震の発生については、「10年以上～50年以内」（27.4%）、「1年～10年以内」（20.4%）と50年以内に再び発生すると考える人が半数近くを占めている。

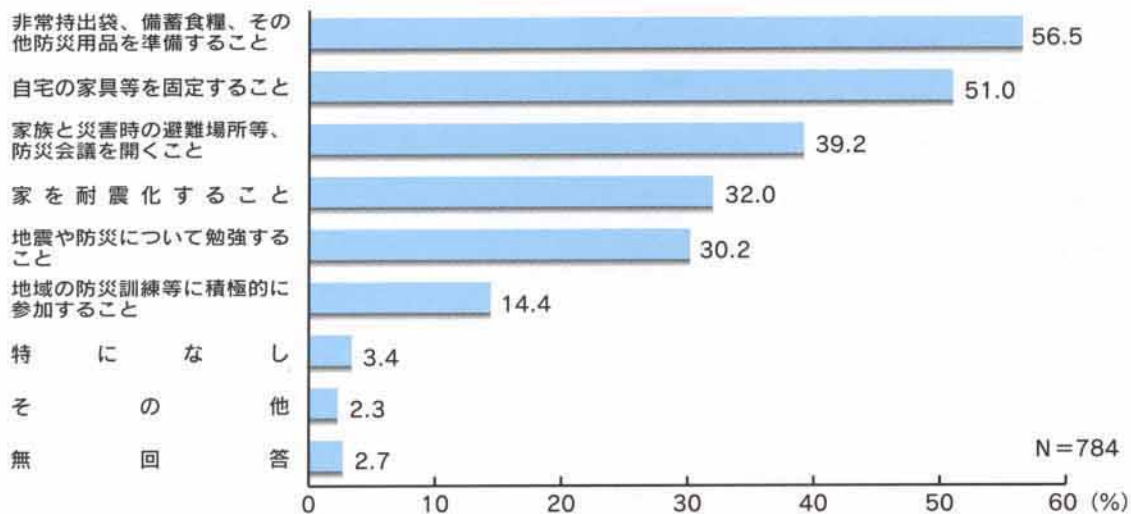


- 鳥取地震より58～59年目に鳥取県西部地震があったのだから、また60年先くらいに地震があると思った方が良い。
- 鳥取県西部地域でマグニチュード7.3の地震が発生するとは思わなかったが、今後50年～100年以内に発生する可能性はあると思う。
- これからは日本列島も活動期になったみたいなので、普段から地震に対する知識をもって対応したいと思う。
- これにより近い将来、再び発生するかもしれないと思っています。

12. 家族で取り組みたい防災対策

問 今回の地震を契機に、御家族で取り組みたい防災対策は、何ですか。(○印は3つ以内)

今後、家族で取り組みたい防災対策には、「非常持出袋、備蓄食糧、その他防災用品を準備すること」「自宅の家具等を固定すること」「家族と災害時の避難場所等、防災会議を開くこと」などの項目が続いている。



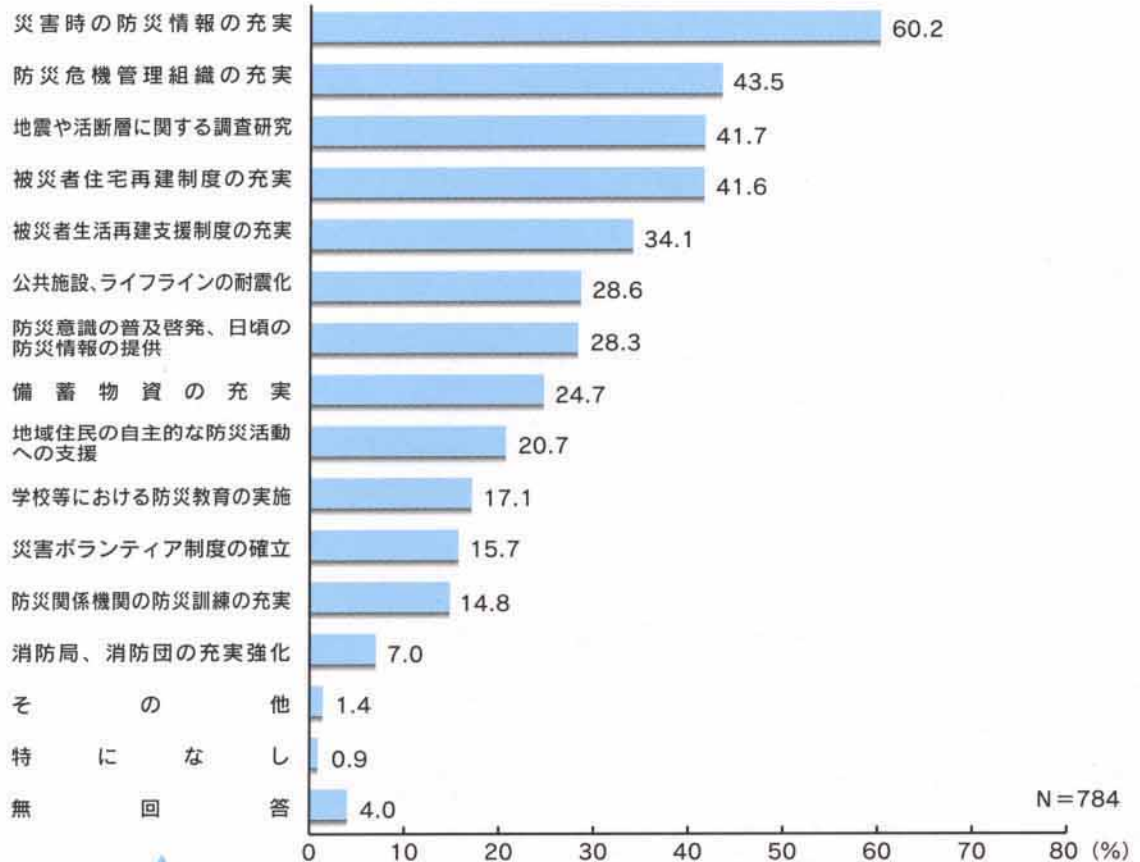
- 対策として、5KW程度の発電機と20時間くらいそれを動かす油の用意をしておきたいと思った。もう一つは、飲み水(ペットボトル3本程度)を用意しておくこと。
- 家の改築時には耐震化するようにしようと思う。備蓄食糧・防災用品を準備しようと思っている。

- 地震や防災対策について、家族で話し合ったり勉強しないといけない。
- 発生直後の周囲の状況判断が甘いと思った。やはり、日頃から判断訓練を今後するように心がけております。
- 日頃から家族一人一人についてどう役割分担して動くか考えていく必要がある。

13. 県・市町村で早急に強化すべき防災対策

問 今回の地震を契機に、県や市町村で早急に防災対策を強化すべきと考えることは、何ですか。(○印は5つ以内)

早急に強化すべき防災対策として、「災害時の防災情報の充実」が最も多く、次いで「防災危機管理組織の充実」「地震や活断層に関する調査研究」「被災者住宅再建制度の充実」「被災者生活再建支援制度の充実」などが続いている。



- 1 部落に 1 箇所くらい、赤電話を付けてもらいたい。
- 市町村、広域行政の連携について改めて、地域住民によく分かる救済対応など考え直して欲しい。
- 県や市町村に防災の認識を再度検討してもらって、今の現状でなくもっと充実した防災計画やチェックリストの作成を早期にてもらいたいのと、器材の装備をお願いしたい。
- これを教訓に我が家でも対策を講じることはもちろん、地域（町内）でも情報交換や防災組織作りをし、助け合っている町づくりが必要だと感じました。
- 突然の災害の時、どこに避難すれば良いかわからないので、緊急の時のために地区の住民の人にどこへ逃げると良いかを指導しておいて欲しいと思いました。
- 集落と町部との交通手段を早急に確保することが一番大切なことと痛感した。

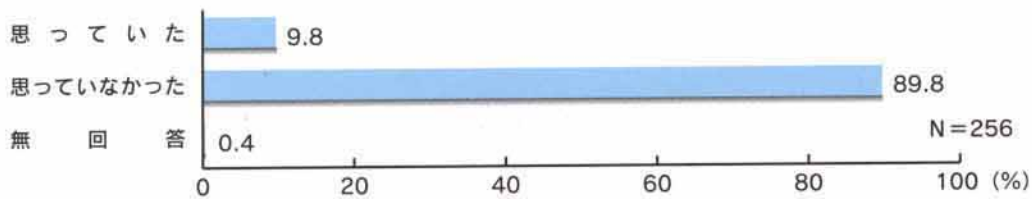
第3節 防災関係者アンケート調査結果

I 地震発生時の状況

1. 地震発生の予想

問 鳥取県西部地震のような大きな地震が、近々発生すると思っていましたか。
(○印は一つだけ)

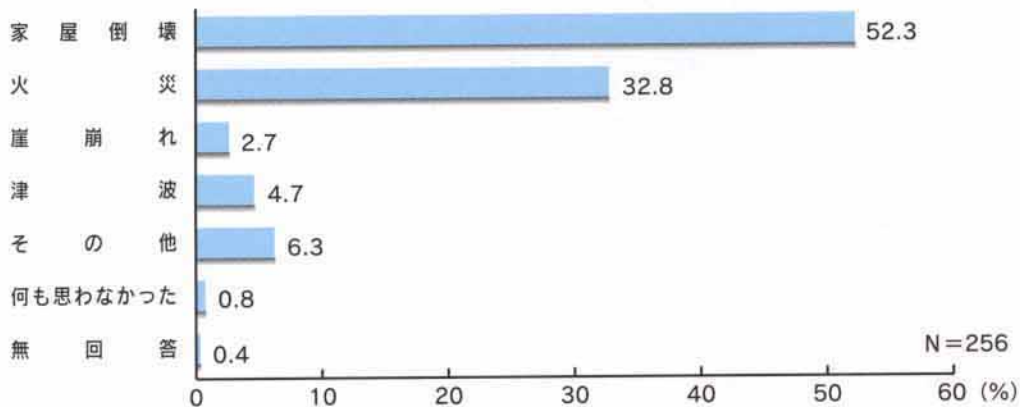
約9割の人がこのような大きな地震の発生を予期していなかった。



2. 地震発生時に最も危険と感じたこと

問 地震が発生した時に、最も危険と感じたことは、何ですか。(○印は一つだけ)

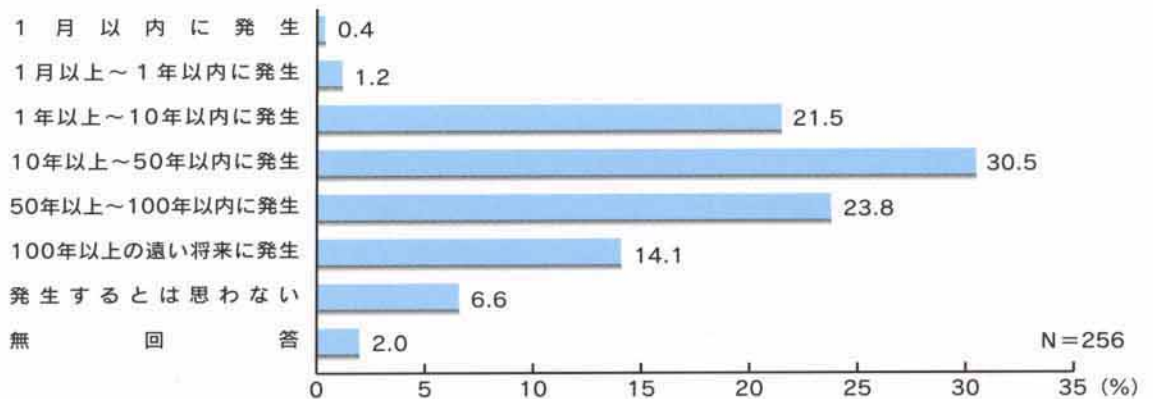
多くの人が、「家屋倒壊」または「火災」の発生を最も危険に感じている。



3. 同規模の地震の発生の可能性

問 近い将来、鳥取県の西部地域で、同様の規模（マグニチュード7.0以上）の地震が発生すると思いますか。（○印は一つだけ）

今後、今回と同様の地震の発生については、「1年以上～10年以内」（21.5%）、「10年以上～50年以内」（21.5%）と50年以内に発生すると考える人が半数以上を占めている。

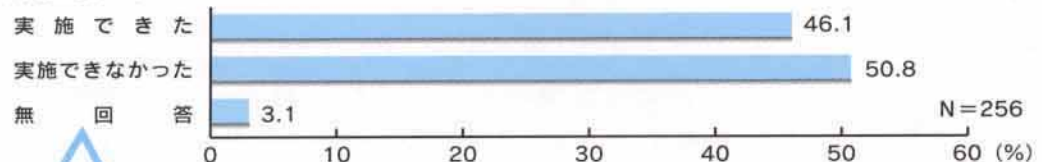


II 防災活動の状況

1. 防災活動の実施

問 地震発生後のあなたの防災活動について、普段考えていたとおり実行できましたか。（○印は一つだけ）

「（普段どおりに）実施できた」（46.1%）、「（普段どおりに）実施できなかった」（50.8%）がほぼ同程度となっている。

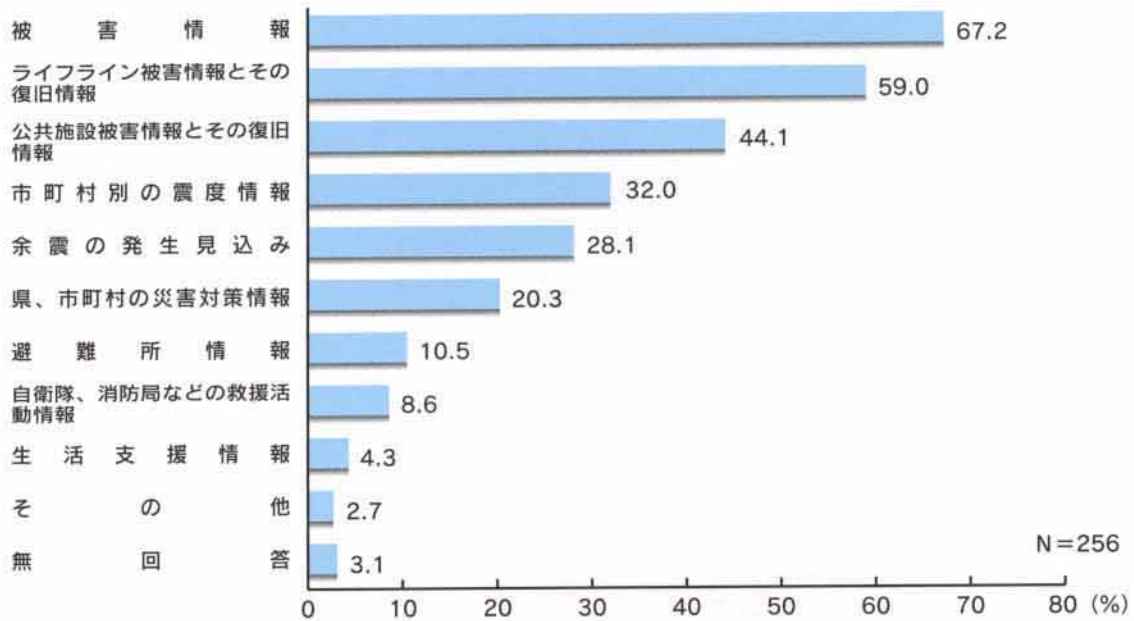


- 予測と実際の体験ではかなりの行動が違う。
（日頃からの訓練等により、冷静な判断ができるようにしておきたい）
- 主な被災地については災害発生直後に職員を現地に派遣し、水道の断水、水の濁り、家屋の倒壊、道路水路の破壊等についてまのあたりに見る（見てこさせる）ことができた。
- 鉄道業の使命である安全を確保すること。
列車を抑止して、安全点検を実施し、安全確認ができた時点で公共交通機関としての役割が果たせたこと。
- 阪神・淡路大震災を体験していたので、対応は素早く対応できたと思っている。
- 職員が地震発生後、直ちに所管の水力発電施設、工業用水道施設の被害状況の調査点検を行って迅速に所要の対応をし、応急復旧工事を早期に完了させた。
- 勤務時間であったこともあり、道路部の職員がすぐに災害対策室に集合し、対応できた。
- 地震発生時に思い描いていた様に全く動けなかった。
- 過去会社内での災害対策業務の経験から地震発生後の初動体制等ある程度対応が円滑にできたと思った。

2. 防災活動のために最初に必要とした防災情報

問 地震発生後、防災活動のために真っ先に必要とした防災情報は、何ですか。
(○印は3つ以内)

防災活動を行う上で、最初に必要となった情報は、「被害情報」「ライフライン被害情報とその復旧情報」「公共施設被害情報とその復旧情報」などが上位を占めている。



- 現地の情報が詳しく分からなくて、服装、準備品に戸惑った。情報をできるだけ集めて、その状況に応じた心と身体の準備をして行動することが大切だと思った。支援活動に行く時のマニュアルが必要だと思った。
- とりあえず当社の被害状況の把握に努めました。
- 地震発生時に一番必要とする通信手段が取れなく（電話不通）、職員や家族の安否確認、家屋の被害情報がかみかず不安であった。
(また、出先機関との連絡が取れず、情報収

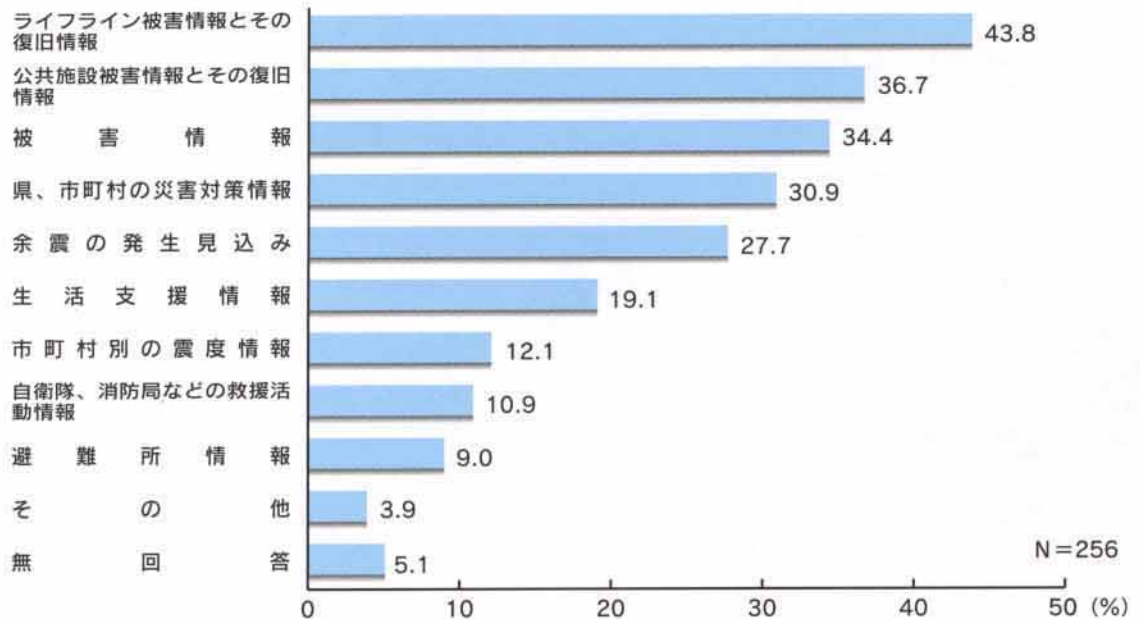
集に困難を極めた)

- 電力設備を維持している職務上、地震による設備被害の状況を確認することと停電している箇所の早期復旧を最優先して仕事に当たった。
- 教育委員会と連絡をとり、ただちに家庭へ生徒の安否を知らせること、無事に帰宅させることを最優先に考え、防災無線等を使って全家庭に全員無事に保護者の元へ子どもを帰すことができた。

3. 十分得られなかった防災情報

問 必要とした防災情報は、十分得られましたか。十分でなかった防災情報、今後充実すべき防災情報は何か。(○印は3つ以内)

必要としていた情報で十分得られなかった情報は、「ライフライン被害情報とその復旧情報」「公共施設被害情報とその復旧情報」「被害情報」などが上位を占めている。

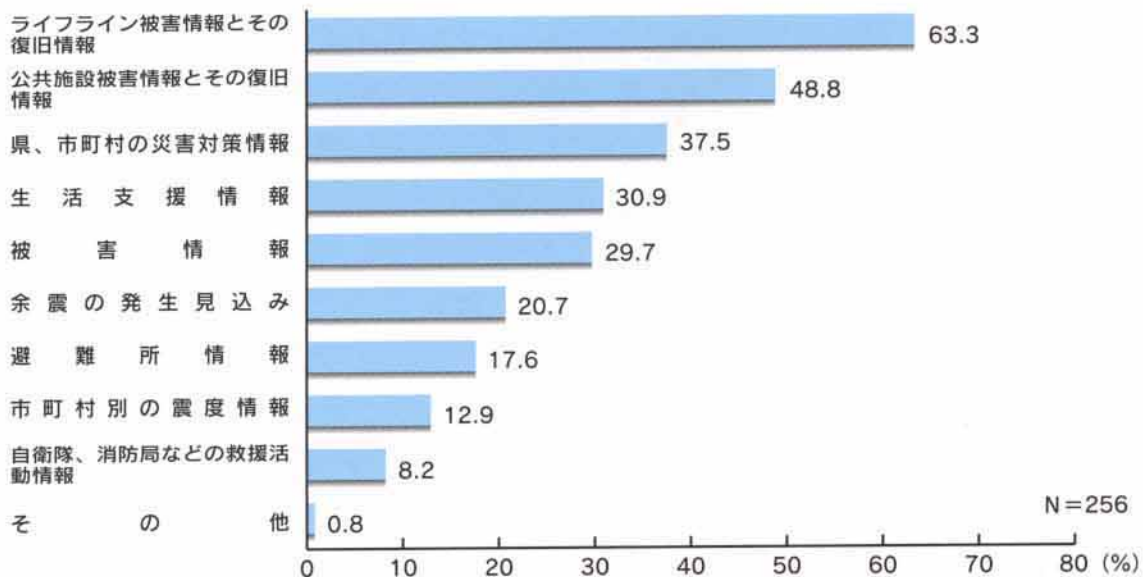


- ガスの供給状況、被害状況が分からずやきもきした。
- 公的な職業に従事しているが、情報が少なく大部分をマスコミに頼っていた状態である。
- 江府町の震度計は気象庁と連動されていないため、大変住民に不安を与えた。
- 海が近く、海岸にいる人々に災害情報を早く伝える方法がみつからなかった。
- 地震発生直後に被災地に通じる道路の通行状況の把握が困難であった。
- ラジオによる情報が一番伝達される確率がよく、テレビによる情報は家屋内の倒壊等、電源の確保が難しいために困難である。
- 携帯電話が不通となるなど、リアルタイムの情報が入りにくかった。

4. 県、市町村から提供すべき防災情報

問 特に、県、市町村から提供すべき防災情報は、何ですか。(〇印は3つ以内)

防災関係機関が、県や市町村から提供してほしい情報は、「ライフライン被害情報とその復旧情報」「公共施設被害情報とその復旧情報」「県、市町村の災害対策情報」などが上位を占めている。



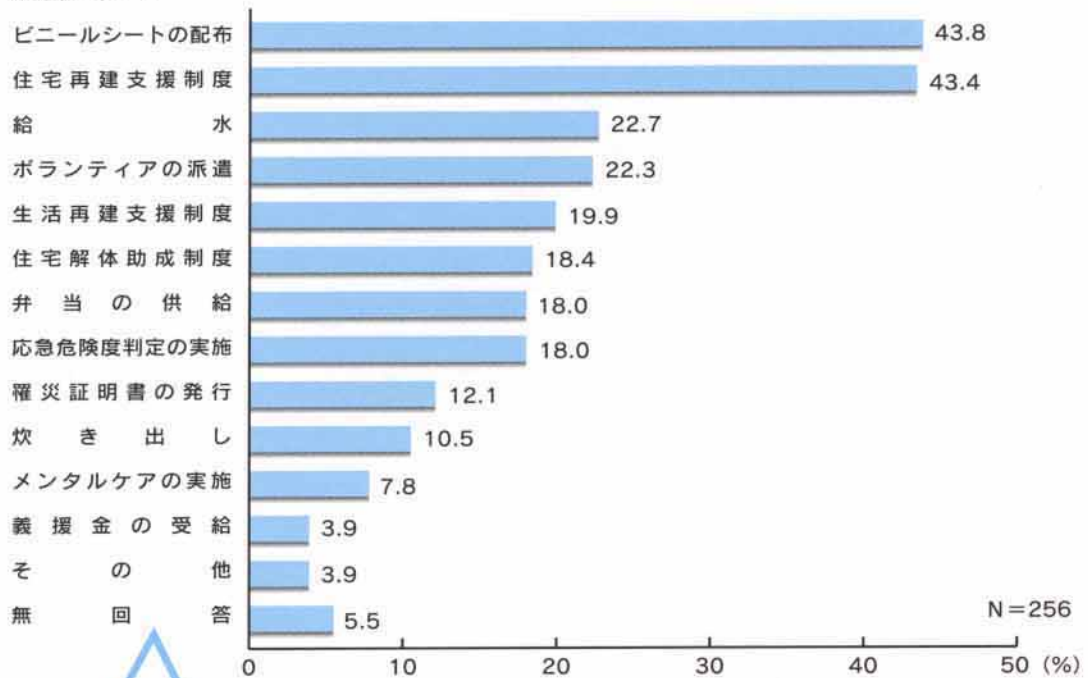
- 県から県下各消防局への速やかな情報提供が必要。県が把握した、各消防局、警察、自衛隊、市町村、病院等からの情報を集約した災害情報のフィードバックが必要。緊急消防援助隊情報。
- 被害状況がどの程度でボランティアが派遣してもらえるのか、また、1人世帯の老人等は利用する方法を知らない面もあり、市町村での今後検討が必要。
- 県の広報活動について、チラシを作成し配布するのは良いが、被災市町村に対して送り付けるだけではどうかと思う。

- 県・町の対応が早かったことは大変良かった。逆に早過ぎて内容があいまいで判断しにくい所もあった(災害復旧融資制度。特に運転資金の取扱い)
- 県・市町村の災害対策情報をTV(例えばNHK)やインターネットで迅速に広報することが有効と思う。
- 日野町の災害情報がいち早く流れてよかった。
- 生活支援策の広報が遅れたことが生活不安を助長したように思う。

5. 有効であった災害対策

問 今回の震災対策で、特に有効であった災害対策は、何だと思いませんか。
(○印は3つ以内)

災害対策として、有効だった対策は、「ビニールシートの配布」「住宅再建支援制度」が圧倒的に多い。



- 知事ら県幹部の被災地視察が早い。また、国会議員らの現地視察も多く、しかも早いなど対応が良かった。やはり、まずは災害のあった現場を見るのが先決だと思う。
- 県・町の対応が早くてよかった。ボランティアの人が多く集合してよかった。
- グランドには何ひとつ情報が入らないので、余震は続いていたが職員の手をグランドに入れ、ラジオで情報収集しました。
- 災害時の避難場所、役割等ができていたので、その役割分担がこの度生かされ、お年寄りから子供まで迷うことなく避難所へ誘導でき、避難しないですむ家も一軒一軒確認して区民全員迷わず、過ごされたことは10年以上やって来たコミュニティの結果と思っています。
- 地震直後、職員の1人が全館放送で「慌てないで落ちついてください。職員の指示に従って行動をお願いします」との機転の放送で、随分心が安らいだ旨、後刻聞きおよび良い行動

だったと思いました。

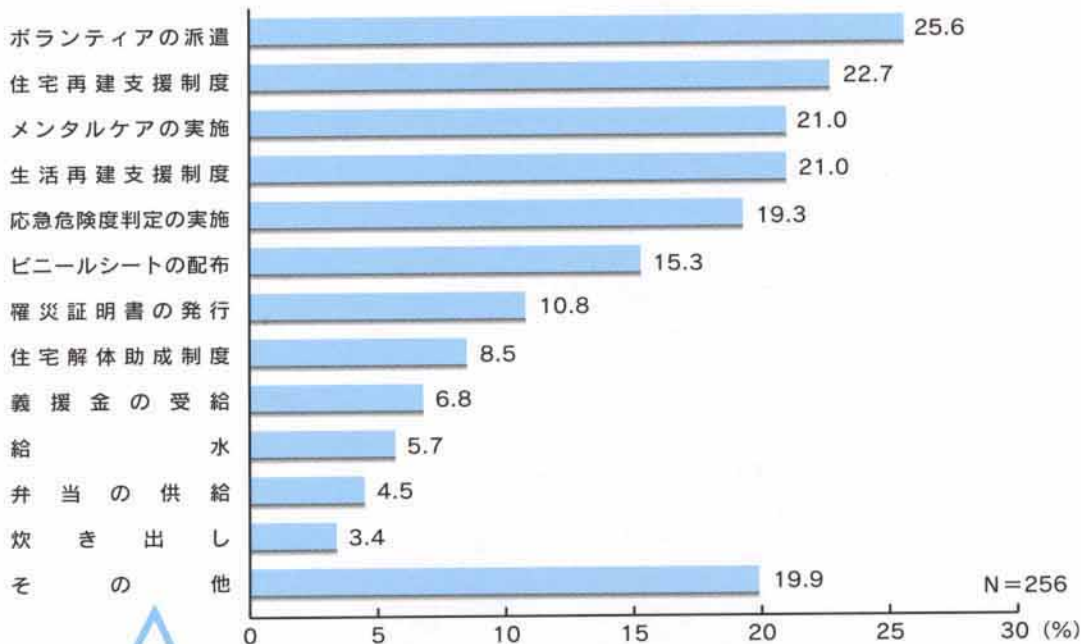
- 知事の動き・判断・決断・実行の早さが結果的に被災者の大きな安心感等につながったと思う。
- 食糧や応急物資等も被災地であった米子市等から調達できたのは幸いだった。
- ボランティア活動には感激しました。また特に役場職員は皆必死に頑張っており、ライフラインの復旧に努力してくれた。
- 全国に先駆けて緊急を要する中での“住宅再建支援制度”“住宅解体・助成制度”が制度化されたことは評価されると思います。
- 自らの災害復興のみならず地域の自衛消防団や地域のボランティア組織の一員として、地域が一体となって復興に取り組めた事はすばらしいことであると思う。
- 行政の対応の早さや防災無線の重要性、情報の的確さ等、行政が県民や町民のために本当に親身になっての対応に敬服します。

6. 不十分であった災害対策

問 今回の震災対策で、不十分であったと思われる災害対策は、何だと思えますか。
(○印は3つ以内)

「ボランティアの派遣」「住宅再建支援制度」「メンタルケアの実施」「生活再建支援制度」「応急危険度判定の実施」などが上位を占めている。

なお、この災害対策が不十分だと感じた回答者が多い内容については、第4章・第1節「県民及び防災関係者が感じた災害対策の不十分な点」において記載している。



- 地震による災害も判明し、緊急な出勤もなく落ち着いてくると、長期間勤務したことによる精神的なストレスが溜まり、それを取り除くために苦勞した（一時、隊員同士が衝突することもあった）
- 復旧作業を行うに際し、緊急的に対応できる土木業者が少なく（作業員、機械等の確保）苦勞した。
- 援助、復旧よりも報道のみを優先し、活動の大きな妨げになった報道陣に対しても猛省を促したい。今の報道陣の本質を表しているものだと感じた。
- 被害調査を急がせ過ぎた。ライフライン関連のみに絞り、その他はあとにすればよかったが、かなり上層部から数字に対する

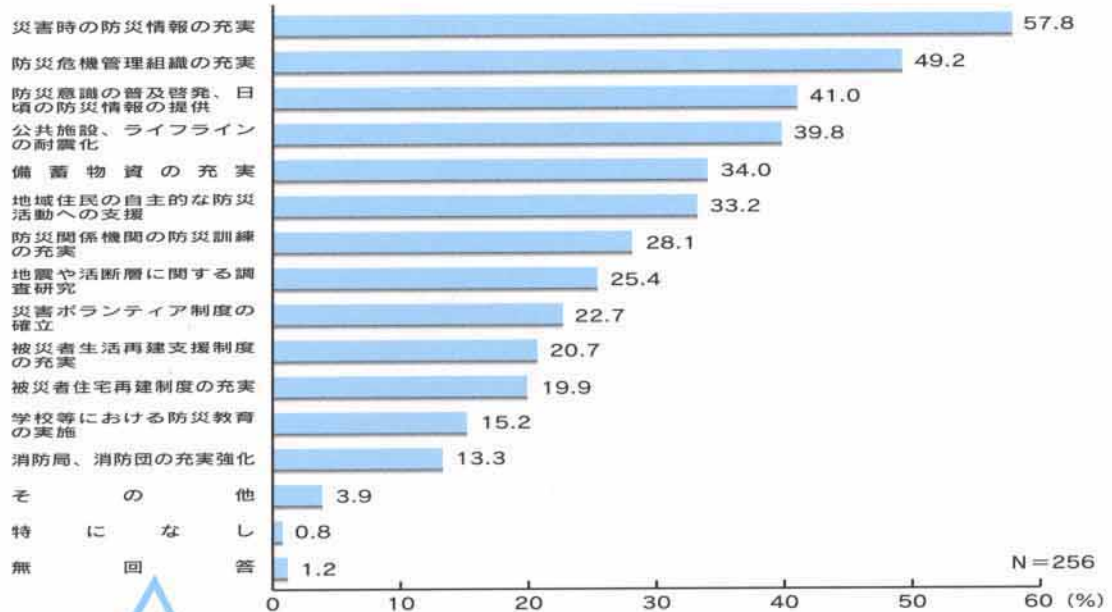
プレッシャーがかかり、出先へ無理を言った。今後は担当レベルで調整を行い、出先の状況にあった調査進行を行いたい。

- 震災発生時、最初に電話で情報収集したが、実際に市町村に派遣され感じたこととして、県の各部局からの電話がとにかく多すぎる（同じ内容の電話が多い）。電話対応だけのために時間がとられ、震災対策に支障が出ていた。
- 大規模災害時対応マニュアルがあるのに、皆が内容をよく知らず活用できなかった。
- 罹災証明について、各市町村によって判定のばらつきがあったため、県全体でマニュアルの確立ができていたらと考える次第です。緊急時にばらつきが出てしまったのも仕方ないことです。

7. 県、市町村で早急に強化すべき防災対策

問 今回の地震を契機に、県や市町村で早急に防災対策を強化する必要があると考えられることは、何ですか。(○印は5つ以内)

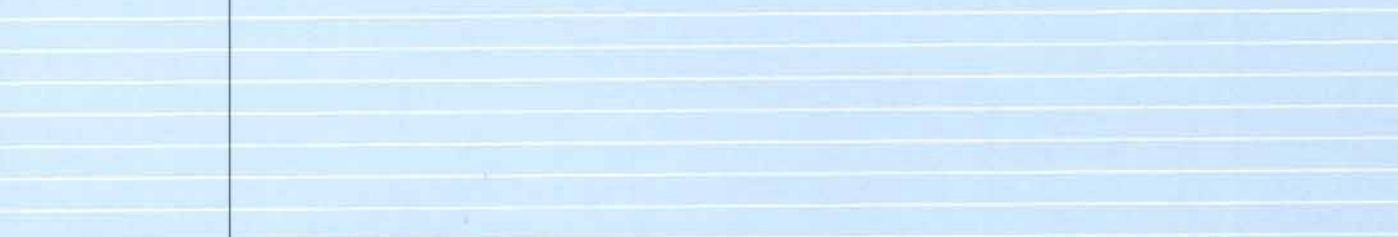
早急に強化すべき防災対策として、「災害時の防災情報の充実」が最も多く、次いで「防災危機管理組織の充実」「防災意識の普及啓発、日頃の防災情報の提供」「公共施設、ライフラインの耐震化」などが続いている。



- バイパス的な道路、あるいは農道等があることによって交通が麻痺することなく、住民生活も保たれた。生活に必要な道路網の整備は絶対に必要だと痛感いたしました。
- 震災発生後、各市町村毎に速やかに県職員を張り付け、この職員が県と市町村の間に立つことが良い。県職員は、少なくとも普段から各市町村の事業関係担当者とは面識を持つべきであるし、被災地への説明や巡回を行う職員は、そのような職員を派遣すべき。
- 県、市町村対策本部への職員派遣を行い、情報の収集、効果的な災害応援出動を行うことが必要（市町村へはすでに派遣している）
- 住宅復興補助制度について、事業主体である市町村の判断によって運用にバラツキがあり、不公平感をもたれる場合があった。今回は急遽、立ち上げた制度であり、やむを得ないが市町村にあらかじめ趣旨をよく説明した上で、ある程度統一した制度にしたほうが良い（補助金額申請期限など）
- 地元CATV局などを災害情報提供により一層積極的に活用しても良いのではないかと。
- 震災発生による日々よりの対策マニュアルの整備と即応体制の強化。
- 被害状況について、報道・消防・警察・県等からの問い合わせがあったが、復旧作業で忙しい中、何回も繰り返しになるので、情報の一本化が必要だと思った。
- 機転の利く人材の育成を行う。
- 被災市町村と県の情報一本化が必要。応援出動についても、当該市町村と県の意思が異なるとは、効果が発揮できない。
- 今回必要とされた物資の種類や量から、あらゆるケースを想定して、緊急物資のリスト、調達先や輸送方法等のマニュアル、現地で調達できない場合の支援体制などを構築する必要があると思われる。
- 住宅復興補助金は制度としては、一定の評価がされると思うが、適用者の範囲等でもっと検討する必要があるのではないかと考えている。

第 3 章

体験談



第3章 体験談

第1節 県民の地震体験談

体験談1

男性、40歳代、会見町

家族構成：本人・妻・子供（3人）・母の6人

住居：木造2階建／半壊

年寄りだけの町を襲った大地震、みんな無事でよかった！

●石垣が波打ち、すべて崩れている！

仕事で遅い昼食を家で取っていたときに、グッと急に家全体が揺れて、茶たんすや食器棚の上の物が宙を舞って落ち、ガラスは大きな音を立てて全て割れました。

傍にいた母親を抱えるように安全な部屋へ移動させ、上から私が覆い被さりテーブルの下にしゃがみ、揺れが収まるまで身体に力をグッと入れて石のように固まってジッとしていました。

いつまでも家の中にいてもいけないと思い、外に出ようと思いました。母は「外に出ると何が落ちてくるか分からないので出ない」と出ようとしませんでした。しかし、家が崩れてしまっただけで済まないと思い「とり合えず広い所まで出よう」と、大急ぎで大通りまで出ました。

外に出てみると、蔵のひさしや壁、瓦が落ちてあちこちに散在し、ふと見ると、下の家の石垣（ブロック）が全部崩れ落ち、近くの家の石垣も波を打って崩れ落ち、異様な光景でした。

●昼間は年寄りだけの町

会見町は兼業農家が多く、昼間は若い者は米子市近郊に出てしまっていますし、定年退職をして

も元気な人は再就職をしています。ですから、いざ何かあった時に残っているのは年寄りばかりなのです。年寄りの人を災害の時に、誰がどのように見てあげるかという事がいつも頭にありました。当部落区長も出先から即刻帰ってこられたので、一緒になって各家の人たちに声をかけて廻りました。また、同時に公民館を開放して地元にいる若い人が手分けをして生活保護を受けている家庭などをみて廻りました。

この地震の余震が結構続き、どのような状況でもすぐ飛んで出られるように、寝る時も普段の服に靴下も履いて寝ていました。隣家でも、余震が続くものだから、近くの公園にテントを張って過ごしたり、軽トラックの後ろにシートをつけて、その中に寝ている人もいました。

●水の大切さが・・・

一番困ったのは、水道の水が茶褐色になってしまい飲めなくなったことです。ありがたい事に、自衛隊の給水車や米子市が水を汲んで持って来てくれたり、災害の少ない近隣の市町村から水を貰ったりして、凌ぎました。

水はポリタンクで1日3回位の給水。食事は

伝えたいこと 教訓

- 自主防衛意識の高揚として、初動と地震の対処方法を家族に周知徹底すること。(米子市、男性、70代)
- 地震がいつ来てもいいように、備えを偏りなくやろうと思う。(米子市、女性、50代)
- 各市町村に震災の写真・資料等を残してお

- いて欲しい。(米子市、男性、50代)
- 自分の身は自分で守ることと隣、近所と情報交換すべし。(米子市、女性、50代)
- 日本列島は地震列島で、どこでも起こりうる。備えは、自分でできることはできる限りやっておくこと。(米子市、女性、50代)

貰った水で賄いましたが、風呂には到底入れません。皆生温泉などの協力により無料で入浴させてもらいました。初めの内は温泉に入れてよかったのですが、通っているうちに帰るのが遅くなるので、最後は、多少濁った水や貰った水を入れて沸かして風呂に使っていました。

田んぼの水不足などは経験した事がありますが、飲み水がないという事は本当に大変な事だと思いました。水のありがたさを痛感しました。

●重要な余震情報がテレビに流れない

一番気になる情報は余震の情報だったのですが、なぜか会見町だけがテレビの余震情報として流れないのです。地震があるたびに、テレビにかじりついて「いまの余震は、どれくらい？どこが一番大きい？」と、目を白黒して見るのですが全く流れないのです。

各市町村の震度計のデータは、気象庁に行くものと科学技術庁に行くものがあり、気象庁にデータが行くものはテレビに表示されるそうです。会見町に設置した震度計が科学技術庁にデータが行く為に、テレビで地震情報が流れなかったのです。地震情報がテレビに流れないので、町長にもいろいろな町民から様々な問い合わせがあり、急遽、町内に震度計を設置するようになったようです。

●納屋も住宅再建支援の対象に

今回の住宅再建支援制度には、住んでいる家屋でないと対象にならなく、土蔵や納屋などには全く補助的支援は出ません。全部自己負担をして修繕しなければいけません。

会見町では、溝口町のように一律何万円ということはありませんでしたが、負担額をかなり軽減していただき、援助的なものはしていただけるようにはなっています。しかし、町では必要ないものでも、農業を中心に行っている所ですと、一つの小屋や物を入れる農業車庫や作業所がどうしても必要になります。農業に必要な物として、普通の

サラリーマンでは必要ない部分での建物・機具を持っているので、生活に必要という部分で、今後何らかの支援等を考えてほしいと思います。

●悪質業者に困った

震災後に困ったのは、県外から来る悪質業者です。我が家も昼間に年寄りが留守番をしていると、屋根にビニールシートを掛けているのを見て、1日に3~4人も建築業者がやってきました。見積りを頼むとあまりにも法外な見積りで、断ろうとすると、嫌な顔をして、「見積りまでしたんだから」と、今度は強制的に契約を交わそうとするのです。

今後は役場や行政を通さなければ、災害時の業者は受け付けないというような窓口を作り、信用できる業者の斡旋が必要なのではないでしょうか。行政からの許可書みたいなものを作れば、みなさんが安心して話、契約が出来ると思います。解体業者にしても同じだと思います。

●この記録を教訓として残すべき

この体験は、1年経ち、2年経ち、人間は誰でも忘れていきます。ですから、1年後の10月6日に「鳥取県西部地震」の1年を振り返り、“あなたの家庭にはこういうような緊急時の準備は出来ていますか？”という事を常に投げかけていかなければ、いざという時には何もできないと思います。

その為にも、記録・資料を残し、全戸に資料配布を出来たらいいと思います。自然災害についての勉強・研修や訓練が必要ではないでしょうか。火災は、年に1回程、消火器の使い方や入れ替え等の訓練的なものをするのですが、地震などの天災はまったく訓練も何もしていません。真剣に訓練が必要だと感じました。

災害を防ぐことができない我々ですが、老人の多いこの町で、災害時にただ声をかけるだけでもいいので、部落の人に町内ボランティア制度導入の提案を投げかけています。まだ具体的なものではありませんが、地元にいる人が災害時に、老人宅などを優先的に見て廻るような体制にしたいと話しています。

- 宅地の地盤について調べておくこと。(米子市、男性、70代)
- 建物を建てる時は、地盤をしっかり調査し、土台をしっかりすること。(米子市、女性、60代)
- 家具の固定は絶対に必要。仏壇も転倒したので居間の家具類は、特に気を付けること。(米子市、男性、70代)

- 家屋の建築は、平屋建築で軽量の構造がよいと思います。(米子市、男性、60代)
- 被災者住宅再建制度・被災者生活再建制度の充実について検討をお願いします。(米子市、男性、70代)

体験談2

西伯町、女性、70歳代
家族構成：本人・夫の2人
住居：木造平屋建／半壊



病弱な夫を気遣い自転車で帰る途中に道路の亀裂で転倒

●道の亀裂にはまり、自転車ごと転倒

稲こきのお手伝いに行った田んぼの中で地震に遭いました。ザワザワッと稲穂が揺れだし、地面の奥深くからゴーという地鳴りが響きはじめ、ふと山を見ると山全体が大きく波打っているではありませんか。家に被害があつてはいけないと思い、主人も体の調子がよくないので、心配になり急いであせ道を自転車で帰ったのです。

途中、道路に大きな亀裂が入っていました。その亀裂に自転車ごとにはまり込み、顔を打ち、口の周辺を数針縫うほどのケガをし、血だらけになりながら家に向かいました。

●被害の状況は

家に帰ってみると炊事場が滅茶苦茶になっていました。戸は落ち、サッシ、障子、仏壇が全て倒れていたのです。座敷も陥没しており、たくさんの亀裂が出来、本当にすごい状態でした。

水道管が破裂し、水が使えないために10日間位、嫁いだ娘の所に避難していました。傷の手当てをしながら、昼間に家に帰り片付けをする毎日が続きました。

水道が使えないのは大変困りました。地震前は山水があり、井戸に溜まった水を汲み上げて使っていましたが、今回の地震で水が出なくなってしまいました。

親戚中が片付けを手伝いにやってきてくれましたが、なかなか思うように片付きませんでした。瓦も落ち、便所の壁も落ち、風呂も段差が出来て使えません。電気は大丈夫でした。それでも余震で家が倒壊するのではないかと心配で、公民館や

避難所での炊き出しにいかせてもらいました。本当に助かりました。

家も斜めになった為に全部建具も削り、隙間がないようにしてもらいましたが、修繕するまではふすまや障子を閉めていてもスースー風が入り、心もすさぶような日々が続きました。

しかし、唯一「助かったなあ」と思ったのは、修繕の費用として高齢者の家庭に出る補助が10万円位出たことと、農協の建物共済から90万円程出たことでした。

大体の人が入るのは火災保険ですから、地震保険は余程の人でないと考えないと思います。そのうえ、今まで全ての建物に入っていたのですが、2年前前から各建物毎に入らないといけなかったと言われ、一部の契約に変えたばかりでした。そのため一部しか出ませんでした。

●鳥取大震災の体験が

主人は、鳥取大震災を体験しています。その為か、今回は寝ていた時に地震が来たのですが、鳥取大震災の体験が遭ったので大騒ぎしなくても収まると思い、布団をかぶってゆうゆうと寝ていたそうです。けれども、待つということは長いものでいくら待っても揺れが止まらないので不安に思い、やや揺れが収まったので外に出ると、屋根の瓦が庭中に落ち、ブロック塀がバタッと全て倒れていたそうです。ただ、昔と違い、建物の強度など改善されているはずなのに、こんなひどい状況になる自然の脅威にただ、ただ恐怖するばかりです。二度とこんな

- 被害が大きいと虚脱状態となるが、一人で悩まず、遠慮せず相談しながら解決していくことが必要である。(米子市、男性、60代)
- 家具等の転落防止の処置を普段からやっておく必要を感じた。(米子市、女性、60代)
- 日本列島どこでも数十年に一度は、大地震が発生するもの

- いつも心構えをしておくこと。(米子市、男性、60代)
- 地震発生位置により、建物の揺れの方向が決まり、その方向によって建物の揺れの強さが違ってくることが分かった。(米子市、男性、60代)
- 住民レベルで、家屋倒壊等で生き埋めになった時、車のジャッキを利用するなど身近な知恵を集め、訓練するこ

体験はしたくありません。

●補助金制度に対する不満

瓦の補修をするのですが、屋根だけで100万円の見積りになりました。

補助金も母屋のような住居は出ますが、離れのように住んでいないところは全然出ません。私のところは全部自己負担になってしまいます。更に土砂崩れの工事にも40万円ほど自己負担しなければなりません。その他にも、200万円かかったうちの50万円負担しました。

実際に座敷に入れるように襖や壁などを修繕しようと思ったら、もっとたくさんの費用がかかります。ですから、とりあえず雨が漏らないように屋根だけ直しておこうかと思っています。

同じ部落内でも地震災害の山崩れの工事をしているのですが、全部無料です。しかし、我が家の山だけは個人負担が必要です。

誰の山であっても、危険区域で危険な状況なのです。ですから、役場に相談しています。

新聞やテレビが鳥取県は災害の公の負担を手早くやっただと言われているのですが、現実はそのようにはいきません。せめて公共のものに近い道路が寸断した場合などには補助金が出て欲しいと思います。

義援金については町からは20,000円位、県からは50,000円位頂きました。大変ありがたいことです。

●震災後は・・・

もし事前に地震がくることが分かっていたらそれなりに用心するのですが、全く予想も準備もしていませんでした。

今回、火事になかったことは不幸中の幸いだと思います。もし発生でもしていれば、まだ地震のかたがついていないかもしれません。

まさか大きい地震は来ないだろうと言う考えはあっても、余震はいまだに気が気ではありません。

広報として地震の状況や道路や避難所の使用状況の放送があったようですが、家を空けて留守にしていたので、実際にはあまり聞いていません。ですから、「そろそろ家に帰らないと何も情報がわからないなあ」と話をしていました。

震災当日に区長さんが見て回っておられるようです。後に「あなたのところはすこかったねえ」と言っておられました。

ボランティアの支援について町の方から「どうですか。派遣しましょうか」と言われ、お願いして来て頂きました。一人ではなかなかブロックの片付けはできませんので、庭のブロックの片付けを手伝ってもらい軽トラックで運んでもらい大変助かりました。男手が必要な現状中、主人が病弱で大変困っておりましたが、ボランティアの方々に手伝っていただいたことは、本当に心強く、感謝しています。

●地震を体験して思うこと

この度の地震が昼間の発生でよかったと思います。もし夜にでも地震が起きていたら大変だと思います。家の中で動こうと思っても動くことができにくいからです。ですから、一番大切なのは、懐中電灯と水です。他の事はなんとかしのげると思いますが、水はそういう訳にはいきませんから準備しておかなければいけないと思いました。水は特に大事なことだと思います。

他には、当座として、多少のお金も必要になりますので、鞆等に懐中電灯やお金や少し食べ物等を入れておくことも必要だと思います。

地震を体験することによって、予備知識的な事が出来、初めていろいろな事に気がつくのだと思います。現実にくら騒いでいてもあれだけ揺れていると、動こうにも動くことができないのです。ですから、何も出来なくても仕方ありません。もう起こってしまったことは仕方のないことです。早く以前の形に復興でき、以前の様な生活がしたいですね。

と。(米子市、男性、40代)

- 家を建てる場合には地質の調査をすること。耐震構造の建築をすること。(米子市、男性、70代)
- 火元の注意、絶対に火災を起さないこと。皆で助け合うこと。(米子市、女性、60代)
- ガラスコップ・皿・食器等の入った戸棚は、前開きの物は

注意して前の方へ開かないように簡単な鍵掛け道具を付けること。(米子市、男性)

- 常日頃より防災対策に心掛けること。(米子市、男性、70代)

体験談3

西伯町、男性、70歳代

家族構成：本人・妻・若夫婦・孫3人の7人

住居：木造2階建／全壊

家の亀裂が余震のたびに大きくなり、いつ壊れるか心配な日々

●家の中がまるでゴミ捨て場の様に

家内と二人で田んぼに稲刈りに出て、一束刈った時に地震に遭いました。稲がザワザワっという感じで、グラグラと来て、立っているのもやっとでした。

田んぼの隣りのパチンコ店の二階から女の人が「えらいことだ！」と言いながら、凄い顔して手すりにさばって下りて来られました。田んぼの中にいたことで、私も家内も被害がどうこうということはありませんでしたが、振り返ると向こうの家から煙が立ち昇っていたので火事だと思い、とにかく家に帰って見なければいけないということで、少し揺れが和らいだ時に軽トラックに乗って帰って来ました。

その煙は土蔵が倒れ、隣家の離れを押し潰した土煙でした。その横を通ると石垣は崩れ、上にあった建物は見えなくなっており、煙が出ている下の建物は上の建物に押し潰されて土煙が上がっていました。その土煙は一瞬のことではなく、煙を見つけて田んぼから、そこを通る時まで収まらず立ち昇っていました。我が家は、どうにか倒壊することはありませんでしたが、家の中では何もかもがひっくり返っていました。棚に乗せていた物はすべて落ちておるし、ガラス等がかなり割れて棚の中でひっくり返って壊れたり、乗せている瓶はほとんど壊れました。それから、一番手間がかかったのは、前側に戸がない5～6段ぐらいの高さの本棚が倒れていたことです。戦中・戦後のパンフレットなどが散乱してゴミ捨て場の様に

なってしまい、10日間ほど手がつけられない状況でした。

●何十mも飛ばされた燈籠

地震については予測しておらず、前兆もなく、全く気が付きませんでした。揺れだけでなく、音がかなりあった様に思います。また、その後の余震にも「ドドドドーン」という音がずっとありました。震度5弱の余震が1回あり、家の中にいるのが心配でした。仏壇は神棚などがあり、ちょっと幅があったので倒れませんでした。

それから、山の麓にあるお墓の石塔が倒れたというだけではなく、燈籠などは何十mも先に転がって、下から泥が盛り上がるような感じだった様です。うちの左右の家のラインの被害がひどく、そこに地震のラインがあったようです。この西伯町はケガはあまりなかったようです。地震後、すぐ若夫婦が仕事場から帰って来ました。

●不安な車中の眠れない夜

何でも棚の上に乗せており防災対策などは全くしてありませんでした。

町の有線放送が絶えず入っておりました。町がすぐ手を打ち、その日の午後申頃過ぎには、その晩の避難場所なども指定して各校区で1～2ヶ所の避難場所ができておりました。それから、炊き出しもやっていました。西伯町役場の方から、当日の昼過ぎに「夜の避難場所は〇〇で、炊き出しもやっています」という有線放送がありました。

●地区単位で訓練をしておく、家族構成もある程度把握できるので、緊急の場合役に立つと思う。(米子市、女性、50代)

●災害復興のための、国・県などの支援がどんなに大きな力となったかを教育や地域社会で活かしたいものと思う。(米子市、男性、70代)

●現在もガスとストーブを必ず切ることになっています。自分自身が本当に気を付けるようになり、今後の良い教訓となりました。(米子市、男性、60代)

●家族が現在いる場所が常に明確であることが大切である。(米子市、男性、60代)

●日頃から他人事でないと思い、防災について考えることが

家の中で寝ることは出来ない為に、どこかで夜を明かさなければいけないという気持ちでいました。保育所も避難場所になっていましたが、私たち夫婦と孫は交流センター。若夫婦は残って自動車の中で寝たようです。

あくる日の晩からこの辺りの人も、余震による二次災害の恐怖と家屋の崩壊の為に自動車の中で2〜3日夜を過したようです。

小屋の屋根は、家にあったものや買ってきたシートで代用しました。町からいただいた大きなシートは、これ以上、放置しておくとう崩れてしまうお墓のほうに使いました。

●火事がなくて良かった

地震のあったときはちょうど、食事が終わった時間帯でしたから火の気がなくて良かったなと思いました。火が出たら大変なことになっておりました。また、人に被害がなかったことと建物が倒壊しなかったということで、今はこうして笑い話にはなっております。とにかく、ケガや火事がなかったことが一番です。

●安全な避難施設がほしい

交流センターには町内からかなり来ておられましたが、大きな建物だと言っても屋根が付いているものなので不安が一晩中ありました。地震の時と火災の時とは全く違います。私個人の感じですと一番安心出来る避難場所、倒れようが何しようが心配ないという建物が近くにあればと思います。ビニールハウスやテントのような倒れても大丈夫という安全性のものがあればいいなと思います。家の中にいて倒れてきた場合、屋根の重さというのがあります。それから、地震よりも余震の方が恐かったです。扉や家の傾きなど、最初は「大したことなかったな」と言っていたのですが、1日に何十回も余震があり、それが10日経ち、20日経ち、1ヶ月経ちしているうちに段々と広がっていきました。壁も最初は割れ目程度でした

が、いつ壊れてもおかしくないぐらいになってしまいました。順番が廻ってこないで、母屋の瓦は修復が、まだ済んでおりません。修理できないままに月日だけが過ぎてしまい大変困っています。

●上に物を置くと危ない

高い所に置いていた物は全て落ちていましたので、壊れるような物はなるべく上に置かないようにすること。それから、軽い物はひっくり返らないように柱などに留めておいた方が良いでしょう。(妻談:仏さんも仏さんにお断りして机の下に置かせて頂きました。)

また、懐中電灯は絶えず、どの部屋にも置いておかなければいけないなと思いました。

大切だと思った。(米子市、男性、40代)

- 外出する時、鍵をするが地震があった時にそれが裏目に出た。(米子市、男性、60代)
- 地震の時は、慌てないで落ち着いて、正確な情報を入手して行動すること。常日頃の訓練も大切だと思った。(米子市、女性、50代)

●食器棚・本箱等は引き戸が有効であった。また、上部を固定しておくこと。(米子市、男性、70代)

●地震の時は、とっさのことでなかなか動けるものではない。余震が何回か続くうちに被害がどんどん広がっていく。(米子市、男性、50代)

体験談 4

西伯町、女性、40歳代
家族構成：本人・母の2人
住居：木造平屋建／全壊



一人残した老母を案じ、通行止めを振り切り帰宅

●地震発生時

当時、私は米子市内の職場で昼休憩中で、座って話をしていました。最初ガタガタしたと思ったら、今度はものすごい揺れが何度もあり、座ってられないような状態でした。事務所では、本箱などが倒れたりして慌てました。

私は給食係なのですが、いろいろなものが倒れてきて現場は凄かったです。揺れがおさまったと思えばまた何度も揺れて、落ち着いていられなく怖かったです。その後も余震が何度も起きましたが、本当に地が動く感じの揺れでした。揺れの時間が凄く長い時間に感じました。休憩時間が終わった後も1～2時間くらい同じような余震が起きていました。

家に一人で残している老いた母が心配になり、職場の公衆電話から電話をするとすぐ通じ、安心しましたが、それでもいち早く帰らなくてはと思い、家路に向かいました。帰る途中の家のかなり手前で「通行止めた。車は危険だ」と道路警備の人に言われましたが、母のことが心配で車を置いてでも絶対帰らなければいけないという気持ちがあったので、制止を振り切って急いで家に向かいました。実際は通れたのですが、橋と道との間に段差が20センチもできており、地割れもしていました。

●家は25度の傾き、全壊の証明

帰ってみると、3段ほど積み上げていたブロック塀が一部を除いてすべて倒れていました。家屋

は古いのに余計にがたがきてしまい、家の床も一部落ちてしまいました。風呂場も全壊し、ドンと陥没した状態になっていました。また、家の周辺を見ると、家屋裏も地割れができていました。

水は井戸水をポンプで汲み上げているのですが、震災後は長時間の間、黒い濁り水が出ていたのでずっと出したままにしていると、その日のうちに多少良くなりました。近所では水圧が下がり少量の水しか出ない所や、全く出ない所もあったようで近所の人が貰いに来られたりもしました。

家の中では、小さなテレビも倒れ、いろいろな物が倒れていました。障子も縦破れ状態になり、開け、閉めが出来ない状態でした。家自体がだいぶ傾いたようで、計測の結果、25度の傾きと言われました。少し離れた所にある、以前使っていた風呂場も破壊状態になり解体してもらいました。

罹災証明も、後ろの石垣が突出し、裏山が土砂崩れになり、家も傾いているので全壊の証明を出してもらいましたが、実際には何とか住んでいます。

全壊ということで資金が援助してもらえるので、本当は全部建て直したいのですが、経済的に力がないので必要な箇所だけ早急に直しました。

●防災準備は何も・・・

以前から地鳴りや地震が何回もあり、「大きな地震が来るかも知れないから気を付けよう」と近所の人と話をしていましたので、気持ち的には備えていた部分もありました。

- 地震時には、屋根が最も弱いので瓦が落ちる可能性が大変大きいので、慌てて外に飛び出さないことが必要。(米子市、男性、60代)
- 「災害は忘れた頃にやってくる」の言葉どおり普段から対策を考えておくことが必要であることを痛感した。(米子市、女性、70代)

- 地震に強い家屋は木造である。しかし、地盤を強化しておく必要がある。(米子市、男性、60代)
- 中国地方の活断層の地図には、新しく鳥取県西部を加えたものが必要だ。(米子市、男性、60代)
- 自然災害の恐ろしさは、やはり日頃から知識としてとらえるべきだと思います。(米子市、女性、60代)

阪神・淡路大震災があった当時は、緊急用に持って出るものは何か揃え持っておかなければいけないという気持ちはありました。しかし、特に地震対策をしていた訳ではありませんでした。現在は多少の防災グッズや缶詰類を非常持ち出し袋に用意しています。

●避難者には分からない震災情報

避難場所が体育館になっており、自主的に避難された方は2~3軒ありましたが、避難場所は事前には知りませんでした。また、地震に関する情報は、有線放送や町の宣伝カーで流されていたようです。しかし、有線を絶えず聞いていないと情報が見つみにくい。その上、我が家は、親戚の家に3日間避難していてまったく把握できませんでした。

●ありがたかったボランティア

今回、ボランティアの派遣がとても有効でした。倒れたブロックの片付けが、女ばかりでできないのでどうしようかと思い、役場に状況を説明・相談をした所、役場の方から「ボランティアを使ってください」と言われました。

申し込むと3日後くらいに来て、きれいに片付けてくれました。この事で、ボランティアはすごく有効でありがたく、今後、何かあったら活用しなければいけないと思いました。

●生活再建支援体制の要望

日常一番困るのは、生活用水です。例えば、トイレが使えない、風呂に入れない。家が半壊・全壊はもちろんですが、生活に密着した中でいえばお風呂とお手洗いは大きい問題です。仮設トイレの設置や、仮設入浴施設がすぐ対応できるようなシステムを作っていただきたいと思っています。

車の運転が出来る人ばかりでしたらいいのですが、田舎ですと年寄りばかりで無理です。銭湯や公衆トイレでもある場所ならばいいのですが、田

舎はその様なものがないので、特に生活に密着した事を充実して頂き、対応していただく事は必要だと思います。

ガス・水道が使用できなくなった場合、西伯町自体が食糧品を備蓄しているかが問題です。備蓄がなければ飲食に困ります。特に、水は最低限必要で、水だけで数日は生きていけるということがあります。ですから、物資をすぐ配給できる体制は必要だと思います。日常から体制を考えて欲しいと思います。

●今後の課題として

この地震を、あまり大きな括りの中ではなく、小さいレベル(町・村・部落・班)で考えていかなければいけないと思います。例えば、ここの部落でこういう場合は、どういう連絡ルートで誰が一人のお年寄りを避難場所へ連れて行くかというようなことを、きちんと話し合わなければいけないと思います。そういうことができるかと言うことを話し合う事が理想的で良いと思います。この部落の今後の課題です。こういう地震があったので、災害はいつ起きるか分かりません。また来る可能性が無きにしも非ずだと思います。

雨が降ると裏山が気になります。町に相談したところ、自分の土地ならば自分の所で直してもらわないといけないということでした。町は危険箇所ということで、県に報告しておきますというだけで、「危険ですから直しましょう」とは言ってくれません。裏山の地質調査をするわけでもなく、ただ見に来られただけです。どこまで行政が対応してもらえるかが気になります。

- 地震は予期できないので突然グラツと来ると慌てるから、平素から訓練して行動できるようにしておくべき。(米子市、女性、60代)
- 身内に家屋の被害が多くあり、今後家を新築する場合は、耐震構造にすることを伝えたい。(米子市、男性、60代)
- この災害は他人事でない。自分の為に非常持ち出し袋は用

意すること。(米子市、女性、70代)

- 家の新築に関して、土台の強い地震に強い、また地形もよく調査して建てるべし。(米子市、男性、60代)
- 災害時に限らず、日頃から地域の人が支えあうことが大切と思った。この気持ちを次の世代にも伝えたい。(米子市、男性、70代)

体験談5

西伯町、女性、60歳代

家族構成：本人・夫、他2人の4人

住居：鉄筋コンクリート造2階建/全壊

壁は崩れ、家中に亀裂が走る。 年金生活者には厳しい新築の決断

●風もないのに波打つ稲穂

屋頃、田んぼに出て稲扱きをしていると、ガタガタしているので「おかしい」と思いエンジンをふかしたり、止めたりしていました。大きな地震だったかどうかは分かりませんでしたが、近くの家を見ると屋根瓦が落ちたり、田んぼの穂が風もないのに波打っていて、地面が“ダウンドアウン”と上下動している感じがしました。家に帰って、部屋に入ってみると、本棚が倒れ、本が落ちて部屋に入れなかったり、水屋は揺れて戸が外れたり、開いたりして中身は出てしまっていました。重い水屋や冷蔵庫までが動いているようでした。

家は鉄筋で昭和46年に建築されたものです。家の表は何ともないようでしたが、裏に回ってみると壁が崩れ、家の内側の壁にもヒビが入っていました。ガラスの戸は割れて破片が飛び散っていました。まだ屋根替えをしていなかった裏の蔵は崩れてしまいましたが、あれだけの揺れにもかかわらず数年前に屋根の瓦を敷き直していたところは無事でした。

蔵は明治の初め頃に建てられたものなので古かったこともあり、近所を見回してみるとどこも土蔵は崩れていたようです。玄関もガラスの破片などで上手く閉まりませんし、鍵もかかりませんでした。ガスの元栓は締めましたが、水道は閉めていなかった為、壁が割れてしまい洋間の絨毯が水浸しになってしまいました。外の壁は雨が降ると壊れるといけなないので、暗くなりますがシート

を被せていました。後日、建築関係の方が「昔の鉄筋と比べればダメです」と言っておられました。鉄筋が全部に入っていなかった為に腰折れになって欠けていました。壁や洋間の亀裂を見て「危険指定」にされ、片付ける意欲もありません。

初めの2日間は保育園が避難所となりましたが、3日目からは保育園が再開する為、交流センターが避難所になりました。避難所に出る時にあれこれ包んでいる暇はありませんでしたが、「仏様と位牌もお連れしないといけない」と思い、風呂敷に包み持って出ました。車で行くつもりでしたが、夫は「避難所に行かない」と言うものですから仏様も車の中に入れっぱなしにしていました。夫は監視と警備も兼ねて家の前で車に寝泊りしていました。

●防犯を考え、夜の見回り

地震のどさくさに紛れて泥棒でも入るといけませんし、防犯警備を兼ねて時々部落を懐中電灯を持って回ったりしていました。回ってみますと、他にも車で寝ておられた方があったようです。2・3日は車で寝ましたが寝た気がしませんでした。もし、また揺れても一度にひっくり返ることはないだろうと思い、家に寝ました。夫は私たちが床の上で寝ている間も20日間くらい車で寝ました。

地震後2日目には公民館や墓地の被害の状況を見ました。墓地は、ほぼ100%全滅でした。場所

- 神戸地震以来、非常持ち出し袋を用意していたが、いつの間にか忘れていた。もっと継続的に用意することが必要と思う。(米子市、女性、60代)
- 日頃より自治会などで相互の連絡方法、避難方法、ライフラインの確保などの情報を住民に知らせておくことが大切だと思います。(米子市、女性、40代)

- 今回を教訓として、公的支援の制度、災害ボランティア制度の確立を望む。(米子市、男性、40代)
- 埋立地、海の近く、山の急斜面もダメ。その土地の長老に昔の災害についてよく話を聞いておくこと。(米子市、男性、60代)
- 人命保護・生活再建・環境保全などの面で具体策を検討す

によっては被害の状況が大分違って、「庭のタイルが1枚落ちただけです」という家もありました。余震もずっと続きました。時々ダウンとってガタガタとして終わる余震が多かったです。

● 区長として

地震の直後から有線放送がどんどん入って、各家庭に対する連絡や指導はされていたようです。夫は区長でしたので「どうしたらいいか」と考えました。相談する人もいませんし、どうしていいか分かりません。

まずは、班長さんを集めようと思ったのですが、皆さん勤務中で連絡が取れません。2、3軒の家の人が集まって慌てていました。老人の一人暮らしの家などのガスや水道の元栓などを見たり、来られた人に確認したりしました。幸い火災がありませんでしたので良かったです。火を使っている時なら大変だったと思います。

町からの連絡は、各家庭に対するものばかりで各区ごとに動くような指示は全くありませんでした。被害報告も「各家庭ごとにして下さい」ということでしたが、ある人が「区長さんがまとめて被害報告をしているところがある」と言うのでやってみることにしました。班長さんの家を回り、昼前に各班の状況をだまかに調べてもらうようお願いしました。1班で19軒というところもありましたが勤め人の所は奥さんがちゃんと全部調べて、最後は8時過ぎに集まって、9時頃には役場に全部持って行くことができました。個人で報告した家もあったようですが、班でまとめて頂いてコピーの控えも取っています。

● 『緊急マニュアル』が必要

行政の町民に対する指導で感じたことは、災害が発生した時、区長や班長、それに伴った人たちはどう動けばいいか分からないということです。大部分の人たちは、まず自分のことしか考えない

と思います。区長としてどう対応すればいいのか普段から『緊急マニュアル』みたいなものがあればいいと思います。今回、県はポスターを配りましたが、そういったものを普段から予行練習しておいて当然ではないかと感じました。それから、「区長は何をしているんだ」という声が出てこないだろうかと思ったりしました。何かあれば、区長が町に報告するなど、そのように決めておけば区長もすぐに対応できると思います。

今まで、こんな災害がありませんでしたので、経験や体験がないとやはり無防備です。

● 片山知事に感謝。でも・・・

片山知事の住宅資金300万円の決断には本当に感謝しています。しかし、無料で取り壊して頂いて300万円の建築費の補助を頂いても、家だけではなく周囲のものも修理しなければいけません。銀行から融資してもらおうと思っても少ししか貸してもらえませんし、返済も10年以内と期限が切つてあります。解体も急がないといけません。主人も私も年金生活者なので、なかなか決断がつかず、どうしたらいいのか迷っています。

べき。(米子市、男性、40代)

- 毎年、年に一回程度は、防災を皆で考えて整備する必要がある。(米子市、男性、50代)
- ライフラインの確保の為には、施設や設備を耐震化をしていただきたいと思います。(米子市、男性、60代)
- 今後、日頃から耐震に備えた構造をすべての点で考え、子

供・孫たちに伝えていきたい。(米子市、男性、50代)

- 慌てないこと。パニック状態が一番危険である。(米子市、女性、30代)
- 自分の住んでいる地域では地震はもとより、どんな災害も大丈夫と思わぬこと。(米子市、男性、60代)

体験談 6

江府町、男性、60歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造2階建／半壊

轟音と共に地鳴り、激しい横揺れ。家が軋み生きた心地がしなかった

●とっさに机の下に

午前中に山へキノコ採りに行き、遅くなり食事をして部屋で横になっていました。そうすると、前兆もなく轟音と共に地鳴りがして、ものすごい横揺れがきました。立つこともできないくらいでした。

家が軋み、大きな音を立て、天井が今にも落ちそうで、家が倒れるのではないかと思いました。とっさに机の下に潜りましたが、外に出る事は考えていませんでした。阪神大震災の事は新聞等で見ましたが、まさか鳥取に起こるとは思ってもいませんでした。ですから、避難場所も全然考えていなかったの、どこへ行けばいいのか分かりませんでした。

妻は、部屋で座ってテレビを見ていました。揺れの為に開きの戸棚の扉が開いて食器が落ちてきたので、中から食器が出てこないように扉を押さえていました。しかし、向きが良かったようで、食器棚も倒れませんでした。近所でも家具の置いてある向きによっては随分倒れていたようです。

実際に揺れていた正確な時間は短かったかも知れませんが、随分長く感じました。テーブルの下に隠れましたが、立つ事ができなかったの、逃げる事もできませんでした。

もし、ガスを使っているのも元栓を閉めるというような気が廻らなかったと思います。座り込み、潜り込むのがやっとで、火の元を見るような冷めさはとてもありません。

その日の寝泊りは自宅でしたが、自宅の2

階には怖くて上がれませんでした。いつ余震が来るか分からないので、とても怖かったです。屋根にも何日も上がってみる事ができませんでした。

●田んぼが地盤沈下

壁に亀裂が入ったり、張ってあった壁が剥がれしわだらけになり、だいぶん傷みました。この部落のほとんどの軒瓦が被害に遭いました。今も修復中です。

畑の勾配をつけるのに石垣を組んでいますが、その石垣が崩れました。10年程前に田んぼのほ場改良（小さい窪を2反窪に）をしましたが、その半分はそのままで、残りの半分は地盤沈下したような状態になっていました。

●公民館では・・・

震災後は、余震が怖くて避難場所になっている公民館に集まりました。

公民館には役場の防災無線があります（各家にはありません）が、調子が悪くてあまり情報が入りませんでした。

町役場の2階に放送室がありますが、集合場所に連絡が入る事を要望しましたが、係りの人も避難したらしいとのことでした。このような状況の中では、いろいろな情報が定期的に欲しいと思います。それが頼りであり、心強いのです。情報を得るのは、テレビやラジオでも出来ますが、身近な情報はやはり町などの放送などが頼りになります。とても肝心な事なのです。

- 家具の転倒防止対策を施すこと。屋根瓦は補強しておくこと。揺れを感じたら、テーブルなどの下に隠れ身を守る。（米子市、男性、70代）
- 次の世代の人達に、今回体験したことを資料として残して貰いたい。（境港市、男性、60代）
- 最近、建てられた家は被害はわずかで、耐震の配慮の有無

がこの差を生じたのではと思う。（境港市、男性、70代）

- ライフラインが駄目になった時、困らないよう平素より心がけておくこと。（境港市、男性、70代）
- 地震を始め、災害対策を考えたり、体験を話し合いながら危機意識を十分に持たねばならない。（境港市、男性、70代）

また、町や区長からの連絡事項がありますが、気が動転しているので聞き落としや聞き逃しがありました。有線や防災無線の充実が必要だと痛切に感じました。

●ビニールシートの配布について

ビニールシートの配布が役場からあり、大変助かりました。修復のための屋根屋や左官屋が少なく、なかなか順番が回ってこないのが未だに直らない所もあります。この辺りで最も多い被害は、屋根瓦、ガラス、壁などの被害です。一番有効的な援助はビニールシートでした。

●地震保険に入っていたお陰で

被害を受けた場合の費用は自己負担が1/3か1/4です。あとは、県と町の修繕費が出る事になりました。申請をして現状を撮影して、工事が済んでからも撮影をして、領収書を町役場の総務課に提出します。このような支援制度は非常に助かりました。共済組合（農業共済と建物共済）が長屋の方は対象が火災だけでしたので全然出ませんでしたが、母屋の方は農業共済に入っていましたので、入っていて本当に良かったです。これからは、必ず共済に入っておかないといけないと思いました。

農業共済は、係りの方が審査・調査して被害見積りをして割合早くに出ました。修繕に掛かる金額が大きいだけにとっても大助かりでした。県や市町村などで補助金が出ても、到底足りませんから、その分を補足するような形で建物共済から出ました。

人は欲なもので、大した被害がなければ家が壊れなければ良かったと思うが、人が亡くなれば家どころの騒ぎではなくなるのですが・・・。

●いま思うこと

もし家が倒壊したら、家の中にいる者はどうしようもありません。万が悪ければ亡くなったり、

ケガをしてしまいます。今回はこのような揺れて済みましたが、状況が違えば考えられる事です。

地盤が固い所はいいのですが、被害に遭っている所は地盤が緩く、母屋は良かったが離れは駄目だったり、風呂場が沈んだりしています。

家の柱も年輪のつんだ太い物を使わないといけないと思います。一階よりも二階の方が振り子のように余計に揺れ、壁がほとんどはがれました。

部落の方で時々、消防訓練をしますが、火災地震のこともあるので防災訓練を住民の間に徹底することが大事だと思います。

いつ阪神・淡路大震災ほどの震災が来るか判りませんから、あのような記録を勉強して行政も個人も対策を練っておかなければいけないと思います。いろいろな教訓の本などがあるので、震災の状況から復興の記録をしっかりと勉強して、知恵を出し合って対策をしておかなければいけないと思います。

●生活道の確保の重要性

今回の震災も状況が悪ければ、火災の心配がありました。現在、陳情していますが現状では火災が起きても橋幅が狭くて、消防車がなかなか曲がれません。

近くを道路の181号線が通っていますが、地震の後に通行止めになりました。何年前から町に対岸道路を陳情しています。この度のように通行止めになると毎日の食料品購入の車や通勤者の一般自動車も多くなります。大きな道路に幹線道路をつけ、生活道を2本は確保しておかないと今回のように一つストップになってしまったら、もう生活の移動のしようがありません。早急な生活道の確保が大切だと思います。

- 救助活動等については、啓蒙の方法として文書に残していくべきだろう。(境港市、男性、60代)
- 災害は忘れた頃にやってくるので、平素より防災意識をもつことが大切だ。(境港市、男性、60代)
- 火災保険に入っているが、地震保険には入らなければと思いつつ、入っていなかった。(境港市、女性、50代)

- 非常持ち出し袋・水・食糧の準備は必要だと感じた。(境港市、男性、60代)
- 日頃からガス等の室内の元栓は止める癖をつけておく。(境港市、女性、50代)

体験談 7

日野町、男性、60歳代
家族構成：本人・妻・長男の3人
住居：木造平屋建／全壊

家を失い、 自力で車庫を改造したトタン張りの仮住まいが今も続く



●地震発生時

稲刈りが手間取り、遅い食事を妻と摂ろうと胡座をかいて座り、箸を持った瞬間に地震が来ました。

最初は飛行機の音かと思うような「ゴー」という音がし、次は雷かと思いました。その瞬間に地震が来ました。

冷蔵庫が横にあったのですが、それが私の方に倒れて来ましたので手で支えました。電源コードが上のコンセントに差してあったので倒れずに済みましたが、もし電源コードが下のコンセントだったら真横から頭に落ちていたかもわかりません。

家内はすぐにガスの元栓を止め、私が冷蔵庫の下敷きになりかけたのを手伝って助けてくれました。

阪神・淡路大震災などをテレビでずっと見ていましたので、地震だからといってもそう恐くはなく「今度は自分の番だ」という気持ちがありました。

後方にある食器棚、戸棚などは全部倒れ、中のものは全部飛び出しました。ガラスなどは全部割れて散らばりました。ですから、足に刺さるので危なくて歩く事もできませんでした。

地震は、連続して波状的に来ました。これでもう地震は終わりかなと思った瞬間に、また強い揺れが「バーン」と来ましたがほんの一瞬でした。その時に、ガラスが割れて外に飛び散ってしまい、

目の前から窓が消え、ガス爆発と同じような感じでした。地震は何回も経験していますので、「あ、地震だ」という感じであまり焦らずにじっとしていました。揺れが少しおさまり、「今だ」と思った時に外に出ました。大きな柿の木の下に入って様子を見てみると、また揺れが来て、台風の時と同じくらい柿の木が揺れて倒れそうでした。震災後、柿の葉っぱが急に丸まってしまい、その後回復する間もなく秋が深まって葉が散ってしまいました。

●震災後の生活は

家屋は、土台が残ったまま家だけが完璧に半分前にずれて出ました。母屋は、ドアのブロックのボルトだけが残り後は全部前に出てきました。

このような被災状況でしたが、家の中には入れました。しかし、余震が続いていつ天井が落ちてくるか分からない危険な状態だったので、そんな中で寝るわけにはいきません。

夜は前の畑にあるビニールハウスに布団を運んで、3人で雑魚寝をしていました。このまま住むところがないのでは困るので、トタン張りの車庫を改造して戸を付けて住んでいます。当時は、まだ気候が良かったのですが、その後だんだん寒くなり、色々と困りました。なにしろ、トタン1枚ですから、至る所にある隙間から温まった空気が全部逃げていき、冷たい隙間風が吹き込んでくるような状況でした。いくらストーブをつけても部

- 日常の生活の中に防災意識を忘れないこと。また、地域住民の助け合いの気持ちを忘れないこと。(境港市、男性、50代)
- 自主防災会の内容充実と持続的な訓練が大切です。(境港市、男性、50代)
- 県や市の対応は、とても良かったと感謝いたしております。

- す。また、多くの方からご厚志戴き、とても助かりました。(境港市、男性)
- 川・沼・海等の埋立造成地への建造物は、液化化被害対策が極めて重要であることが再認識された。(境港市、男性、60代)
- 義援金をいただいた感謝を忘れないで、別の所で地震があ

屋の温度は上がり、外気温とあまり変わらない状態ですから、真冬は体の芯まで冷えるような寒さでした。

風呂は、ポリの浴槽を親戚から世話してもらい、仮の風呂を露天風呂のように作りました。お湯はボイラーを外で繋いで青いビニールシートをかけ、水は自分で配管しました。

しかし、そのうちに霜が降るようになりだんだん気温が下がってきて、ホースなどが凍り、風呂は沸かせるけど水が入れられないという事になってしまいました。けれども、例年はたくさん降る雪も今年は珍しく降らなかったのが良かったです。

食事も壊れた家の中に全然入れないという事ではなかったのが良かったです。それから2、3日後に毛布等の生活用品や食糧品等の救援物資が届くようになりました。町の方は早かったのですが、この辺は少し遅かったです。

現在、新しい家を建てるために田んぼを宅地に転用するよう農業委員会に申請していますが、許可がおりてから家を建て、完成するまでにはかなり時間がかかり、震災後丸1年以上経過してからになると思います。

元の宅地に建てるならすぐに建ちますが、これだけの災害に遭うと、同じ場所に建てようという気にはなれません。

●もしもの時は・・・山へ逃げます

町に比べると、過疎地への救援活動が遅かったのではないかと感じました。ただ我々の良い事は、山に逃げられるという事です。

役場のほうから電話で「水は飲めますか」と聞かれた時などは、「自分は山の水を飲みます。それから逃げるのも山に逃げます」と答えました。

「トイレなんかはどうですか」「どこでもできます」と言う感じです。生活レベルは低いですが、水やトイレ等の生活に一番大切なものには困りませんでした。

ボランティアの方や支援が町の方から来ましたが、地震から3、4日後位でしたでしょうか。その頃にはもう地震も終わり、皆が落ち着いた頃でした。

●地域的に見ると

この辺りは地震の揺れが一番強かったと思いますが、家の造り自体は強いと思います。風が強く、雪も降る所ですから、それに耐えられるだけの家が作ってあるので簡単には壊れません。町の方はものすごく壊れていましたから家の丈夫さを実感しました。もし、雪の積もっている所に上下に振動する地震が来ていたら、被害も大きく大変だったと思います。ちょうど工事用の重機が側で働いているような音と振動でした。

余震は震度4などの大きなものも含めてずっと続きました。その余震の間隔がどんどん長く弱くなって、今は落ち着きました。

子どもの頃からずっと通っている道があるのですが、今までにも山崩れが度々あり、いつも同じ所が崩れていました。この度の地震でも、昔から弱かった所が寸断されてしまいました。他にも道路がいまだに通れない所もあり、困っています。

●この地震を体験して

この地震は避けることができない、どうしようもない事でした。この大きさの地震なら、この程度で耐えられたけど、もっと大きな地震が来るかも知れません。今、良い家を建てたとしても、また壊れるかも知れません。地震から逃れると言うことは、まず不可能だと言う事を痛感しました。

地震は誰を恨むこともできません。ですから、これをきっかけに考え方を変え、皆が助け合うという事が一番大事だと思いました。今回の地震でつくづく、その事を実感しました。

ればお返ししたい。(西伯町、女性、50代)

●落ち着いて行動することが大切です。あとで考えると落ち着いていたつもりでも、随分うろたえていたようです。(西伯町、男性、60代)

●周囲、近所の人と争いのないよう言葉を慎んでいき大きい心を持ちたい。(西伯町、女性、60代)

●火の用心、水の確保、ガラス容器や重い物を上にあげない、屋根の下にはいないこと、避難は広場。(西伯町、男性、70代)

●公務員の方は大変だったと思いますが、お互いが被害者であるがために冷静、そして公平な態度で臨んで欲しい。(西伯町、男性)

体験談 8

日野町、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造2階建／全壊

資金の問題もあり、 全壊の赤札でも修繕して住むしかない

●軽トラが飛び跳ねるほどの揺れ

ちょうど稲刈りも一段落して、天気も良いし、3km離れた所にある町の運動場で皆とゲートボールをしようと思い、休憩所で雑談をしていました。ここで地震に遭いました。

これまで度々、地震はありましたが、こんなに大きな地震は初めてで“これはえらいことだ”と思い、すぐ外に出ました。すると停めていた軽トラがポンポンとトランポリンで飛び跳ねるように上下し、単車はバタバタと倒れていました。

ようやく揺れも収まったので、帰ろうとすると橋には段差が出来ており、国道に出ると大きな石が道路にゴロゴロと散在していました。また、大きな亀裂もでき、“これは大変だ”と思い、駐在所に駆け込み「通行止めしないと大変なことになっていますよ」と大声で伝え、家に帰って来ました。

家には家内が一人でおりましたので、それが一番心配でしたが、無事を確認できてホッと一息つき、ふと外を見回すと、蔵の白壁が全て落ち、庇がポーンと庭に吹っ飛んでいるではありませんか。緑側のガラス戸も全て庭に飛び出し、ガラスがメチャクチャに壊れていました。人間が中にいたら完全にケガをしていたでしょう。

母屋は屋根の瓦がずれたり、途中まで落ちたりして、いつ落ちるか分からないほどの状況で軒下を通ることができませんでした。

隣近所も私の家と同様に瓦がずれたり、壁に亀



裂が入ったりして地震の物凄さを体感しました。

当日の夜は、家の中には寝ないでほとんどの人が自動車に朝を迎えたようです。町が仮設の住宅用としてテントを一つ張りましたが、とても部落の人は全部入りきれず、子供が入っているくらいでした。ここから1km半ぐらい離れた所に避難所がありましたが、緊急ですからなかなか出られません。公会堂もありましたが、避難場所になっていても建物の中に入るのは危ないと思い、ほとんどの人が自動車で一晩明かしたようでありませぬ。私も家を片付けていつでも出られるような服を着て、非常用の物（当座のお金など）を持って軽トラックで一晩だけ過ごしました。

●全壊と診断、建替えには資金が・・・

自宅の診断で赤紙（全壊）だと分かり、一番感じたことは、資金の関係です。どうして直していかうかということが一番の心配でした。家の真ん中に亀裂が入り、土台に段差が出来たりして、家全体が斜めになって戸の開け閉めもできないようになっていました。何とか建具を削って開け閉め出来るようにして頂きましたが、家中隙間だらけ。改築の必要があると言われても、右から左に建てられるという話にはなかなかありません。ですから、完全に直すとなると相当なお金がかかる

- 余震がある間に、罹災状況を判定することは早すぎると思う。余震の度に壁のヒビ割れが広がったりする。(西伯町、女性、60代)
- 老いも若きもお互いに声を掛け合って、平素より人の心のつながり大切にしていきたいものです。(西伯町、女性、80代)

- 今後の建物は耐震を考えること。高台（特に石垣）、裏が山等は住宅地にしない。(西伯町、男性、60代)
- いつ、何時でも突然に来る地震。科学の進歩、震度計も今以上に優れたものができることを期待しています。(西伯町)
- 行政による防災に対する勉強会の開催を希望します。(西

そうなので、当分は壊れた所を直す程度で我慢しなくてはと思っています。

家の被害も大変でしたが、農家の収入源である田んぼの水路が全面的に壊れました。この辺りは今年一年休耕という悲しいことになってしまいました。

●素早い町のビニールシート配布

米子の方では、「地震は起こらない」と地震に対しての準備などは全く考えておりませんでしたから、非常時の持ち出し用の物は備えておらず、家具の固定もしていませんでした。

町からのビニールシートの配布など色々な支援、対策は早く、あくる日にはビニールシートが全家庭に届けられ「どうしてあんなに早く町長は手配できたのか」とびっくりしたぐらいです。町の対応は非常にテキパキとやって頂きまして、ありがたかったです。

あと、ここは防災無線が有線と外のスピーカーの両方あり、このような広報的な情報は防災無線で流されました。また、幹線道路などについての情報も防災無線で流れました。絶えず防災無線がなりっぱなしの状態、色々な情報が流れておりました。

●林道が幹線道路として役立った

日野町は山間部を通っている大きな林道がしており、平素は皆が「いらぬのではないか」と言っておりましたが、このような時は助かります。この林道がなければ、ほとんどここは通行止めになっておりました。やはり幹線道路は伏線というか、あっちがだめでもこっちというものがないと大変です。ようやく林道のありがたさが分かったところです。

●地震は他人事ではなかった

今後は、復旧は勿論して頂かなければいけません、他県や他市町村から支援、ボランティアな

どに来て頂いたり、支援の物資を頂いたりして大変ありがたかったです。これまでは他の方で災害があってもテレビで観て“大変だな”くらいにしか思わず、どちらかというと他人事のような感覚でしたが、これからは災害が起きたら町をあげて支援すべきだと思います。

●今回はある意味一つの教訓だ

今回の地震で感じたことは、本棚やタンスをきちんと固定しておけば倒れてガラスが散ったりすることもなかったでしょうし、他に非常持ち出しぐらいいは考えておいた方が良くと思います。

それから、このような災害時の避難場所、連絡先を家族で相談しておく必要があると思います。このような災害が起きると連絡が取れません。今は携帯電話があり、どこにいても連絡が取れますが、やはり避難場所などを平素から話し合っておく必要があると思います。

今回の地震でも学校に行っていて、地震で交通が不便になったとか、色々なことがありましたので、家族との連絡は方法を考える必要があると思います。

自分たちでできることはしないといけないと思います。一から十まで行政にというのは良くないと思います。昔から言いますが、“いつまでもあると思うな親と金”とか“ないと思うな運と災難”という言葉があります。正にこのことだと思います。

今回の地震はある意味、一つの教訓として得るものがあつたのではないかと思います。

伯町、男性、60代)

●防災上、地質地図を作成していただき、自分の宅地及び所有する土地の実態を把握し無理な利用は避ける。(西伯町、男性)

●断層のズレの場所の表示など、ひと目で分かるような対応策が必要だと思います。(西伯町、女性、40代)

●防災対策を常に整えておくこと。(会見町、男性、70代)

●水源地が水を確保するために、隣接地の水源地確保、また他市町村との接続連携の方法を検討する必要がある。(会見町、男性、70代)

●生活自衛手段を、日々、身に付けておくことが大切。(会見町、男性、60代)

体験談9

日野町、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造平屋建／半壊

断水で水の大切さが身にしみる。 給水車ありがたい

●地震発生前後の状況

地震発生時は、仕事の建設現場に居ました。妻は家に居り、ちょうど昼休憩で休んでいました。妻は、大きな揺れの為に逃げようにも逃げられないので、家の大黒柱にしがみつき、家の中にいるのは一人なので“どうしようか”と不安な数分間を過ごしたようです。そして、地震の最中は、ガスのことなど全く頭になかったようで、「元栓を閉めて下さい」という町の防災無線からの有線放送があり、急いで元栓を閉めたそうです。

私が帰ったあとも、余震がひどく、家には入れない状態で、また次の地震がきて屋根が落ちてくる心配のない外の方が安全だと考え、その晩は軽トラックに妻と2人で寝ました。

今までも少しの揺れはありましたが、何かが壊れるという大地震は初めて体験しました。昭和18年の鳥取大震災の時も、このあたりは「石塔が倒れた」「傾いた」等の話はありましたが、それほどひどい被害はありません。

●一番困ったのは・・・水

この度の地震で一番困ったことは、なんと言ってもトイレの水と飲料水と風呂等の生活用水です。自衛隊の方に1日に3回給水に来て頂き、非常に助かりました。近くに川は流れていますが、農薬などで汚いですから水がない事に一番不自由しました。このように止まってしまうと、お風呂はボイラーに亀裂が入っているかもしれないので

沸かせませんし、ご飯すら炊けません。その状況を話すと娘がご飯を炊いて持って来てくれました。

震災5日後ぐらいから“ご飯を配る”と言われてきましたが、そうこうしているうちに亀裂の入っていた水道管の修理をして頂き、ガスも直り、ようやく生活ができるようになって安心しました。

また、家のトイレはひどく壊れ、全く使えませんが、この周辺には8個の簡易トイレがあり、どうか日常生活に支障をきたすことはありませんでしたが、トイレにも苦勞しました。

●家屋の修繕

我が家は半壊になり、黄紙の判定で、壁が全部落ち、あちらこちらには隙間だらけで、冷たい風がビュービューと家中を走り回り、あちこちから落ちてきた荷物で家の中は足の踏み場もないほどグチャグチャでした。ですから、今年の1月になってから修繕を始めました。玄関から下は全部替えました。まだ母屋はいいが、納屋や蔵の瓦がバラバラと山ほど落ち、蔵の壁も全て落ちてしまいました。

特に、物置とトイレの被害が大きく、どちらも完全に崩壊してしまいました。地震前より家の土台は幾分傷んではおりましたが、この地震で手がつけられない状態になり、修繕という段階ではなくなってしまいましたので思い切って全部やり直してもらいました。

●20世紀最後の大地震を記録として残し、教育の場、地域活動の場で、再認識し合いながら自然災害を理解するべきである。(会見町、男性、40代)

●生活の為に“ライフライン”が必要です。そのために備蓄食糧、その他の防災用品は準備すべきだと思います。(会見町、女性、50代)

●災害はいつ起きるか分からない。いつ起きても対処できるように住民と行政が一体となれるようにしたい。(会見町、男性、60代)

●震源地が近くで小規模の地震が数年(5～6年)にわたり続いたように思います。(会見町、男性、40代)

●家を建てる時に「筋交い」を必ず入れておく、地盤は埋立

住宅再建支援として150万円の補助金を受けました。その他にトイレの集落排水の補助金で約90万円を日野町から補助していただき、そのお金でトイレの撤去をさせて頂きました。まだまだありますが、費用も伴うことなので、ゆっくりと直していこうと思っています。

●集落の被害状況

ほとんどの家が被害に遭っています。3戸は修繕にかからずに、解体して建て直されました。石塔は大小問わず全部倒れてしまいました。屋根は、きちんと見れば歪みがきているかもしれませんが、落ちるところまでいっていません。この辺でもトタン屋根は被害が1番少なく、瓦は一番被害が多かったようです。

●ボランティアの援助はありがたい

防災の準備としては、家の中のどこにどのような物があるぐらいは大体分かっていますが、必需品を一括して「これを持ってすぐどこかに行く」という準備はしていませんでした。しかし、今はかなり余震が続きますし、少しは準備をしています。

一番助かったのは、町の放送体制で、防災無線を付けて頂いていて良かったと思います。必要に応じてその都度連絡が入り、指示してくれました。

ボランティアの方にもお世話になりました。防災無線を通じて「ボランティアの希望があれば、町の方に申し込みなさい」と言われたので、連絡してお願いしました。後片付けやこれ以上崩れないような補強とか、あらゆることを親切にボランティアの方はやって下さり、大変助かりました。

この集落には避難場所はありませんでした。近くに集会所がありますが、集会所も壊れており、学校も遠いのです。しかし、この辺は集落ですから近所の仲が良く、助け合いもありました。例え

ば、みなさんの家が断水の為に風呂が使えなかったのですが、井戸水を使っておられる方が2軒ほどあり、そこにもらい風呂に行かれた方もあったようです。我が家は息子の所に行ったり、皆生温泉に行ったり、水が出始めてからは、鍋で湯を沸かし、風呂に貯めて入ったりしていました。

●危険度判定への疑問

この周辺の部落の危険度判定は、赤はほとんどありませんでした。我が家も危険度判定は黄色でしたが、家屋の危険度判定には色々な問題もあり、不公平がありはしないかとは思っています。判定時間は10~15分ぐらいだったでしょうか。「それだけの時間で分かるのか？」と思いました。その1回の査定で決定してしまう大雑把な判定です。我が家も留守の間に玄関、車庫、蔵にも貼ってありました。「何だろう」と思い見ると「注意して入って下さい」と書いてありました。隣家の人は「そんな人が来るのなら、片付けずに待っている」と言って、そのまま待っておられたようです。外の方は見てもらえば分かりますが、なかなか全てをばっと見ただけで判断するのは無理だと思います。

●地震を体験して

今は、今後このような災害があったらどうするかということより、今は壊れたところの修繕をするのが精一杯です。みなさんも、それを一通り直すまでは次は何をすれば良いかということまで、なかなか考えていないと思います。「何かあればする」程度で具体的な所までまだ余裕がなく、その段階までいっていません。

有線で色々連絡して頂いた事、ボランティアの方と自衛隊の方には大変お世話になり親切にして下さった事、大変助かりました。

にしっかり大石を入れておくなど家の建て方に一考を要する。(岸本町、男性、60代)

●震災の直後には瓦の落下が激しいので、慌てて外に飛び出さないこと。(岸本町、男性、40代)

●日頃、いろいろな防災訓練に参加し、真剣に取り組むこと。本番では訓練だと思って落ち着いて行動すること。(岸本

町、女性、40代)

●懐中電灯・ラジオの準備も怠りないように。(日吉津村、男性、60代)

●地震で教わった全ての教訓を他の人に伝えたい。(淀江町、男性、60代)

体験談10

日野町、女性、70歳代

家族構成：本人のみ

住居：木造2階建家屋／一部損壊

一人住まいの老女の私に、 ご近所の方からの暖かい差し入れ

●保健婦さんとの電話中にグラッ

ベッドで寝ていたところ町の保健婦さんから電話があり、話をしておりましたらグラッときました。ハッと思いましたが年を取ると鈍くなるので、すぐにはピンと来ませんでした。電話の向こうで保健婦さんが何度も、名前を呼んでくれたので、私は机の下にもぐりながら「電話は持ってますよ」と言いました。そうしたところ、近くで工事をしていた工事現場の人が「おばあさん、早く出なさいよ。地震だぞ」と言いながら庭に飛び込んできました。それでハッと我に返り、「これは出なければいけないなと思いました。

鈍いのも良いものです。若さでパッと飛び出したら、何があるか分かりません。しかし、このまま出ていいものか。何か持ち出す物はないか。出ている間に何かあるとも限らないから襦などはみんな開けておかなければ、入れないことになって困る。電気がなければどこにも動けないから電気も持たなければいけないなどいろんなことが頭を巡り、懐中電灯と現金と病院にかよう保険証など重要に思うものをリュックに入れて背負って外に出ました。

●ありがたかったおにぎりの差し入れ

外に出てみると、地震で生き埋めがあったらしく、みんなが生き埋めの救出の現場に心配で集まっておりました。「これは大変なことだ」とは思いましたが、好奇の目で見るのは気の毒だと思い

じっとしておりました。すると、駐在さんが一番先に来て「おばあさん、建物の下や高い物（電信柱など）の下にはいないで下さいね」と声をかけて下さいました。とてもありがたかったです。

家から出た後は、道に座っておりました。他の人はバタバタされておりましたが、救急車や救命隊の救助の邪魔になると思ってジッと座っておりました。

その日の夜、隣りの人が夕方帰って来て「おばあさん、食べる物がありますか」と言ってみえ、「おにぎりを買っているので差し上げます」と言って、その夜とあくる日に食べれるほどのおにぎりを分けて下さいました。それまでは少し敬遠しておりましたが、その時「人は見かけなどで見てはいけないものだな」ということをしみじみと感じました。

●仏さんと一緒なら

地震当日の夜は、家の中で寝ましたが、天井から柱が一間置きに建っており、その下で耐えております。これが落ちたら、この家と仏さんと一緒だと心を決めましたら恐いことはありませんでした。「子供の所に3日居た」「4日居た」という話を後で人から聞きましたが、私はこの家におりました。このように心を決めると、よく眠れるようになりました。

青森にいる次男の子どもが従兄弟の家の者から「日野町は大変だぞ。早いことお婆さんに電話し

●非常持出し袋、備蓄食糧、医療品、防災用品等、置き場所を決めて誰でも持出せるようにまとめて袋に入れておく。

(淀江町、男性)

●地域の防災訓練を家庭及び地域で日頃より行っていること。(淀江町、男性、40代)

●貴重品や重要書類は取り出しにくい所にしまいがちですの

で、取り出しやすい場所に保管すること。(名和町、女性、40代)

●子どもが大きくなってから親として、この地震の体験談を話してあげたいです。(日南町、女性、20代)

●災害は突然発生するものなので、常に非常時のことを頭の中に入れて生活しなければならない。(日南町、男性、60

る」と言って下さったそうで、「お婆さんのその声なら大丈夫だ。あとは何とでもなるから案じるなよ。体を大事にしろよ。携帯が繋がらないから公衆電話からやっとかけてるよ」と電話をかけてきました。それから、大阪に居る長男の子どもが、地震後、3週間、毎週金曜日の仕事を終えてから帰って来てくれました。このように、非常に力になってくれありがたかったです。

家に戻ってみると仏間の写真がみんな飛んでおり、位牌も飛んでいました。「また地震が来て位牌が壊れてはいけない」と思い下に並べておきましたが、幸いに位牌も壊れず、仏壇の方の破損はありませんでした。「これも朝晩お線香をあげた効果だろうか」と自信を持ちました。

●知らなかったビニールシートの配布

「一戸平均2枚ずつビニールシートを配布した」という話を聞きましたが、案内があったことに気がつきませんでした。

母屋は大丈夫でしたが、トイレの地盤がしっかりしていなくて被害がひどかったようです。そのため、いつ見えたか知りませんが役場の方が罹災証明書にハンコを押して送って下さいました。

「いつ調べられたのですか」と聞くと、「外から見たら分かります」と言うておられました。瓦は意外と丈夫でした。「あまり、すぐに修繕しない方がいい」と息子も言うものですから、また余震が来ないとも限らないし、「その時はその時」と言うて修繕しておりません。

●日ごろから元栓を締める癖を

お昼を過ぎた時間だったので火は使っておりません。それから、自分は年寄りですし、日頃から、安全に気を付けていたので火を使う度に元栓は切るようにしておりました。日頃の心掛けというのも大切なものだなと思いました。

●貯えはやっぱり大切

今回の地震で「貯えは必要だな」ということを痛感しました。皆さん「その日暮らせれば、あとは何とかなる」と楽天的なおっしゃいますが、それに同調できないことありませんが、やはり少しでも貯えがあれば心に余裕を持つということにもつながり、強さにもなるものだというを現実今回の地震で痛感しました。

●戦争体験と同じだった地震

アンケートには「もう疲れた。二度と経験したくない」と書いたような気がします。しかし、戦争を経験したことが大いに役立ちました。戦争より大きな被害は何もないですから。人並みだと割り切ったら、もう何ともなくなりました。あの時、食べようと思って口に入れても飲み込むことができませんでしたので、「この経験はどこかでしたな」と思い返してみると60年近く前にそれを経験していました。「あれだ。忘れかけていた」ということで、また新たに考え直すことができました。人並みということは良いことです。戦死は人並みではありませんでした。戦争がよい教訓になりました。

代)

- 地震後の新聞を大切にしているので、孫達が知りたがるようになったら新聞を見せて話をしてやろうと思っています。(日南町、女性、60代)
- 地震の断層が遠くても大きな地震がいつあるか分からないことを子供に伝えたい。(日南町、男性、70代)

- いつでも家族との連絡ができるようにすることが大切です。(日南町、男性、70代)
- 天災はいつ発生するとも限らないので、絶えず心の準備をしておくべきである。(日野町、男性、60代)
- ボランティア活動等大変な難かった。(日野町、男性、60代)

体験談11

溝口町、女性、50歳代

家族構成：本人・夫・子供1人

住居：木造2階建／一部損壊

全戸5万円の町からの見舞金は助かりました

●家族全員の無事にホッ

地震発生時は、店にいました。昼食は普通ならたいてい1時か2時くらいになるのですが、その日はたまたま12時くらいに食べて、勤務先の店の中に立っていました。その時にグラグラと揺れ出したので、「あ、地震だ」と思っていたら、蛍光灯が揺れながらガチャンツと落ちてきたのです。すぐに、これは大きな地震だと思って、店のすぐ前の何もない広場に飛んで出ました。もう一回余震が来た後に、携帯電話を取りに入りました。携帯電話をみると主人から着信が入っていました。すぐに主人にかけ直すと、その時はまだかかりました。その後、子どもの勤めている所に電話をかけてみると、もう通じなくなっていました。でも、しばらくして電話が通じるようになって確認したところ、一応、家族全員が無事だったので、それだけでもよかったと思ったのです。

●家の周辺には屋根や壁が散在

(店のほうの被害は)上に置いていたものが落ちていたので、とりあえずそのまま店に土足で上がりました。その後、鍵やシャッターを閉め、電気のブレーカを下ろして、すぐ自宅に帰りました。店の周辺は少し瓦が落ちたくらいで、そんなに被害は大きくないと思っていました。自宅は店から車で5分くらいなのですが、自宅の近所は全部、屋根の瓦や蔵の壁が落ちていました。

余震はずっとあったのですが、靴を履いたまま台所のほうから家の中に上がってみると、冷蔵庫

のドアや閉めて出たはずのサッシが開いていました。でも、割合揺れの方向がよかったのか、中のものが落ちていたのは洗面所ぐらいでした。

地面に亀裂の入っているところもあって「うわぁ、これはひどかったんだなぁ」と思いました。墓も全部倒れていました。

●非常食の買出しに大急ぎ

悪い天気が続いており、夜になって雨が降ったりしたら大変だと思っていました。すると近所の人が「〇〇さんが農協にビニールシートを買いに走っていったぞ」と言っておられました。それを聞き、我が家もすぐにビニールシートを買いに走りました。

近所の人も雨漏り対策にバタバタとしていました。電気がなくなると冷蔵庫の中のものもだめになるので、農協から帰ってきた後、コンビニに行っておにぎりやパンなどを買い込んできました。電気のブレーカを下ろしたり、ガスの元栓を閉めたりしたのは買い物から帰ってきてからです。それから、クーラーバックを冷蔵庫の横に置いていたので、その中に買ってきたものを詰め、他に毛布、懐中電灯、タオルなど必要なものも一緒に車の中に入れました。その後、何も倒れてこないところに待機していました。

主人はたまたま仕事で被害のひどかった会見町にいたのですが、地面から地下水が噴き出していたそうです。溝口町も一晩中揺れていました。

●県町村等の対応は、最高とは言えないものの成功だったと思います。(日野町、男性、70代)

●こんな災害に、いつ遭遇するか分からないのが世の常で、それに対する心構えは必要である。(日野町、男性、70代)

●震災により3歳児でも「壊れた。家を直す、崖の修理」という言葉が口に出ているので心のケアが必要だと思う。

(日野町)

●町全体で防災対策の強化と防災についての考え方を真剣に取り組んでもらいたい。(日野町、男性、40代)

●携帯ラジオが一番早く情報が分かる。(日野町、男性、70代)

●家族と災害時の避難場所、連絡先を相談しておくことが必

●危険な公民館を避けて車に

一応、避難場所の公民館があるのですが、公民館の屋根や天井が落ちていて、余計怖かったので子どもと二人、毛布を持ち込んで車の中で過ごしました。

二日目は（また大きな地震が起こるかと思い）靴下を履いて服は着たまま、懐中電灯を枕元に置いて家の中で寝ました。

飲み水は幸いにも大丈夫でした。家の横には山から流れてくる、小さいけれどきれいな川があったので、手を洗うくらいならそれで十分でした。

●避難所にはバリアフリーが必要

私たちの避難場所の公民館に行くには階段があります。特別には問題はないのですが、高齢化して車椅子を使うようになってくるとちょっときついなあとと思います。これは高齢者だけでなく、障害者のためにも是非考えてあげないといけないと思います。

町の役場の人だけで町全体を見るのは人数的に大変だから、各部落で区長さんとか役員さんなど、そういった人と役場が密に連絡を取ってほしいです。また、地震は自然のことで誰にも予測できません。やっぱり火が怖いので常に火に気を付けるように、それが自然と癖になるようにすることが大切です。地震のあと、カセットコンロやボンベは常時切らさないようにしています。大事なもの（キャッシュも含めて）はちゃんと自分で分かる場所に、すぐに持ち出せるようにしておくこと。防災袋がある家はいいいと思います。自分で気が付いたものを入れておく。腐らないものや懐中電灯とかカッターとかタオルとかを入れておいてもいいと思います。

避難所となっていた公民館では、ボランティアの方々が炊き出しをやっていましたが、お年寄りだけのところはいいけれど、それ以外の一般家庭の人も避難している訳だから、炊き出しなどをす

ることが本当にいいことなのかと思います。避難している人たちは自分達で考えて助け合うことが必要です。県や市町村に頼るだけはいけないと思います。

●助かった。全戸5万円見舞金

見舞金が町から5万円ずつ、全戸に出ました。その5万円で壊れた屋根が直せたという人も中にはあったようです。それだけでは足りない人もたくさんいたようですが、このような緊急時には、お金は必要なので、今回の町の対応は大変良かったと思います。

要と思います。（日野町、男性、70代）

- 家を耐震化することや何年ごとに点検も必要だと思う。災害時に使える貯蓄は必要だとつくづく感じた。（日野町、男性、80代）
- 自衛隊や災害ボランティアへの感謝の気持ちと、恩返しの方法を考えること。（日野町、男性、70代）

●集落の自治会・自治体の縦横へのつながりの再チェックを早急にして欲しい。（日野町、男性、60代）

●記録写真の展示、保存や毎年10月6日に災害の日とする行事（避難訓練等）を考えること。（日野町、男性、60代）

体験談12

米子市、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造2階建家屋／一部損壊

ここ数年の揺れ対策の家具転倒防止ビスが役立った

● テーブルの下に潜る余裕さえなし

地震発生時は、玄関先で電話が終わり受話器を置いて歩き出した時でした。体が倒れないように両壁に手をつけて支えるのがやっとでした。ガスや火の始末は使用していれば考えるかもしれませんが、今回の場合は全然頭にありませんでした。その場にしゃがみテーブルの下に潜る余裕さえありませんでした。

妻は足が悪い為、ベッドの側におり、身動きが取れない状態でした。揺れがおさまってから、家の中の損壊を確認し、少し片付けかけたのですが、その様な状況ではありませんでした。

● 数年来の地震のお陰で

屋根瓦が前のお宅の所に落ちていました。家の周りを一周して近所も見歩きましたが、他にもズレたり壊れている所もありました。

家の中は、ここ5～6年の間に西部地震の前触れのような地震がありましたので、ここ数年のうちに少しずつ家具は事前に転倒防止のビス止めをしてありました。ですから、家具等の壊れる心配はありませんでしたので、これもここ数年来の地震のお陰です。“家具止め”ということが、今回しておいてとてもよかった事だと思いました。その点だけは用心した甲斐があったと思います。

装飾品なども建物と一緒に揺れるという、遠心分離機にかかったような状態だったようで、多少の壊れで済みました。しかし、壊れ物を片付ける時にケガをしました。

片付けようと思っても、かなりの余震があった為、片付ける気が起きませんでした。

自宅裏で作業をする為に、水道だけでも使えるようにしてトイレが使えるようにしていたのですが、裏だった為に水道管が地下で割れているのに気が付かず、近所の人から漏れている音がすると教えてくれて判りました。ですから、2～3日の間水が出っ放しの状態でした。他にも、震災数日後に100ボルトの電線が何度かの地震の影響からか切断されており、隣家が停電しました。軒下の柱のアンクルが折れており、モルタルも焦げていました。

● ビニールシートの配布でひと安心

我が家は知り合いの工務店が翌日には来てくれ、全部直してくれました。一般的に家屋の補修作業はかなりの時間がかかっているようです。我が家も外から見ると、随分ひび割れがあるので、いろいろな業者が、「直しましょうか」「いかがですか」と日参してきます。

なんと言っても、屋根の補修が間に合わないのが一番心配だったのですが、地震後、3、4日経ってから役所の人から3人くらいで「お宅はビニールシートはいりませんか」と持ってこられました。その後、大雨が降り「良かった」と思いました。ビニールシートの配布がなければ、家中雨漏りだけで被害がひどかったと思います。本当に助かりました。

- 日常生活に必要な物資は備えておきたい。家具は多く置かない。町との連絡は密にしたい。集落で助け合って連絡をしよう。(日野町、男性、60代)
- 行政の指導があつて本当に心強く、感謝の気持ちで一杯です。(日野町、男性、70代)
- 日頃の防災対策(例えば家具の固定等)がやはり必要です。

(日野町、女性、30代)

- 復興体制を目指した行政側(県・町)の取り組みがすばらしく、この手厚い対策を全国的に伝えたい。(日野町、男性、60代)
- 災害に備えて保険は掛けておくべきだと思います。(日野町、男性、70代)

●震災後、今、思う事は

あるイベントで起震車で揺れの体験をしました。その時は「これから起こる」という心の準備がありながら動くことができませんでした。ですから、実際に大地震が起きたら余計に動けないので、あまり役に立つとは思えません。しかし、今後の為には体験していて損ではないと思います。

我が家では消火器はありますが、古くなりどうやって始末をしようかと思っているくらいです。この度も建物の倒壊は心配したのですが、消火器の心配はしませんでした。中で燃えても、隣近所が少し離れているという気もあり、本当はこの様な事では駄目だとは思っているのですが…。今後は、消火器の心配もしなければいけないと思っています。

地震の後には、特別に備えるような事はしていませんが、落下物防止にヘルメット、または防災頭巾のような物が必要だと感じました。しかし、その時はそう思いましたが、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で今はかなり心が緩んできています。

これから家を建てる人は、基礎工事をしっかりしておかれたら良いと思います。基礎のできているお宅の中には今回でもびくともしていないお宅もあります。基礎がしっかりとできていない家では、大きな被害になっています。

●行政も被災者の立場で

震災後、市の方から避難場所の広報がありました。しかし、余裕のある時ならまだしも震災の時にはどこへ行こうにも、そんな余裕はありませんでした。

地震のあくる日に、自治会長と市の方が2人で見回りに来て、被災状況を写真に撮られたのですが、その事についての報告が無いのでどのように役に立ったのかと疑問に思います。行政の方で何らかの手を打ってくれるのだらうとは思いますが、その後は一切届けが無いと補償してもらえないということです。この事に対して大変不満に

思っています。市役所に行き罹災証明書を貰いましたが、「土台が壊れています」と言っても罹災証明書を発行してくれただけです。それに対し、見に来て調査するということがありませんでした。危険度判定の赤い札が張ってある家もあるので、調査に来られている家も中にはあるのですが、それにも疑問が残ります。

義援金についても届けをすれば買えるものなのか、誰が判断して義援金をくれるものなのかと思いました。そういうランク付けを誰がどのように行っているのかと思います。

診断士が来て歩かれたと言う話は近所で聞きました。「お宅も危険の認定を出しましょうか」と言われましたが、そうすると家を直さなければいけなくなります。いくら補助をしてもらっても費用は、その何倍も払わないといけなくて断りました。この様なさまざまな制度（罹災証明・支援金・義援金・危険度判定等）の仕組みが、どの位住民にきちんと理解されているのでしょうか。

行政も被災者の立場で考えて欲しいのです。届け出制でなくても、行政もいろいろと調査をして欲しいのです。そして、行政から住民への広報をもっと積極的にしていく必要があるのではないかと思っています。

- 山間地は人が少ないし、日中は老人ばかりなので、日常の近所づきあいを大切に、助け合う気持ちを作ることが大切だ。(日野町、女性、60代)
- 美しかった自然が変わっても人間の心の中にある昔の思い出は、いつまでも消えることはない。(日野町、男性、70代)

- 災害はどこに発生するか分からない。お互いに助け合うことを忘れてはいけない。(日野町、男性、60代)
- 日頃、対策をとっておくことが確実に効果を発揮するということが分かりました。(江府町、男性、40代)

体験談13

米子市、男性、30歳代

家族構成：本人・妻・子供2人・母の5人

住居：木造2階建家屋／一部損壊

ブロック塀の下敷きで全治6ヶ月の大ケガ。 地震のことは忘れない

●その時ブロック塀が

地震発生時、自宅には母と2人であり、家の中で仕事をしていました。途中、トイレに行っている際に地震に遭い、ビックリしてしまい母より先に外に出ました。その時どちらに行こうか迷っている時に近隣の家の塀が倒壊し、ケガをしてしまいました。

倒壊したブロック塀は7段あり、1.5m程の高さでした。倒れたブロック塀は、ちょうど道路幅一杯で逃げ場もありませんでした。しかし、倒壊したのは片側だけで、もう片方のブロック塀は古いのですが大丈夫でした。

(現場写真を見て)一面に倒れたブロック塀の、一部抜けている部分に座った状態で、足を投げ出したままブロック塀の下敷きになっていました。ブロック塀が倒れてきても、何もできない、何も考えられない状態でした。しかし、その時の瞬間の恐怖は体験した者でなければ分からないと思います。

母が必死になって近所に助けを呼びに行きましたが、あいにく昼間で若者がいなく年寄りばかりでした。消防署にもつながらなかったようです。幸い、様子を聞きつけた若者が2人来てくれ、救出してくれました。救出後は救急車が来ないので、痛みを我慢して背負ってもらい、病院へ連れて行ってもらいました。

ケガの具合は右足の膝の半月盤・靭帯損傷、左足は膝から少し下で複雑骨折、踵が粉碎骨折・骨



盤・腰が骨折しており、今年の4月いっぱい入院をしていました。現在も障害が残り、今後これ以上の身体の回復は望めそうにありません。障害の申請をしましたが、障害認定は取れませんでした。

最近では、どうにか動けるので、知人の紹介でリハビリがてらに週に4日ほど仕事に行っています。

●残った家族は・・・

発生時、子供は学校に行き、妻は用事があり出かけていました。しかし、連絡をつける方法がなく、どうする事もできませんでした。妻は隣人から私のケガのことを聞き、病院に駆けつけました。

妻は病院の付き添い、家の事、その他諸々を1人でしないといけなかったのが、非常に大変のようでした。

当日の夜以降、残った家族(母・子供2人)は余震等が怖い為に隣人のお宅の庭に2泊させて貰い、精神的にとっても助かりました。

●何もしていなかった防災対策

家具の置いてある向きが良かったのか倒れる事はなく、引き戸だったために中身も無事でした。隣りの家は開き戸だったためか壊れたそうです。

- 家具が倒れた時のことを考えて、赤ちゃん、子供などは寝かせる場所を注意し習慣付けておきたい。(江府町、男性、50代)
- 個人が相談できる窓口を役場に真っ先に設けるようにして欲しい。(江府町、女性、40代)
- 墓の石塔は飾り気の少ない四角で竿が短い物が安定してい

ると思った。また、石垣はコンクリートで練り積すること。(江府町、男性、60代)

- 被害の記録写真、復興状況も記録として残しておくこと。(江府町、男性、60代)
- 日頃から災害に備えて、いろいろと準備、勉強して災害に対する心を強く持っていけばと思います。(溝口町、男性、

防災対策は何もしていませんでした。

● 身体の補償は

市からは義援金としては貰いましたが、ケガに対しての補償は何もありません。老人介護保険料を払っているが、怪我人が出てお金がかかるので、払えるようになるまで一時停止の願いをしましたが断られました。事情を説明しても半壊以上の罹災証明がないといけないと言われました。

家に対しての補償が出たのだから、体に対してももう少し出ないかと思います。

何かの支援や制度があれば、生活面でもかなり助かりますが・・・。

家屋の損壊はお金を出せば直るが、身体のケガはお金を出しても治りません。また、入院に際しての費用は、労災にならないので医療費が高額になります。正直言うと、これからの生活のことを考えると、とてもやりきれない気持ちで一杯です。この地震に対して、誰を責めるわけにもいきません。ただ、倒れたブロック塀の家の人と補償については、現在も話し合いの最中です。

● 情報収集の手段は

地域的（自治会）での防災対策への取組み等は特になく、寄り合いなどありません。

ラジオやテレビで情報を取り入れるくらいでした。

余震の時の避難場所への指導は、特にありませんでした。自分達の決められている避難場所は距離的に遠く、避難途中で危険な場所もあるので緊急の時などは近くの場所を開放してもらいたいと思います。

自分の家がこのような大変な状況になり手一杯だったので、情報などに感知する余裕がなく、他の事が何も考えられませんでした。

70代)

- 忘れないで欲しい。私は新聞の切り抜き、写真を残しました。時々家族だけでなく、友達、近所の方、みんなで話し合うといいですね。(溝口町)
- 家族との連絡手段として携帯電話は使えない。(溝口町、男性、50代)

- 一家の中で耐震構造の安心できる一室を平素から作っておくこと。(溝口町、男性、70代)
- 各地の避難所は耐震構造の確実な施設にして欲しい。また、災害を他人事と思わず、できることは先ず自分から実行して欲しい。(溝口町)

体験談14

米子市、女性、30歳代

家族構成：本人・夫の2人

住居：借家・鉄筋コンクリート造アパート／一部損壊

幼い頃の地震体験が、 この地震でPTSD(心的外傷後ストレス障害)として

●鳥取で地震なんて

地震発生時は仕事でした。最初、「あれ？何だろう」と思ったとたん、遊園地にある大きな船の形をした乗り物のようにだんだん揺れがひどくなり、「これは凄いことが起きたな」と直感しました。何秒か分かりませんが、揺れがひどくなっていくと同時に、上の電灯も一緒になって揺れたので、「このままだと落ちてくる。危ないな」ということで外に逃げました。たまたま今、仕事の関係で鳥取県に住んでいますが、「鳥取県はそんなことはないはずだ」と自分の中で信じようとしていました。

テレビを見て震度6の大きな地震だということを知りました。また、家が倒壊した為、内浜線が通行止めになっていること。ちょうど大根島から境港に帰って来られた方がいて「全滅だ」とおっしゃっていたので、「たぶん、もう家はないだろう」と半分覚悟して夕方仕事を終えて家に帰りました。

ところが、帰ってみると建物があったので「あまり良いアパートではないが、意外と強かったんだな」という感じでした。家の中に入ってみると、この間の芸予地震の時は完全に倒れておりましたが、角度と揺れ方の問題かタンスや冷蔵庫といったものは倒れておりませんでした。ただし、中身は全部出ておりました。タンスの上に置いていた空箱やぬいぐるみなど軽い物の中には5～6mぐらい飛んでいるものがありました。携帯電話を

持っていないので電話自体が埋もれてしまい、どこにあるか分からないので両親に電話をしようと思っても、とてもそのような状況ではなく、とりあえず通路を作るだけで夜中までかかりました。

私だけ先に帰って来たので、いったん中に入ってはみたものの、その後、余震があったので怖くて主人が帰って来るまで外の公園で待っていました。当日はずっと余震でした。時折、震度3か4くらいの大きな地震があり、とにかく必死でしたので細かい破損状況は確認しませんでした。

次の日が土曜日だったので、とりあえず何とかして寝るだけの場所を確保しましたが、怖くてほとんど眠れませんでした。

●油断していた防災準備

水圧が下がって水が出なかったので電話をしたら、「皆さんがお水を使うので制限しています」ということでした。お水はチョロチョロ状態。もちろん、ガスも怖かったので4日間ぐらいは一切使いませんでした。幸い、近くのスーパーが比較的すぐ開いたので惣菜やお弁当を買って3～4日は過ごしました。お風呂は季節が良かったということもあったので、極端に言えば1～2日お風呂に入らなくてもいいということで、はっきりとは覚えておりませんが3～4日は入りませんでした。

本当のことを言うと「鳥取県には来ないだろう」と胸の中のどこかにありました。それは、「来てほしくない」という強い思いの現れだったかもし

- ガスはもちろん電気もブレーカーを下ろすことを学びました。(溝口町、女性、60代)
- 行政の説明責任、職員の意識改革、意志統一が絶対必要です。(溝口町、男性、40代)
- 非常用の常備品として食糧、水をストックしておくこと。(溝口町、男性、50代)

れません。この時期は備えが少しいい加減になっていました。こちらに来て10年近く経ちますが、最初の頃は神戸の地震があったこともあって、お水を入れたタンクをお風呂の所に置き、古くなったら定期的に入れ換える等こまめにやっていました。また、カンパンや懐中電灯や下着やビニール袋やカップなどちょっとした物を入れた防災袋も持っていました、今回は使いませんでした。何年か前までは比較的すぐ取れる場所にこの袋を置いていたのですが、あまり地震がないので奥の方にしまっていました。ただ、今では懐中電灯とラジオ、そして生理用品は枕元に必ず置いております。今回は、ラジオがかなり重宝し、色々な情報を入手しました。

●心のケアが必要なPTSD

地震が怖いということで夜眠れなかったり、時折忘れた頃に余震があるので、これを機に電気をつけたままでないと眠れなくなってしまい、今も電気をつけて寝ています。12月くらいまでは自分でも「一時的にそういうのがあるから」と思って様子を見ていたのですが、12月を過ぎても治らないので県の相談窓口の方に電話をしました。そうしたところ、鳥取医大に専門の先生がいると教えて下さり、そちらに相談して今は回復しております。

地震が起きて3日か4日くらいした頃だったでしょうか、小さい時に大地震に遭ったという怖い記憶が甦ってきました。父親が一時行方不明だったために、どうしようもない恐怖感や「お父さん、どこに行ったんだろう」という不安感。それから、当時の地震のことが甦ってきました。とにかく、頭では「そんなに大きい地震が続けてくるはずがない。大丈夫だ」と分かっている、ちょっとした余震で足がガクガク、心臓がドキドキしてどうしようもない状況でした。だからといって、社会生活自体にはそんなに支障はないので普通に仕事に行ったり、生活をしていました。1月ぐらいま

では結構、余震があったので、仕事中に余震があると、「あー」という感じでパニックになってしまいうことが続きました。

●理解されない心の病

先生に色々伺ったところ、子供も勿論そうですが、阪神・淡路大震災を経験された方は大人の方でも症状が起きるということをおっしゃっていただきました。しかし、大人になると、このようなことをなかなか言えないと思います。一応、「保健所で自由に相談できますよ」と言われたのですが、結局、私も保健所には電話しておりません。また、「相談があれば保健所に」ということですが、どのような形で取り組んでいらっしゃるのかわかりません。

それから、職場で「まだそんなことを言ってるの」という感じで理解されないことが一番辛かったです。そんな簡単にパッとよくなるものではありません。私はたまたま神戸に知り合いの方がいたので相談をしたら、「大人でも10年経って治らない方もいれば、10年経って急に嘘のように大丈夫な人もいます。だから、周りの人が何を言っても気にしないで大丈夫だよ」ということを神戸の経験された方々に言われて、「自分はこれでもいいんだ」と思えるようになりました。

このような精神的なことは、風邪のように薬を飲んだらすぐパッと治るというものではないということを皆さんが理解されていないように思います。それまでは普通だったのですが、一人で家にいるのが怖いので未だに夫と時間を合わせて帰るようにしております。このようなことも「まだそんなことをしているの？」と言われるますが、大きな事件やこのような自然災害が起きた時の人々の精神的な面は簡単ではない、ということを啓発活動して頂きたいと強く思います。

体験談15

米子市、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造2階建家屋／全壊

神戸地震で被災し、 安心だと思った米子でも、また被災

●もしも慌てて降りていたら

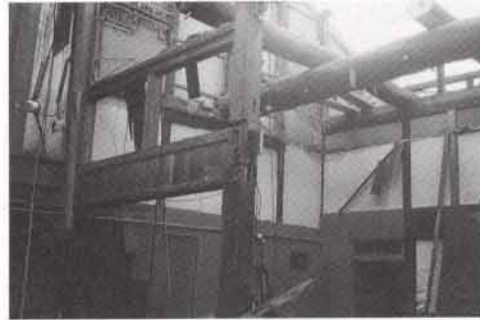
地震発生時は、2階の廊下に椅子を置いてお酒を飲みながらテープを聴いている最中でした。床柱が左右に5～10cm程の横揺れがしましたが、揺れている最中、騒いでも仕方がないのでもうじきおさまるだろうと思いジッとしていました。すると、積んでいたテープが倒れたり、床の間に飾ってあった皿がひっくり返りました。階段の上がり口に土壁があったのですが、それも崩れ落ちました。あわてて階下に降りていたら、壁が頭上に落ちてきていただろうと思うので、ジッとしていて良かったと思いました。

今回の地震は揺れの向きが幸いしたのか、我が家は潰れませんでした。今は空き地ですが、隣りには震災前は建物がありました。この震災で倒れました。隣家の土地に私の家のがっかかったようになり樋を壊したような形になりました。市の審査も半壊という事でした。

●阪神大震災では・・・

神戸の地震はキツイ上下の突き上げの直下型でした。周辺のありとあらゆる物が全て倒れ、飛んでいました。神戸で住んでいたマンションでは、基礎が30cm位引っ張られてしまいました。しかし、建物はそのままに残っていたので、修理に長い期間かかりました。

地震後の避難時に、妻は足場が悪くてこけてしまい、本箱の下敷きになり腰の骨を折ってしまい



ました。ですから、避難も出来ず、ここで死ぬのではないかと思ったほどでした。震災後2日目に、親戚が迎えに来てくれて米子の家へ帰ってきました。

“地震は神戸でこりこり。米子なら大丈夫だろう”と思って帰ってきた途端の今回の地震だったので、大変驚きました。

●防災の準備について

2度の震災体験後の準備としては、非常持ち出し袋や通帳などは準備していますが、特別な物はしていません。阪神大震災では、家の中の物は全て倒れてしまった為、非常持ち出し袋を作っても取り出す事が出来ないような状態でした。

それよりも、どこに逃げようかという位のことしか考えていません。

●妻の安否が

地震後、建物の被害や火災の事は頭に入りませんでした。一番気になったのは、外出中（お寺に行っていた）の妻の安否でした。階下に降り最初にした事は、外出先の妻に連絡をとるために電話帳で番号を探したことです。気が動転していてなかなか探せませんでした。やっと電話を掛けるとタクシーで帰ったとの事で無事を確認した時やっと安心しました。

お寺では、蓮華が倒れたり、木札が落ちてきた為、妻は怖くて外に飛び出したそうです。墓石も

倒れ、道を塞いでいたそうです。

●周辺の被害は

自宅周辺の被害はあまりなかったようです。

我が家は古い家屋であり、余震が怖い為に近所の親戚の家に1ヶ月程お世話になりました。

被害状況は、家の壁の破損、蔵の壁の破損、皿がひっくり返ったりした程度でした。自宅に帰ってからでも、かなり大きな揺れがありました。

●行政への要望として

地震の直後(当日)は、市からの避難勧告などはありませんでした。あくる日には自治会の役員が被害の調査と、次に大きい地震があった時の避難場所の指示がありました。それまでは、正式な避難の場所はマップが来ていたが、あまり詳しく見ていませんでした。

壊した家屋の方に、風呂や台所などが全部あったので、これから年もとるので、残った家屋の方をバリアフリーに建て増ししようと計画していました。しかし、続けて建てるとう既存の建物も全部サイディングで囲わなければ許可が下りません。その上、準防火区域の関係で、棟を続けて建てるとう新・旧の建物が同じ建物とみられるので、許可が出ないのです。だからと言って、棟を続けて建てないわけにもいかず、家を壊すとう事もできません。

地震がなければ、少々歪んでいても生活できていたところですので、そこを許可して欲しいと思うのです。増築の許可が出て建物が建つまでは、片付けるとう段階にはなりません。現在もなお、万全とう生活環境の形にはなっていないのですから……。

神戸に比べれば、鳥取の行政・関係機関の対応は早かったように思います。余震の関係等での早い情報の伝達は特に必要だとう思います。

●地域での防災・被害

地域住民との防災関係での会合は、自治会の役員がすぐに集まっているいろいろ相談をされたようです。私は班長でしたので、避難場所を把握するようとうと言って回りました。ビニールシートのいるところは配ってもらいました。

地域での被害状況としては、屋根瓦の被害は近所では1件でした。我が家では壁の隅の方が力がかかるのか、割れていますが日常生活には特に支障ありませんでした。

地域にも拡声器が付いており、周辺に伝えるのには効果的だとう思います。

横浜の方では行政の方が耐震構造にするにはどういう風にしたらいいのかとか、費用がどのくらいかを調べていたようです。古い家の者としては、その様な調査をしてもらいたいとう希望します。

娘が東伯の方にいますが、そこは有線が流れており、テレビよりも情報が早く入ってきたそうです。災害時は公衆電話でなければ通じないので、まず財布を持って公衆電話に走ったそうです。しかし、近頃は公衆電話が撤去されている為、いざ災害の時には公衆電話がないとう状態になります。

●今後に備えて

家の家具の転倒防止でタンスに突っ張りでもしておけばよかったとう思いました。大きな物は特に怖かったです。倒れるものは倒れないような対策をしておく事が重要だとう思います。我が家でも現在は大きい戸棚は止めています。

ドアの前後には物をあまり置かないようにしなければ、逃げようにもドアが開かなくて出られない状態になります。今になって思うのは、懐中電灯はもちろんのこと、のこぎりは手元に置いておかなければいけないとう思います。家が潰れて、木と木の間に入った時に脱出しようとう思ったらのこぎりがなければいけないからです。

体験談16

米子市、男性、50歳代

家族構成：本人・妻・子供の3人

住居：木造2階建家屋／全壊

家は全壊、 ビニールシートが4枚で5万円の悪質業者に怒り

●跳ねた様子のピアノ・・・

仕事場で食事を終えると、グラグラと揺れ、最初は普通の地震だと思っていました。しかし、次第に揺れが上下にひどく大きくなり、「こりゃ半端な地震じゃない」と直感しました。実際に通常の地震よりも長かったのですが、体感的にも大変長く揺れたように感じました。

鳥取県には大地震は来ないものという思いがあったので、まさか鳥取県の西部で起きているとは思いませんでした。だから「県外なら相当に大きな地震だな」と思っていました。すぐにテレビのニュースで鳥取県の地震と分かり、家が心配になり急いで帰ろうとしましたが、近くを見ると、あまり被害がなかったようなので自宅も大丈夫だろうと思い、すぐには帰りませんでした。そのうち妻から電話があり、自宅がひどい状態だと聞かされて急いで帰りました。

家に帰ると入り口は、いつもときほど変わらず、意外に大したことはないなという感じでした。しかし、家の中に入ってみると、鏡・冷蔵庫はもちろん、あの重いピアノでさえ、いったん持ち上がったらしく、大きなものが左右に大きく動いていました。緑側のガラスにいたっては、留守の際に鍵を掛けていたのに、鍵がかかったままの状態ですべて外れて庭のほうに引っくり返り、割れていました。

●我が家の全壊の程度

家は床下に潜ってみると土台が離れ、基礎もひびが入り、家も傾いていました。どのように修理をすればいいか悩んで、震災2日後にとり合えず応急処置にとビニールシートを買いに行きました。しかし、どこも売り切れで在庫がありませんでした。仕方がないので、神戸から来た業者から高額（青いシート4枚を5万円）で買いました。後で「ビニールシートが必要なら言って下さい」と自治会から連絡があり、市から無料配布がありました。こういう弱いところにつけ込んで、あちこちに悪質業者が来ていたと近所からも話を聞きました。市や行政からも悪質業者に関する連絡がありましたが、情報・対応が大変遅かったように思います。幸い、雨が降らなかったことで、この程度の被害で済んでいます。もし雨でも降っていたら・・・。もっと市や行政の対応を早くして欲しいと思います。

我が家は全壊と審査されましたが、今までの認識として全壊と言えば家がペシャンコになり、絶対に住めないというイメージがあり、一部損壊、半壊程度かと思い、申請の為に妻を市役所に行かせました。すると、市の検査ですぐに半壊の申請が出ました。その後、11月初旬に業者に見てもらおうと、「主要鋼材が壊れているから全壊で再申請をした方がいい」という指導を受けました。そして、改めて市の検査をしてもらい全壊の申請を買いしました。

今回の地震は、天災だから何も補償が出ないと思っていました。しかし、片山知事のお陰で補助金が出ました。いくらお金がなくても、どこかから借りても修繕はしなければいけなかったので大変助かりました。

●住宅再建の矛盾

家を建て替える場合、半壊・全壊にかかわらず300万円の補助が出ます。しかし、補修する場合は150万円の補償になります。

私もある程度若ければ、家を建て替えたいと思います。しかし、そうなれば負担がかなりかかります。まして、今のローンを残していたら、ダブルローンになってしまいます。ですから、家は少々事なら我慢できるのであまり手を掛けないで、基礎の方を重点的に頑丈にしてもらいました。また地震が来ても、基礎をある程度頑丈にしていれば被害が少なくて済むのです。

県や市町村の住宅支援の対応は大変助かりありがたいと思っています。今回の支援策が前例となる以上、問題点を検討していただきたいと思いません。

●自治会役員も被災者

今、実際に地震を体験してみて感じたことは、自治会役員も被災者なのです。他の家などに構っている余裕がないのです。

自治会で消防訓練をしても、通常残っているのは女性・子供・年寄りです。自治会単位で話をし一般的な机上論でなく、実務的なものをしていかなければいけません。

●今回の教訓

今回の地震で教訓になった事と言えば、ガスの元栓を閉める事を気に掛けて行うようになりました。横になって腕枕をしてテレビを見ると、余計に震動を感じて「また大きな地震が来ないか」という恐怖心や不安がつのります。余震があればガ

スの元栓をすぐに閉めてビクビクしています。

実際に震災が起きれば誰も助けてくれません。常に部屋の上の方に物を置かないという事をきちんとやっておかないといけません。我が家も震災後は2階になるべく重たい物は置かないようにしました。2階が重たくなれば、家は柱でもっているんで余計に揺れがひどくなるのです。この事は、絶えずみなさんも心に留めておいて欲しいと思います。

●地震の記憶を記録に残そう

今までは、鳥取県と言えば、噴火もない、海からの津波もない、台風も直撃はめったにない、地震もないからいい所だと思っていました。しかし、日本列島はどこに地震が起きてもおかしくないと言うことが、実際に体験して初めて分かりました。体験するまでは、あくまでも他人事にしか思っていませんでした。神戸の時も大変だと思いましたが、鳥取県に来なくて、米子で生まれ育ってよかったと言う感じでした。しかし、今回のことから、本当にいつどこで起きてもおかしくないということを痛感しました。

震災は体験した者でなければ分からないので、写真や資料を残して、絶えず地震に対する意識を持たせるような活動もしなければいけないと思います。

しかし、災害はまた鳥取県にも来るかもしれません。ですから、体験を通じて気持ち的に自分の中、いろんな人の記憶・記録の中に留めておいて欲しいのです。

第2節 防災関係者の地震体験談

体験談 1

陸上自衛隊第八普通科連隊 勤務 男性

●初動

私は午前中、鳥取市の千代川の河川敷で中国管区警察局の地震を想定した人命救助訓練に出席しておりました。その後、車で米子に帰ってみると部隊で騒いでおり、初動派遣部隊はすぐ出動できるように車の準備をしているという状況でした。そして、緊急時は思った以上に情報が不十分なので自分で確かめる必要がある為、偵察部隊を出し、県の主要な所に連絡幹部を出しました。

県の防災監から派遣要請の電話があり、最初に給水の要請が来たので偵察部隊を出しました。次に、ここにはヘリコプターは持っていませんから部隊にすぐ報告し、航空偵察を行い周囲の被害状況の把握・確認に努めました。夕方になり、境港より給水の要請が来た為、北富士の演習場に訓練に行っている部隊に連絡し、「鳥取に至急帰るように」と指示をしました。部隊は夜を徹して走り、1回豊岡で仮眠し、あくる日に到着したという状況です。

●従事した防災対策

給水は給水トレーラー6台で6トン2回位行いました。その後、今度は日野町で水が出ない、炊き出しをしないとイケないという話になり、炊き出しを行いました。

震災後、電話は通じたと思いますが防災無線等は大変混雑していました。市町村の中の被害状況を処置して整理するという機能はおよそありません。防災担当と関係者が一体となってひとつの頭でやっているかというところでもありません。ですから、我々が現場に行っても誰と調整すれば話分かるのか、誰に聞けば正しい情報が入るのか読めないという事が結構あります。

情報は、ただ伝えれば良いというわけではありません。情報は直ちに対策に活かすためのものです。システム化していないと、情報の断片資料がいくらあってもダメです。各市町村の被害状況等のデータをパソコンで収集してみましたが、我々に伝わるのは整理されていない生の情報がストレートに入ってくるだけでした。本当は生の情報を1回処理する機能が必要だと思います。そうでないと、誤った情報に惑わされ、大変な事になってしまいます。手を打ち過ぎて困る事はありません。対応できなかったという事が一番怖いのです。初動時には、正しい情報の入手が大切なのではないかと思います。

偵察時に被害の話は聞きますが、給水が必要なかどうかという事は、自衛隊ではつかめません。基本的には、水が必要だから自衛隊が出動するというものではありません。色々ある手段のうちの1つとして自衛隊も水を運んでくれという事です。ただこれまでの教訓から、私達はおおよそその行動パターンの予想はつきます。1番最優先は人命救助、それに並行して水や第1・2次的な応急生活支援というのがまず必要になるでしょう。実際の所、防災対策も、殆ど初動で読めますが、後は予想外の事があるかないかという話です。

教訓 伝えたいこと

- 地震の際には道路が寸断されて、現場なり目的地へ行くことができないということをもつて体験した。
- マニュアルも重要だが、マニュアルにとられない現場での適切な判断力。
- 地震発生における道路構造上の被災箇所（点検を特に行うべき所）の選定。
- やっぱり人間はすばらしい。ボランティアなどに行ける技術を身につけておきたい。
- 人間未経験な事柄に出会うと、正常な判断ができなくなる等、予備知識の必要性を強く感じました。
- 今後、地震が起きた時、どういう対応が必要なのか、それ

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

災害時は色々な話が乱れ飛びます。そういうのが堂々とまかり通り、どこに確認する事も出来ません。混乱時ですので、やむを得ないという事もあります。やはり組織化する必要があります。それぞれの機関で最大限の努力をしなければいけません。やはり、市町村が県と上手くコンタクトが取れるように日頃から行っておく必要があるのではないかと思います。

この度の災害時も報道関係者が駐車していた為に、救援活動に非常に邪魔になりました。結局、報道関係者に同じ事を何度も聞かれるので、その分の対応がロスタイムになります。気持ちは分かりますが、こちらの方の気持ちも分かって欲しいと思いました。町の災害対策本部の中に広報のセクションを設置し、一元化してコントロールすれば良かったのではないのでしょうか。

体験談 2

鳥取県立根雨高等学校 勤務 男性

● 初 動

教務室の机で校務中で、今までにない大きな地震だと感じ、このまま潰されるのかと一瞬思った。あわてないように心がけて様子を見た。とても揺れが長く続いたと感じた。窓際にある校舎全体を囲んだ工事用足場とフェンスが倒壊するのではと心配した。

地震がおさまるのを見て、他の職員の所在と安全を確認し合いながら2階から1階に下り玄関から外に避難した。事務職員と数名の居残り職員で遠足からゴールしている生徒約40名を放送で見回りでグラウンドへ避難・誘導する。事務室で電話の対応をするが、余震がくるたびに外へ飛び出す。校内電話の受話器がはずれて「ピーピー」鳴っており、各部屋を回って受話器をかけなおす。どの部屋も足の踏み場もない散乱状態。保護者、県教委等からひっきりなしに電話問い合わせや状況報告の要請あり。電話がつながりにくく公衆電話とファックスでなんとか対応する。

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

今回遠足で生徒は校内にはほとんどいなかったのが比較的落ち着いて行動できたと思うが、外の生徒の状況がつかめず心配した。また校内に生徒がいた場合の授業や調理実習、化学実験等様々な場面を想定したシミュレーションをしておくことが肝要と感じた。理科室の薬品類、薬品庫、標本等の地震対策が必要。避難経路の壁掛けや黒板やロッカーなど落下転倒による通路妨げになるものの対策が必要と感じた。

電話はつながりにくくなる。断水になりトイレが使えなくなる。道路やJRが至る所で不通となり生徒の下校ができなくなった。情報の把握が思うようにできず、テレビや防災無線で流れる地震情報が情報源であった。とにかく個々の状況把握に時間がかかった。生徒に持ち込み禁止にしていた携帯電話が家庭連絡に役立っていた。

今回地震発生の時間帯も昼間の交通量の少ない午後1時30分であったことが幸いしたと思う。大きなケガ人がなかったのは奇跡と言ってよい。夜間、冬季の雪、雨、火災などの条件が重なったらどうなるのかシミュレーションの必要を感じる。また生徒は、地面の激しい揺れ、建物の崩壊、山崩れ、自宅の被災など

その立場で真剣なシミュレーションと避難訓練、心の備えが必要だと思った。

- 災害対策活動の役割が決められているが、仕事の場所によっては果たせないことがあると改めて認識した。
- 一瞬茫然としてしまったことを反省し、とっさに対応し得る気構えを常に備えておきたい。

● ボランティアの活用・方法を常日頃から考えておく必要がある。

- 地震対応の良い教訓となりました。緊急時、マニュアルは必要だが全てはマニュアル通りにはいかない。あらゆる場合に対応できる能力を養うことが重要と思いました。

今までにない体験と情景を目の当たりにしたため相当なショックを受け、心のケアの必要な生徒がかなり出て不登校の原因にもなった。今回の地震体験を十分に生かしたハード面、ソフト面の対策、特に子供やお年寄り、病弱な人への心の地震対策の重要性を感じた。

体験談 3

鳥取県警察本部 勤務 男性

●初 動

鳥取市の千代川河川敷で開催された中国管区広域緊急援助隊等合同訓練が終了した直後で、訓練会場の後片付けを行っていたときに地震が発生した。防災対策を主管とする災害担当者として早急に災害警備本部の設置と各組織との連絡体制をとれる本部の設置にあたった。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

災害警備本部の設置、運営等に従事したが、被害調査を集計するに当たり、県や市町村との連絡体制が統一したものでなく、正確な被害集計に予想以上の手間と時間を要し、普段考えていた情報の収集が容易にできなかった。

この問題は、県では避難住民について避難勧告の世帯、住民数のみ集計されていたが、現実には自主避難している住民が相当数あったため避難実態を正確に把握できなかったことにある。これを解決するには、自治会等の防災組織と密接な連絡が取れるような体制の整備を行い、自主避難状況を把握できる避難対策を充実することが必要と考えられる。

体験談 4

鳥取県県民局 勤務 男性

●初 動

地震が発生した場合には、特に初動体制が重要だといわれる。今回の鳥取県西部地震の場合には、災害対策本部西部支部が直ちに設置され、応急対応にあたることができた。その要因としては、第1に地震発生が平日の勤務時間内であったこと、第2に災害図上訓練が7月に実施され、職員が迅速に対応できたこと、第3に当日米子コンベンションセンターで開催されていた介護保険サミットに県庁から参加していた職員の応援が得られたことなどがあげられる。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

ただし、地震発生が休日あるいは夜間であった場合や県庁から介護保険サミットに参加していた職員の応援がなかった場合には、迅速に災害対策本部西部支部が設置されたかどうか疑問である。緊急連絡網の

- 消防署などは、こういう時全職員が何日も泊り込むことになるので、こういうことを考え、庁舎などの施設、食糧の確保を考えて欲しい。
- 各自治体（自主防災組織含む）の災害対処、危機管理について抜本的に見直し再構築が必要と思う。
- 庁舎施設における防災マニュアルの再点検、充実化の必要

- 性を改めて認識した。（既存のマニュアルもあるが、より平易な担当外の者でも使用できるものに改める必要を痛感）
- 各住民に対して地区の避難場所の徹底と速やかな情報の伝達。地域防災計画の勉強不足。
- ここの防災機関の能力を最大限に発揮し、それらの結集により大規模災害に対応する為、災害情報の伝達網を今より

検証や災害用電話、FAX等の機器設置方法等の周知徹底が必要である。また、組織改正により新しく設置された県民局の防災計画上の位置づけ等を明確にしておくことも必要である。

災害対策本部西部支部で県及び市町村の災害対策本部との連絡及び被害情報等の収集業務にあたった。24時間体制をとる中で、職員が交代する場合には正確な情報の伝達・引継が必要である。関係資料・書類のファイリングや引継メモによる情報の共有化や県職員が市町村の災害対策本部に応援のため派遣されたことによる連絡先の一本化及び情報の一元化が図られたことも効果的であった。

災害発生の場合には、被害状況の把握は非常に重要である。しかし、県から縦割りで市町村に資料の提出が求められたため、市町村にはかなりの負担であったようである。可能であれば、窓口の一元化を図り、最前線で現場対応に追われる市町村の負担をもう少し軽減すべきである。

今回の地震を体験し、日頃、県単独ではなく、市町村や関係機関が一体となり訓練を実施することの重要性を痛感した。

体験談 5

鳥取県市町村振興課 勤務 男性

●初 動

部長の指示により、私が溝口町へ行ったのは10月11日。震災が発生して5日目で職員にかなり疲れが溜まっていて、地震後、職員は昼夜を問わず全然休んでいないのを知り、「とにかく休ませよう」ということで職員を夜は3分の1まで削りなさいと指示。それが最初にやった指導です。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

都市型地震とは違い、年寄りの方は壊れた家を直す資金力がないと言って家のそばに居たいのです。仮設住宅が非常に馴染まないのです。もう1つはビニールシートの件で、担当者が混乱の中で間違ってお金を徴収するという大変な事態が起きた。その混乱を解消するため夜2日間くらいかけて各課長が区長さんや地区の代表者に1軒1軒説明しました。もう1つは住宅復興の中で、最初の話では、石垣や墓石が対象ではありませんでしたが、知事が来町し「中山間地の家は、石垣の上に建っており、石垣が崩れていて、かなり大きな問題だ。住宅復興のためには石垣は入れるべきだ」ということで石垣も対象になったというようなことがあります。

余談になりますが、「住宅復興対策により、自分の家が元の場所に建てることできる」と、お年寄りの家に伝えに言った時、本当に涙を流しながら感謝されたことは、今でも忘れられません。

今回、非常に良かったのは、知事が自ら現地を把握し、すぐ判断していただいたことです。すばやい対応で的確な支援策が出来たのではないかと考えています。

震災時における心構え、対応の仕方は、まず丁寧な情報を出し、重複を絶対にさせないということです。溝口はCATVの普及率が9割くらいだったので有線や広報以外にCATVをフルに利用し、情報を何回も繰り返し流していましたから非常に役に立ちました。

それから、とにかく県等からの電話問い合わせが多すぎます。色々なセクションからかかってきて、そ

も確実なものとし、自主防災組織の充実強化を検討する必要がある。

- ライフラインの確保。特に地下埋設方式の水道管及びガス管等の配管要図の整備が必要。
- 水道管修理の前に必ず残塩測定すること。(湧き水が水道からの確認の為) マニュアルを具体的なものとする。

●常時の防災体制(見直し等も含んで)の維持。情報の迅速の必要性。

- 神戸地震に際し、社員2名、1週間ではあつたが同業者への応援として淡路島へ行かせ体験させていたこと。又、その自信らしきものが判断、実行に生きていたと思う。

れだけで職員がくたびれてしまいます。とにかく電話より、まず職員を2、3人派遣して、その職員が県と町の間立ち正確な情報を持って県と連絡する。ですから、今回の知事が取った県の職員をすばやく派遣して県の職員を通じて情報伝達、情報収集と調整ということさせたという方策により、対応の迅速化が図られたと思います。そして、災害時は曖昧な「検討します」とか「これを持ちかえります」という話をしないで「これは出来ません」「これはこれからします」[今、判断できませんが、何日以内に責任をもって連絡します]と的確にはっきり言わないといけないということと、情報は人の耳を伝わると必ず変わった情報になります。情報を徹底する意味でやはり繰り返し、繰り返しちゃんとした情報伝達を行うということです。

体験談6

根雨土木事務所 勤務 男性

●初動

工事の施工現場に向かう途中（国道482号、江府町）、公用車の中で地震に遭遇。①地震の規模・範囲、②家族の安否、③職場職員の安否、④施工現場の安否、⑤地元の方の安否、⑥これからどうなるのか、自分は何をすべきか等が瞬時に頭の中を巡りました。余震が続く中、職場へ状況を確認のため、携帯電話で連絡をするものの不通。途中、周囲の状況（道路のクラック・段差、落石、家屋の倒壊・屋根瓦のずれなど）により、「地震規模は、阪神・淡路大震災クラスの大規模なものでないか」と予想されました。興奮しながら、「管内の幹線道路は通行できるのか」「日野で孤立するのでは」などと考え、今後どのような体制をとり、自分に何ができるのか。自分一人で何ができるのかパッパッと頭を巡った。早く被災状況を知り、また自分の知り得た周辺の被災状況を職場へ連絡しないといけないと気だけが焦った。

●従事した防災対策

被災状況を知るため、自動車のAMラジオから情報を得た。実際に外の状況を確認したのはそれが最初であった。私が知りうる被災状況を職場へ連絡するため、近くの碎石採取現場事務所より有線電話を借り、状況確認・報告を行った。

私はその日はたまたま事務所長と一緒にその工事現場へ向かう途中であり、地震後は道路の落石・倒木を可能な限り撤去しつつ、対策本部を設置・統括するため先に所長は事務所へ帰所された。私は国道181号（江府町江尾地内、上記採石採取現場付近）で落石のため片側交互通行をするようドライバーへ促していた。その後、巨大な落石を近くの採石採取現場事務所の方に手伝っていただいて撤去、危険な状態ではあるが通行が可能となった。根雨土木事務所の維持管理作業車に乗り込み国道181号（溝口町宮原地内）の被災箇所へ向かい、交通規制の準備や被災状況写真撮影など復旧作業と被災状況報告のための作業を行った。

●従事した防災対策の評価・反省・感想

大切なポイントとして連絡体制の甘さが考えられる。防災無線がなく、（地震直後時点で）繋がらない携

- 学校では、火事や地震が起こったとき、無事避難させる訓練しか行ってこなかったことを反省した。
- 停電の為、校内放送が使えず、ハンドマイクで全校に指示した。ハンドマイクはすぐ取り出せる所に置くべきだ。
- 災害時に役に立つ技術等を自分が持っていないのが残念だった。
- 昼間の災害で、家に残っているのは高齢者がほとんど。地域での声掛けや協力が大切だと思った。
- 自衛隊が行なう災害派遣活動（内容）の見直し・再検討（災害の特性、地域性をふまえた支援内容とするべき）
- 災害の瞬間ではなく、その後をどう対処するかを念頭に置いたマニュアルが必要。災害時のルールを皆が共有する

携帯電話を頼りに状況確認・報告を考えた。また、初動の活動を通じて、自分の非力さを痛感した。再度職員一人一人が常に危機感を持ち、被災時に何をすべきか様々な状況を想定し、訓練・シミュレートし、可能な限り効率のよい対応復旧ができる体制づくりが必要である。

情報の伝達について、昼夜を問わず職員が交代制で集中管理していたが、情報の伝達がスムーズでなかった。組織としての意識を統一するための訓練やシミュレーションが必要と感じられた。

体験談 7

鳥取県企業局 勤務 男性

●地震発生時

机に向い勤務中の出来事で大きく建物全体が揺れ、停電。だんだん強く揺れだし、これはただことではないと感じた。花瓶が落ち、割れ、事務室内では大声が聞こえる。まともに歩けない、必死に机にしがみついた。大きな揺れがなおも続く。天井の隅を見つめると左右に30センチ位揺れている。建物も壊れそうだなと思った。

しばらく揺れのおさまりを待ったが、止まりそうもない。電話・携帯電話が全面不通となった。工業用水道配水管が危ない、国道431号が配水管の破裂により道路流失の可能性も高い。そして車の事故は、どうすればいいのか。復旧の用途は、考えることさえできない。建設工事の現場は、どうなのか。発電所はどうなっているのか。様々な思いが頭を駆け巡った。

●初動

1)職員の安全の確認、2)工業用水道施設点検、3)新幡郷発電所点検、4)日野川第一発電所点検

●従事した防災対策・評価・反省・感想

出動体制として、1)工業用水道一週間、休日等の出動体制の確立。2)通信体制一日頃から無線機の通信訓練。3)広報活動一広報活動の訓練。4)給水停止と現場状況一現場状況の早期確認。事故地点と給水停止バルブの位置把握訓練。5)道路遮断と現場確認一崖崩れ等被害続出のさなか危険な状態なのでヘリコプター等の利用検討など多くの反省点が得られた。

体験談 8

鳥取県立厚生病院 勤務 女性

●初動

強い揺れが起きた時、すぐに阪神・淡路大震災を思い出した。テレビのスイッチを入れて、どの地域でどの位の地震が発生したのか知ることと、被害の状況、特に被害者の数と状況を知りたいと思った。当院

ことが必要（命令系統・安否確認の段取り等）

●ライフラインの大切さです。電話も水道も止まって、僅かに電気が通じていた事が大変助かった。ライフラインの大切さが本当に身にしみました。

●現地災害対策本部の立ち上げ、被害状況の収集と把握、報告等、日常の訓練の重要性を痛感した。

●山間地域の場合、交通規制等は特に経済活動に影響ないが、市街地での被害が大きかった場合、問題はあと思う。(迂回路等)

の災害マニュアルによるとM5強以上の時には自主的に病院へ行く、また、困難な場合は近くの診療所、避難所等で看護活動を行うこととなっている。倉吉はM4だったので、そんなに大きくないと安心していましたが、状況は刻々と変化し被害の実態は広がるばかりだった。もっと被害状況に関心を持ってできるだけ多くの情報を集める努力をしなければならなかった。また、看護者としていつでも行動がとれる様に身体的にも精神的にも準備をしておく事と、防災マニュアル・行動マニュアルを熟読しておくことが大切であったと反省している。起きてからではなく、日頃より定期的に勉強会や研修会を行い、防災の意識を高めあったり、いざと言う時の為に救援態勢を整えておくことが大切だと感じた。

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

地震発生から4日目の10月9日救援活動に参加した。その日は強い余震と雨が続いていた。早朝7時に病院を出発し、米子保健所でミーティング後、班毎に分かれて出発。溝口町に到着すると地元の保健婦・関係者の方が訪問リストと地図を準備しておられた。それを頼りに自宅と避難所訪問に分かれて行動した。しかし、土地勘がないのと交通の寸断や大雨の為、移動に時間がかかり訪問活動が思うように進まなかった。訪問すると状況を詳しく話されたり「心配で眠れない」「着衣のまま寝ている」など不安や疲労で戸惑いの表情が伺えた。聞いてあげることで少しでも心のケアができたと思う。看護者として自分にできることは何かを考えて行動すること、いたわりの心と皆様の役に立てればいいという思いで行動した。当院では地震発生後、防災マニュアルの見直しや発生を想定して勉強会を開いたり、研修会に参加して防災の意識が高まってきたと感じる。

体験談 9

米子市役所 勤務 女性

● 初 動

地震発生時は、総務部長室で研修の打ち合わせ中であり、経験したことの無い揺れに思わず机にしがみついた。事務室に急いで帰ってみると、職員は机の下に潜り込み、書類はロッカーの中から飛び出し、足の踏み場の無い状況であったが、幸いロッカー等が倒れたり、ケガをした職員もなく、3階の窓から外を見ると、火災が発生している状況はなく、外見上は倒壊家屋も見当たらず安心した。

災害情報が飛び交う中で、早速、対策本部が設置されたため、業務車両の使用状況を確認のうえ、新規採用職員の職場復帰のための輸送方法を決定し、職場復帰させた。だれも経験したことの無い地震関連業務に従事したことは、新規採用職員にとって研修以上の貴重な体験であったと思う。その後、防災マニュアルに従って、輸送班の業務に従事した。現実には、輸送班業務の概要は分かっているが、実際にはどの様に行動したらよいか十分に分からず、イライラしながら災害情報を聞いていたように思う。

防災担当課は電話もバンク状態で、職員も手一杯の状況であったが、業務分担をすればとお互い思いながら、指示する方もされる方も、どの様に行動すれば良いか分からず、訓練だけでは対応できないことがしみじみと感じられた。

- 今回は人命等は大事に至らなかったが、やはり観光分野、特に集客拠点の施設では一番に客。そして、その避難誘導等が大切であり、いかにパニック状態を回避するかが大切であるかが分かった。
- 避難所の対応は早い方が良い。(不安で眠れない人が思ったより出てくる)

- 地震予知は難しいため、発生した時の事を考えて、備蓄等準備しておく必要がある。
- 知事のリーダーシップで迅速な対応がとれたこと(間近で見たこと)は勉強になった。
- 学校施設において、飲料水への対策ができていなかった。
- 地震などの自然災害は突然に起こるので日頃から防災の備

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

当初は、輸送班の業務で避難場所の毛布や弁当配りに従事した。余震があるたびに避難者が増え、毛布や弁当の配布に追われた。倒壊家屋等は少なかったため、常時避難場所に滞在するのではなく、昼間は自宅に帰り、夜間一人暮らしの方や高齢者の方が不安に思って避難される状況で、人数の把握に苦慮した。

住宅が被害にあった市民の方から、借入のために罹災証明が必要である旨の問い合わせが寄せられたため、震災4日目からは罹災証明業務に従事した。用紙も発行した経験がないため、全壊、半壊の基準も曖昧な状況で、最初は、阪神・淡路大震災の時に使用した用紙を基にワープロで作成し、カーボン紙を挟んで発行した。2、3日は50人程度の発行であったが、1週間目からは250人程度に増え、従事職員も15人を超える人数で対応した。

発行を依頼される市民の方も、取り敢えず罹災証明を発行してもらわなければと言う思いが強く、「なんで必要なの？」と逆に聞かれる状況で、聞かれる方も的確な返事ができずに手探り状況であった。一部損壊で認定された方も、隣近所が半壊または全壊の認定がされると、1日に40~50件の変更申請が相次いだ。特に、全、半壊の住宅には災害復興補助金の支給が決定されると、農家の方は住宅以外にも蔵、農業用倉庫、離れ等独立した小さな建物も多く、補助金の対象にならない物件の証明を一件づつ請求されたり、住宅の証明書を発行された後に、蔵等の付属建物の請求をされ、二度手間になったりで混乱することも多かった。

体験談10

西伯町役場町民課 勤務 女性

● 初 動

役場で接客中に震災に遭遇した。当日は町主催の会議があったため職員も少なく、人が足りないということで大きな焦りを感じた。まず、窓口のお客様を避難誘導したのが最初の仕事で、次に情報の収集をしたが、ケガの情報、家から出られなくなったなどのいろいろな被害情報が電話でかかってきた。その被害状況を大きな紙に書き、壁に貼るようにした。その他の被災状況を把握するために世帯名簿により、所在の確認、避難所に避難してこられた人の把握と集計を行った。

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

被災情報の把握をただけだが、いざ考えると何をすればよいのか迷いつつ、かかってくる電話に対応し、道路の被害状況や避難所の収容状況の把握に専念した。こうしておけばいいというものはないが、時と場合によっては役に立つものと立たないものがあると思う。確かに、このような被害時には「何と何をやる」というものがあればよいと思う。しかし、自分として何が一番重要なのかと言うと役場の職員が、このような緊急時においてどのような対応が必要なのか試されているような状況とも感じる。その時だけ乗り越えれば良いという問題ではなく、被災の終結までには長い日数を要するため場当たり的に処理するのではなく、大極的に対応し、長期戦となることを覚悟して取り掛からないと職員自体の身体が持たないという気持ちになった。みんなが被災しているという同じ条件なので、被災者の焦りにあまり同調して、自分も焦ってしまうとパニック状態になるので、しっかりとした「気持ち」が大切だということを痛切に感じた。

えをしておくことの重要性を感じた。危機管理マニュアルや対処の仕方などを議論をしたり、発生を想定して勉強会を行ったり、研修会に参加して防災の意識を高めておくことが大切だと感じた。

● 日頃から訓練等を通じて、災害時の行動を各自が考えておかなければいけない。

● 情報収集方法の確立が急務。

● 自治会等の住民組織が一番身近で頼りになるようであった。

● 震災に強い住宅について建築確認申請時に県での指導が必要。

● 人と人との関わり、人は人としてなければ生きていけない。人の暖かさ、人は人でないと救えない。

体験談11

溝口町役場総務課 勤務 男性

●初動

執務中に地震を受けた。担当が消防防災なので地震計により震度の確認をした。その後、役場の柱に亀裂が入っている状況なので、役場から避難することを指示。電話による問い合わせがあると思われたので、電話の対応要員を残し、町の防災計画と消防の防災無線を持って、安全であろうと思われる駐車場に対策本部を設置した。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

防災計画として、職員は何を最初にするのか決めていたのであるが、常時、災害を意識して勤務していたわけではなかったので、一時的に「自分は何をすればよいのか」ということへの戸惑いも見られた。しかし、当町は、職員用として行動マニュアルを作成していたので、ある程度迅速に対応できたと思う。地震発生後30分後には情報収集として町内に職員を派遣することができた。ただ、情報が入ってこない、何も対応できないということがあり、職員の目で状況を確認する必要性が大切であることから、公共施設の避難所、学校、保育所などの点検に力を入れた。

また、今回の対応の早さには、平成9年に震度5の地震があり、そのときの役場職員の対応が悪かったことの反省に基づき、翌年から災害対策に職員一同となって図上訓練などを行ったことが要因となっていると思う。絶えず、災害の危機管理について、各課、各部で訓練していたことが活かされたと感じている。

体験談12

西日本旅客鉄道株式会社 勤務 男性

●初動

職場で地震に遭遇した為、まず米子市内の自宅の心配と家族の事が気になり、携帯で電話するも通じないため不安を抱きながら会社の業務に従事しました。

連絡がとれないままに、対策本部が設置され、支社内全箇所のお客様の状況、列車の位置、異常の有無、被害箇所等の把握に努めました。状況が入りづらく、正確な被害状況等がなかなかつかめまいまま一夜が過ぎ家族の事も全く分かりませんでした。

まず、列車を停める事が安全第一であり、全区間の列車を止めました。震度が3以下の箇所もあったものの列車の安全を考えれば地震の強弱に関わらず停めた事は、良い判断だと思います。ただ情報収集に対する機関の弱さ、いわゆる電話等が全て通じない事に対しては何か他にないものかと考えます。今後も非常事態に対しては慌てず、焦らず適確に物事を捉え対処していく事とします。一言で言うと恐怖の一瞬でした。

- 現地に行って話を聞き、状況を確認することが第一であり、何が一番必要かを判断し、対応できる職員と体制を作ることが必要。そのためには、職員の意識改革を図ることが急務である。
- 地域コミュニティと行政と民間相互の協力体制を整えていく必要がある。

- 指導者が必要。
 - 職員全員の防災意識の持続。
 - 施設の耐震性の向上。
- 如何に形骸化でない実態に即した防災訓練が有効であったか、平時に於ける防災意識の高揚が大切であることを再確認した。普段できないことは異常時にもできない。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

担当していた業務の関係で対策本部に詰めて全体の状況把握に努めていた為、具体的な活動はできませんでした。被害関係全体のこと、列車、お客様、被害箇所の詳しい状況把握に努めました。

今回の様な大地震は初めての経験であり、全てに戸惑いがあり何から手をつけてよいのか分かりませんでした。一番が情報の問題で連絡が取れない不安は大変なものでした。又、余震が1,300回位あり、その都度列車の抑止。被災箇所の安全確認を行うにあたり、時間が大幅にかかり列車遅延がほとんど毎日あり、お客様に多大な迷惑をお掛けしました。全力を尽くして正常ダイヤに全社員一丸となって取り組みました。

気象台からの状況提供と協力があり、今回の地震に関しては情報が直ちに入り助かりましたが、道路情報等が正確に入らず四苦八苦致しました。今後も安全正確な輸送を提供する為にも、全社員一丸となって努力します。

体験談13

中国電力株式会社倉吉電力所 勤務 男性

●初 動

電力設備の維持を担当している者として、「設備被害の程度がどのようなものか確認しなくては」という思いで情報を集めました。発電所、変電所で停電している箇所はないか、事業所に設置している給電情報伝送装置で確認したところ、旭発電所、黒坂発電所、吉谷変電所の1バンクが停電し、お客様へ電気を供給していない事が分かりました。直ちに、復旧体制を敷く必要があると感じ電力所本部への情報連絡と関係協力会社への応援要請を行い、自所の担当者をそれぞれ停電している発変電所へ出勤させました。その後、日野変電所で変圧器の1台がブッシングが破損し漏油しているという情報が入って来ました。漏油溜りに溜まっていた漏油処理を専門の請負業者へ依頼しました。山陰地方の業者さんでは対応しきれず広島 of 業者さんへも依頼しました。発動については、日頃復旧訓練を実施しており、その経験が活かされ割合上手くいったと感じています。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

停電している箇所の故障表示が、設備では主となる変圧器であった為、現地確認をしてから送電しようと考えていたが、予定した時刻になっても到着の連絡がなく（実際は至る所で通行止めに遭っていた）停電が長引く為、危険を承知で遠方制御で送電することを要請しました。その後、現地へ到着した担当者から具体的な被害状況を聞き、復旧に入って行きました。復旧資材の調達には電力所本部の支援班が窓口となって調達してくれました。また、復旧についても電力所本部の復旧班と協調を取りながら（倉吉、鳥取地区からの応援等）復旧して行きました。中国電力では、H3年の台風19号による塩害（瀬戸内地方に大被害をもたらした）、H7年の阪神・淡路大震災を教訓に非常時の訓練、広報等を含めた全社的な防災体制が確立されており、比較的スムーズに復旧できた。問題点としては、道路状況の早期の情報収集、外部との電話連絡の改善が挙げられる。

- 会社設備のうち、溶液や粉体を貯蔵する設備が地震に弱いということが分かった。
- 災害危険箇所の把握と道路が寸断された際の迂回路の確認、市街地で被害が拡大した場合を想定しての防災訓練等が今後も必要であると痛感した。
- 日頃からの防災訓練・防災意識の高揚を図ること。地域や

- 職場での共通理解を常日頃から高めておくこと。迅速で正確な情報を提供すること。ボランティアの組織化・ネットワーク化。
- 災害の対応には、まず情報の混乱が考えられるので、各機関が情報を共有することが必要と考える。
- 県及び市町村主導の訓練の重要性。

体験談14

米子瓦斯株式会社 勤務 男性

●初動

地震発生時には、先ず、お客様の安全確保が最優先です。「ガスの供給を継続するか否か」を考えました。初動は被害状況の早期把握です。地震発生直後に、在勤社員の非常招集と外勤社員の会社業務用無線による帰社（途中の被害状況把握）を指示し、対策本部を確立しました。ガス製造所の異常確認や当社設置の地震計の記録ならびにガス送出記録による被害の推定を行う一方、電話等の受付体制を確保し、直ちに供給エリア内の被害調査班を編成・出勤し、被害状況の情報収集にあたりました。広報は報道機関・市役所等を通じ「ガス使用の注意」についての広報を依頼し、タイムリーな報道をお願いしました。さらに監督官庁ならびに日本ガス協会への連絡体制を確保（緊急時優先電話）し、初動については、電話の一時不通があったものの初期の対応は順調に行えたと思います。連絡手段として、業務用無線の有効性をあらためて痛感しました。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

災害対策本部の下に被害箇所状況分析を行い、復旧計画を立て監督官庁ならびに日本ガス協会と緊密な連絡をとりつつ、緊急対応に万全を期して復旧活動にあたりました。特にマイコンガスメーターの復帰にあたりましては、お客様への電話対応ならびに広報により復帰の大半が処置できました。ガス漏洩につきましては、ガス供給エリアの全域調査を行い8日の未明には安全の確認を完了しました。お客様の設備点検を行い安全なガス使用にも配慮しました。そして10月10日災害救助法の適用に伴い、災害特別措置の申請、即日認可を受け翌日には災害特別措置を実施しました。今回の震災にあたり、応援者を含め延べ824人（10月15日災害対策本部解散）を動員し処理にあたりましたが、阪神・淡路大震災の教訓が大いに活かされたと思っています。今後も実態に即した訓練の継続の大切さを痛感しています。反省点として、緊急調達物資及び調達先のリストアップがあげられます。

体験談15

日本海テレビジョン放送株式会社米子支社 勤務 男性

●初動

地震発生時、車で皆生通りを西に向かって進行中、ハンドルをとられ蛇行運転となる。「タイヤパンクかなあ〜」と思い道路左側へ車を寄せ前方を見ると電柱や電線が大きく揺れていた。米子支社へ帰り、地震だと再確認。報道機関なので非常時の体制等はマニュアル化してあるのですが、頭の中には全く浮かばず、極く自然にやれる事とやらなければならない事をこなして行ったと思います。まず支社員の所在と招集。かなりの揺れだったと思い映像を入手する事。支社の建物の損傷箇所。この3点を行った時点で本社より具体的な震源地、どの方面の被害が大きいか等の情報があり大枠をつかむ事ができた。これ以降が大変で

- 今回の地震で初めて存在が明らかとなった活断層があるなど、地震に関する基本的情報が極めて貧弱なことが分かった。もっと、こうした研究に注力すべき。
- ボランティアの方の存在のありがたみが良く分かり、私も今後ボランティア活動したいと思います。
- 行政、消防等の公的機関の限られた人的体制で、十分な対

応をする事は無理があると思う。住民が自分たちの地域に責任を持ち、相互扶助と自主・自立の精神を再確する必要があるのではないかと。

- このような震災でも早急に対策本部が設置され、速やかに行動ができた。また、昼一時頃のことなので夜間等であれば、対応も遅れてくると思われる。

マニュアル化してある非常体制は吹っ飛び夕方近くには、日本テレビ系列各社の取材応援も到着。今後の連絡網、体制等について冷静に話し合えたのは夜10時以降であった。今後の教訓としてはマニュアルの見直しは勿論であるがこれに基づくシミュレーションをくり返し実施する事。

体験談16

社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会 勤務 男性

●初動

震災直後は、米子市内にいたため情報も入らず、携帯電話も使用不能、JRも不通の状態であったが、幸い同じ方面の車に便乗して帰ることができた。そして、震災当日には、県社協対策本部を設置し、西部地区の市町村社協に被害状況、独居老人等の福祉対象者への対応、ボランティアの必要性について電話照会。その後、米子市に災害ボランティアセンター現場本部の設置、被害の大きい日野町、西伯町に災害ボランティアセンターを設置し、県社協職員10名を派遣するとともにコーディネート支援を開始した。

●従事した防災対策・評価・反省・感想

地震後の10日間は、派遣要請とボランティア活動者がともに多く、「活動内容もガレキ撤去」「家屋の応急修繕」「土嚢作り」「ブルーシート張り」など単純に人数と力を要するものが大半であった。また、水道に被害を受けた住民を入浴サービスのために移送なども行った。しかし、罹災者でボランティアによる支援を必要とする大多数が高齢者であり、他人に援助を受けることに拒否的な感情を持つ方が多く、自発的に要請されないためボランティアは多数いても活動する場面が限定されていた。市町村レベルでもボランティアによる援助活動についての理解がなく、援助の対象・範囲を独居老人等に限定して捉えていた人が多かった。市町村行政として、災害ボランティアセンターの窓口となり、責任ある対応ができる担当者を決めておくことも必要と考えられる。

体験談17

西伯町商工会 勤務 男性

●初動

被害状況確認に管内を巡回したが、被害が大きく件数、金額とも把握困難であった。震災等の被害に伴う損害税務対策と復興資金の相談を受付ける体制づくりに着手し、税理士による雑損控除の集団指導手配。復旧支援のために写真と被害の記録を呼びかける案内をFAXと共に全避難所に配布。

以降、連日深夜まで連絡と案内で避難所回り等の対処を行った。また、「災害対策本部」を開設し、復旧相談として、運転資金、生産設備復旧資金・高齢者の住宅復旧資金借入方法、悪質業者の対策、保健申請の罹災証明、災害損害の税務等の相談を行った。

- 県の防災危機管理体制は直ちに立ち上げられたが、当支局の体制の立ち上げが少し遅れた。県の防災危機管理室で把握している情報がインターネットで入手できるシステムを構築できないか。
- 各町村は、県の防災計画と一貫性をもって細部事象まで想定した実行性、具体性のある防災計画を策定する必要がある

と感じられる。

- 災害はいつ起こるか分からないので、備蓄物資の充実と体制作りが必要だと痛切に感じた。
- 災害対策本部の輸送班としては、まず車両の確保が前提となることを再認識した。

● 従事した防災対策・評価・反省・感想

損害記録と税部対策資料の作成と配布、災害による雑損控除申告手続きの集団指導を手配、税務相談案内配布。企業・避難所巡回など災害対策支援の金融関係、被災確認受付対策などを実施。

「人命は3日以内」といわれるが、事業被害の関係も初動の1～2週間に集中的に人員を投入できなければ被害の記録、相談受付、被害金額や件数の把握と対処処理体制の構築を同時に進行することは困難である。情報収集・報告体制は町村経由に一本化が望ましい。復旧支援も町村が中心となる為、当初からの情報の蓄積が、復旧対策への活用が期待できる。

- 総合的な指揮本部の必要性を感じた。現場は自分の目で見ながら行動すること。
- 日頃からの行政、社協、ボランティア、地域住民、防災関係機関との結びつきが重要だと思う。やはり連携こそが災害時への対応に大きく影響してくると思う。
- 通信回線、生協では事業所間を社内ラン（ノートメール）

- 専用回線で運用電話が通じなくても、社内ランが活用できたため情報がうまくつながった。また、車に無線を積んでおり、各配送車から出先の情報が入手できた。
- 今回の地震により、職場の「災害対応マニュアル」をより対応しやすいものへの見直しを図ることができた。

第4章

調査結果からみる災害対策の課題

第4章 調査結果からみる災害対策の課題

第1節 県民及び防災関係者が感じた災害対策の不十分な点

今回の地震において、県・市町村及び防災関係機関より被災者に対して各種災害対策が講じられたが、その災害対策に対して県民が感じた不満内容及び防災関係者が感じた不十分な内容を自由に記入してもらった。その内容を下表のとおり項目別に分類した。

| (食糧の供給) | |
|--|--|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 食べることに困った。3日目にやっと役場から弁当をもらった。 ● 供給の仕方が不公平のように思われた。 ● せっかくの弁当を1回、たまたま自治会長宅へ行ったことで受け取ることができたが、必要な全壊家庭などへは行き渡らなかったと思う。 ● 避難所での弁当は3食毎日同じような物で変化がなかった。 ● もっと早く弁当の供給をして欲しかった。余震が怖くて火を使えなかった。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 阪神大震災の教訓、例えば、冷えた弁当を何食も支給するより、内容は乏しくても温かい食事を提供することが重要と思われる。阪神間の市では町内会に炊飯装置を持たせている。 ● 初動で避難者の数を把握できなかった為、食糧確保が難しいと思われた。 ● 弁当の支給は大変助かったが、避難所では、特に朝食のぬくもりが欲しい。 ● 災害発生直後に現場で活動する人員に対して、弁当供給を考慮すべき。 ● 市町村によっては食糧の備蓄が不十分だったところもあった。 ● 地震発生当日、被災地付近の店舗で食料、飲料水の入手が困難であった。 ● 食料の確保が初期には非常に困難である。 |

| (ビニールシートの配布) | |
|---|--|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● ビニールシートの配布は大変役立ったが、大きさの規格が大型ばかりであったこと。もう少し細長い物の方が利用度が高い。また、その情報が各家庭に十分に伝わらず、不満が当初あった。 ● 屋根瓦が落下し、ビニールシートの配布を受けましたが、もっと早くに支給して欲しかったです。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 配布された所とされない所があった。行うなら全てに行う。行わないのであれば、全てに行わないようにすべき。 ● 必要数が絶対的に供給を超えていたため、不公平感があった。 ● 山陰地方は雨が多いため、雨対策が必要。 ● ビニールシートの配布はされたが、配布手続き等の広報不足。 |

| | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ●ビニールシートは屋根の被害の状況に応じて支給する。各家1枚ではなく、程度に応じた配布が欲しい。 ●ビニールシートが各戸に1枚のみ配布されたようだが、足りない分(2~3枚)を米子や境港まで買いに行かなければならなかったようだし、高価であった。必要枚数配布して欲しかった。 ●要望のあった家に3枚支給すると放送でありました。被害状況の大小を考えての配布だったのでしょうか、広範囲にわたる状況をいち早く把握することはなかなか難しいことと思うが、直接的に行動し、横断的に対応する。これが行政に課せられた義務ではないでしょうか。 ●ビニールシートを役場まで取りに行かないといけなかった。できれば、配って欲しかった。 ●ビニールシートの配布について、私は7日に早速米子の店にTELして5枚予約で購入し、家族とシート張りをしました。翌日、町より1枚5,000円で配布との通知がありましたが、購入しませんでした。後日、これが無償だと分かり、5,000円の返却があった様です。このことが第一の不満です。 ●配布が地震発生直後でなく、1週間以上も遅く配られた。屋根の雨漏りを防ぐため自前で速やかに購入し、親族や近所の者の手伝いを借り2・3日後にシートを被せた。 ●町ではビニールシートの配布はなく、役場にて5,000円で販売という案内だったので他の店で購入したが、後で役場で買った人については返金があったとのこと。他で買った人には何の支援もなかった。 | <ul style="list-style-type: none"> ●ビニールシートの配布に伴うシートかけ作業への対応が不十分であった。 ●ビニールシートの備蓄数が足りなかった。配布までに時間がかかった。 ●ビニールシートの配布について情報不足なため、高額にて購入している人があった。 ●当初1軒あたり何枚と決めて支給されたが、それでは当然足りるわけもなく、その後、役場に充当されたシートで必要な枚数をもらえた被災者の方もいらっしゃったが、それを知らない方々が多くいたように思う。 ●ビニールシートの配布自体は良かったが、市町村が配布すれば住民側ではシートをかけてくれるものだと思う気持ちが強く「シートを配っただけでどうするのか」という問合せが多かった。 |
|--|---|

| (給 水) | |
|--|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ●水道の連絡体制、復旧体制等が良くなかった(3日間断水)。 ●簡易水道の配管が破損し断水となり、10月7日より給水を行って頂いたが、完全復旧まで1週間ほどかかり、入浴、洗濯が十分に出来なかったこと。 ●水道水が濁っていたのに、給水がなかった。飲み水は購入した。 | <ul style="list-style-type: none"> ●公営住宅が断水となり、米子市水道局は竹内団地の漏水復旧に手を取られ集合住宅等まで手が回らず、かなりの時間が経過して給水タンク車が来た。 ●給水車の確保が大変だった。 ●断水状態が長く、対応が遅い。 |

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 水源が濁り水道水が使用できず、自衛隊の応援により他の水源から運んだ。平素からの研究と他市町村との連携により非常時に備えるべきである。 ● 自宅から給水場所が遠かったこと。乗用車しかなくて、たくさん積み重なった。 ● 水道水に濁りがあったが、情報・通知がなかった。 ● 給水の情報(連絡)が遅れたこと。 |
|---|

| (ボランティアの派遣) | |
|--|--|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● ボランティア派遣の対応が遅い。家の中の生活が出来ない状態であるのに、1ヶ月も経ってから派遣事業が実施された。 ● 老人家庭のブロック塀が倒壊し、片付けにあたって破損ブロックの運搬整理はボランティアによってなされたが、鉄筋の切断等がボランティアではできず、被災者が直接業者を探して依頼しなければならない場面があり、被災者から不満がありました。 ● ボランティアの派遣が間に合わないので、屋根瓦の補修やビニールシートかけを全部自分でやった。 ● ボランティアの一部地域の片寄り。 ● 県外からのボランティアの派遣は遅れがちであり、その部落毎に組織を作らねば間に合いません。 ● 自治会で1名で住んでおられる方が多いため、その家庭には町役場よりボランティアの派遣があれば良かった。 ● 対応が遅い。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 学校では教材や薬品等にかなり被害が出たが、特に薬品等については生徒に後片付けをさせられないので、教職や一部ボランティアの方のご協力で何とか復興しました。地域の中で災害復興に関わるボランティアの支援体制が整備されていないため、地域の教職員の協力がなかった。 ● ボランティアの本来の意味を理解している人があまりにも少ない。受け入れる側の体制が整っていないと同時に、ボランティアとして来た人の中にも「泊まる所がない」「食事が無い」「自分の考えていた中身と違う」等、公然と不平不満をぶつける者も多く存在していた。 ● ボランティアの方が一部に集中していた。 ● 他都市からのボランティアの受皿を事前に検討。震災地域も含め周辺地域でのボランティア活動のあり方を検討すべき。 ● ボランティアができる任務・仕事の仕分けの立ち上げが遅い。震災後、ボランティアが来ることを予測し、宿泊・食事の手配を前もって業者等と契約しておくべき。 ● 受け入れる側の体制が不十分であり、効率的な活動を充分して頂けなかった。 ● 行政とボランティアセンターの意思の疎通が欠けていた。 ● 住民が必要とする救済の内容が危険なものが多かったため、ボランティアに頼める活動が限定された。 ● 市町村や地域の中でボランティアに対する需要や供給をコーディネートする機能が不十分だったように感じる。 |

| | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ● ボランティアセンターが“ふれあいの里”内に設置されたことから、本庁との連絡、特に必要とされる業務の種類及び人員等についての連絡に支障をきたしたのではないか。 ● 市町村によって災害ボランティアセンターの立ち上げ、ボランティアの受入に対してかなりの格差があったと思う。(行政と社協、ボランティアとの連携など) ● ボランティアの対応窓口が不明確であり、ボランティアに行っても当初、活動ができなかった。 |
|--|---|

| (メンタルケアの実施) | |
|--|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 恐怖心のため夜眠れず、昼間は独居老人の家の整理等で日々を過ごしたが、行政がその様な方を支援して欲しかった。 ● 家が全壊した人等と比べれば地震の被害は大したことなかったが、余震が何時までも続き、ゴーンと地鳴りがする毎に身体が硬くなり、2月初旬頃まで何も手につかなかった。被害の少ない者まで手が廻らないかもしれないが、何かアフターケアがあれば良かったと思う。 ● 町内の被災者の宅を見舞った時、特に独居老人の方や高齢者夫婦の家庭では、不安に思っておられる方が多かった。 ● 災害にあった家の心のケア、相談が必要と思った。 | <ul style="list-style-type: none"> ● ケアに回れる職員の数がテレビを見る限り少なかったと思う。 ● 避難所から帰ってからのメンタルケアの配慮が不十分だった。 ● 教員による生徒へのメンタルケアや専門家によるメンタルケアが不十分だったと思われる。 ● 余震が続くことのストレス等を周りの人に分かってもらえないという人がかなりいた。 ● メンタルケアは災害発生直後から被災者を考慮して実施すべき。 ● 避難生活を余儀なくされた高齢者の方々のストレスの把握と適切な対応に欠けていた点がテレビ報道の中から感じられた。 ● 被災者に対するメンタルケアのスタッフの数が絶対的に不足していた。 ● 相当長期間ケアする必要がある。 ● 精神的にまいっている人などの対応が出来ていなかったのでは... ● 特に、一人住まいの老人の方は心細く思われたことと思う。 |

| (義援金の受給) | |
|--|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 義援金は市役所に問い合せてもなかなか支給に來られなかった。 ● 第1回目の申請時に添付書類の一部を持って手続きをしたが、私の場合、屋根の損壊等があり、 | <ul style="list-style-type: none"> ● 義援金は死亡者がなかったこともあり、震度に比べ全体額が少なかった。 ● 義援金等の取り組みが不十分ではなかったか。(各町村等への協力要請もなかったと記憶して |

| | |
|--|--|
| <p>下からできるだけ被害状況が分かる写真を添付したが、屋根の上へ上がって具体的なアップ写真が必要と言われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 貸家を所有しているが、貸家が損壊しても支援制度がなく、持家の修理も出来ない。2件損壊したが、一円の義援金、修理の借入れも出来なかった。 ● 義援金で石垣は出るのにブロック壁は出なかった。ため柵の修理も出なかった(6ヶ所)。 ● 家の損壊など、ひどい被害の家も少しヒビが入っただけの家も同じ金額だった。 | <p>いる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 義援金についてはテレビ等で参加を求めているが、そのお金の流れがよく分からない。 |
|--|--|

| (応急危険度判定の実施) | |
|---|--|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 全壊、半壊の判定基準がわかりにくい。 ● 危険度判定をもっと速やかに行う必要性を感じた。 ● 応急危険度判定が少々いい加減のように見えました。被害を受けた方はとても神経質になっています。たくさん家を見廻る為、手抜きになるのは仕方ないと思いますが、もう少し丁寧な見方をして欲しいと思いました。 ● 危険度判定が自主申告であること。全ての住宅を判定すべきだと思う。 ● 判定の実施の時期を半年間位先まで延して欲しい。 ● 近隣の町では、県土木等が家の損傷状況を見て廻り、家の玄関等見やすい箇所に貼り付けてあったが、私の住居の付近は全然調査もなく、今後、安心して住めるのかと不安に思った。 ● 専門家でない調査員もおられ、判定にかなり不満を感じた。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 判定された後、どのように対応すればよいか迷った。 ● もう少し詳しい調査と被災者の納得のいく説明。 ● 学校などは応急危険度判定を迅速に綿密に行う必要がある。判定が学者により異なるのも気になる。 ● 今回の地震で初出勤したボランティアの応急危険度判定士の人数が不足し、住民から1日も早く判定に来て欲しいとの要望がかなりあった。 ● 危険と判断され、かえって住民を不安がらせるケースが目立ったように思う。 ● 判定の趣旨が住民に十分伝わっていない。判定の結果のとりまとめ(実施日、訪問先等)を県に問い合わせても、分からずじまいだった。 ● 応急危険度判定は早く行わないと危険である。 ● 応急危険度判定の期間及び人員ともに不足していた。 ● 全壊・半壊・一部損壊等に家屋被害を分類し、被害確認を行ったが、外観での判断では全・半壊、又、危険度の判定が難しく、住民の避難措置の実施においても早期の危険度判定が必要である。 ● 被災家屋の危険度について専門家の早めの診断が必要。 |

| (罹災証明書の発行) | |
|--|--|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 罹災証明書の発行で、同じ部落で余り被害がなくても半壊（何回も見てもらって）我家と同じ様でも全壊とその辺のところが調査に来られる人によって違い、納得がいきません。 ● 罹災証明書の発行に関し、自己申告は良いが、申告後に被害を再度受けても証明内容が変更できなかったこと。 ● 手続きに時間がかかり、面倒。 ● 外観のみの検分であった。 ● 罹災証明書について、全壊、半壊、一部破損の3通りしかないので、一部破損と認定されたものの中でかなりの被害があっても、地震保険では5%しか補償されなかった。 ● 罹災証明書の発行について、町職員等が全壊・半壊の判定が出来ないようです。 ● 罹災証明を取りに行ったら、「今はまだ必要ないから」と次回に回されたこと。窓口業務も忙しいのかもしれないが、きちんとした説明が必要。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 罹災証明の発行の方法（基準）が不明確であり、迅速な対応が出来にくかった。また、統一基準的なものが必要。 ● 罹災の証明を町職員が行うことは、知識的に不均衡が生ずるのではないかという恐れあり。 ● 速やかに発行できるよう事前に準備しておいた方が良い。 ● 発行基準、発行方法が不明確。 ● 罹災証明書の発行は見た目で損壊程度が判断され、実際に住めるかどうか、又は家屋の修理費の評価額に対する割合など、きめの細かい判定ができていない。上記に関連し、全・半壊家屋の建て替えなど、更に手厚い、細かいメニュー的な支援が必要ではないか。 ● 調査員によって、被害状況の結果が違っていた。 |

| (住宅再建支援制度) | |
|---|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 住宅再建は修理費の補助だとすれば、あまりにも規定が厳しく、申請してもどうせ通らないと思い、申請する事に躊躇するようになった。 ● 蔵の壁が落ちたので修理した。また家の中の壁も落下したが、市役所へ問い合わせても、それらの修理費は支給対象外であり、困った。 ● 住宅再建、補修業者の斡旋をして欲しい。 ● 被災住宅の住宅残存ローンの利息減免。被災住宅の復旧費用に応じた助成、補助制度の創設。 ● 良い制度ではありますが、平成14年10月5日までというのは、再建がいつになるか分からないものにとっては残念です。 ● 再建支援制度そのものは非常にありがたい制度であるが、手続きが大変です。被害住宅再建についても解体助成制度同様の取扱いにして欲しい。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 半壊、一部破損の判定の基準が曖昧で民間或いは共済組合の判定との差があり、住民に戸惑いがある。 ● 補助金額としては限られた財源の中でのことであり十分だと思われるが、運用については事業主体が市町村であるため申請期限、補助対象等にバラツキがあり、不公平感を持たれることがあった。 ● 個人の資産、住居の新旧等多くの問題があり、すぐに支援・助成制度の確立は難しいとは思いますが、一定の基準を設けるべき。 ● 支援制度についての詳しい内容を市民等に伝達する方法をもっと密にすべきであった。（メディア、自治会、学校等、あらゆる手段をもっと駆使すべきではなかっただろうか） |

| | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ●自分で直した石垣の修理費を出してもらえない。不満。 ●居宅の外壁の破損は支援の対象となったが、内壁の破損は対象外であった。倒壊家屋に対する300万円の支援は、他の支援に対して少なすぎる。(私は倒壊家屋当事者ではない) ●住宅建設助成等にあたり、一応支払ってから領収書を付けて申請しなければならないことは被災者にとって非常に不満です。建設計画に基づいて一定の計画が実行された事を確認すれば、助成金は交付されるようにすべきでしょう。 ●家屋が全壊であろうが、一部損壊であろうが、家を直すのは同じ事(一部損壊であっても壊れている場所によっては家を新築しなければならない)。その判定方法が不満。 | <ul style="list-style-type: none"> ●県全体で共通したマニュアルを作成すべきである。天災に対する災害対策は県下統一すべきである。 ●家屋倒壊にかかわる支援体制は理解できるが、石垣、塀、土蔵に関しては支援の対象にならない(解体は良い)という点で不十分。同じ生活環境内での被害であり、同じないし、同程度の補助体制はとってもらいたい(補修、再建の場合)。 |
|---|---|

| (生活再建支援制度) | |
|--|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ●年齢制限があり、受給できないと断られた。 ●手続きが面倒である。 ●生活再建支援制度が国にあるとの事ですが、どのような支援策なのか、今だに分らない。所得などの関係があるとは思いますが…。 ●生活再建支援制度について、非課税世帯や高齢者世帯を優先するのは分かりますが、同じ様に被害を被ったのだから平等にして欲しかった。非課税世帯の判定が分らない。事業をして人を使って給料を払っている人が非課税世帯で生活支援を受けていた。 ●制度を利用出来る資格や条件などが、かなり限定されていて大半の世帯が該当しなかった事。罹災世帯が多かった事や小さな自治体であった事などで十分な対応が出来ない状況ではあったと思うが、少し不満であった。 | <ul style="list-style-type: none"> ●年収によって支援、助成制度が受けられたり、受けられなかったりした。 ●生活再建にかかる制度は多くあるが、住民があまりよく知らない。また、市町村職員も思ったより知らないため、普段からの啓発が必要。 ●老人が多く、自分での対策が取りにくい。 ●大災害であったので、各種再建支援制度の金額は日常生活に戻るための最低金額を支援して頂ければと思う。 |

| (住宅解体助成制度) | |
|--|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ●住宅解体した際、倒壊した瓦・上壁等の搬出に不満を感じた。近くの公民館への搬出期間が1週間程度では大部分の家庭が出せない状況であり、半年間位の猶予を最初から出すべきである。 | <ul style="list-style-type: none"> ●思った以上にゴミ、被災して損壊した家屋等の処分が大変であり、「分別収集」が必要とされるため手間がかかる。 |

| | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ●住宅解体助成制度が3月いっぱいまで切になった。せめて1年くらい(10月頃まで)はして欲しい。家を再建するには、そうすぐには決心つかない問題がある。 ●住宅解体助成制度の方針がなかなか定まらず(市の説明がまちまち)、解体をして良いのか悪いのか、しばらく迷った。 ●住宅(トイレ)の解体を頼んでも、なかなか解体してもらえなかったこと。 ●住宅解体助成の期間設定についてはあまりにも短いのでは？ ●住宅解体期間が年度内と限られた。冬季の住宅等の工事がしにくい面で考慮して欲しかった。 ●罹災してもいない住宅や廃屋にまで解体助成制度を適用する事はないと思う。査定にあたり充分留意して欲しい。 ●解体申込切りが地震後26日以内なんて、一生の事業計画をすぐに決定出来るはずがない。 ●住宅解体助成制度＝申込期限が短期間のため熟慮する期間がなかった。 ●冬に向かい、新しい住宅がないのに損壊した家を解体できず、家族での話し合いが決まらないうちに解体申請が締め切られてしまった。もう少し猶予期間をもって欲しかった。 | <ul style="list-style-type: none"> ●制度を知らなくて自費で解体を行った場合は助成対象外となり、広報が徹底されていない。 ●住宅解体に関して、早く解体すべき所が後回しになって人が住んでいない部屋等が先になったり、金額的にはいくらあっても足りないのでは何とも言えない。 ●解体により生活文化財が多数失われてしまった。 |
|--|---|

| (その他) | |
|---|---|
| 県民意見 | 防災関係者意見 |
| <ul style="list-style-type: none"> ●夜中に必要以上の防災サイレンが鳴った事。防災アナウンスの言っている事が意味不明だった。 ●避難場所の周辺の状況をもう少し市が普段の折に調べてみて下さい。徒歩ばかりで避難するわけではないと思います。車でもあることから、駐車場のことや避難所周辺の道路が狭かったり、危険な建物があるかどうかなど。ペットを連れての避難場所。 ●自然災害のことなので少し我慢したいが、官民の連携組織網の整備。①早く状況把握。②現地調査、録音機、携帯電話(災害直通用として)。③対策のスピード他。調査隊と応急隊の連携。被災校区実状調査不十分。大きい被害も小さい被害も調査に不公平あり。 | <ul style="list-style-type: none"> ●避難実態をより正確に把握するためにも自治会等自主防災組織との連携を図る等して、自主避難状況も含めた避難実態の把握と避難対策が望ましいと思われる。 ●現場からの声が十分聞こえてこない。また、被災地をテレビ・ニュース程度でしか知らない人間が判断している面が多く、後手に回ってしまう。 ●個人住居への支援はあったが、企業への支援(特に施設)が十分でなかった。 ●工業用水の復旧情報が不正確であった。 ●国の査定が手間取り、仮設校舎の建設が遅れた。 |

- 業者に対する不満。非常事態の際には、業種別にチームワークを取って、もう少し敏速に修理等を希望します。
- 液状化に対する認識と対策の遅れ。
- 地震直後、学校等全て休校となったが、JRとバスがストップした為、高校生の帰る手立てがなかった。又、小学生の集団下校は危ない。
- 町道・県道・国道の応急工事の情報を町の防災無線にて知らせる回数を多くしないと、通行止め箇所が知らぬうちに通行可になったり、余震による通行止め箇所発生等の情報が少なくて困った。
- 防災無線が全戸に設置してあるにも関わらず、行政から何の情報提供もなく、余震に怯えながら避難場所の指示もなく、道路に車を停めて車の中で夜を過した。発生当初における町当局の対応に不満あり。
- 町職員、町消防団による個別訪問による被害調査、被害状況の把握がなかったこと。
- 町の地震災害対策マニュアル不備。町の災害対応遅い。
- お役所的で親身に欠けていた。
- 地域の被災状況（道路状況等）を詳しく連絡して欲しかった。
- 各種支援制度は文書配布で十分な説明がないままであった為、利用出来なかった。各地区で説明会でもあれば良かった。

- 警察、消防、県防災共に自衛隊対応可能範囲内だったものの、震災以外に対する災害に対しての余力がなく、結果的に人的・物的な消耗が著しかった。通常災害にも対応できる消防力等の投入が必要だった。
- 今回、県を通じて被災しなかった市町村に応援要請があったが、その作業なり事務の内容が明確でないため、応援される方も応援で行った方も活動が不十分になった。
- 市としての対応策が決まっても、どのように活動するのか具体的な行動が分からなかった。
- 現場対応よりも本部レベルでの情報整理が優先された。
- 隣り近所のまとめ役といったものを行政が支援する体制が必要（小さい公民館組織のようなものをまとめる人を支援する体制）。

第2節 まとめ ～鳥取県西部地震の体験を今後の防災に～

今回の調査では、今後の防災対策の基礎資料として活用することを目的とし、鳥取県西部地震による震災の体験を記録にまとめた。選択回答方式の調査項目に加え、自由回答欄を多く加えた結果、県民や防災関係者が体験し、感じた様々なことをより詳細に知ることができた。

ここでは、県民及び防災関係者の回答結果から明らかになった、今後の防災対策において検討すべき主な事項をまとめた。

1. 住民に対する確実な情報伝達と防災関係機関における被害情報の共有化

(1) 住民に対する確実な情報伝達

災害時に、住民の不安を取り除き、状況に応じた適切な防災活動を行うためには、正確な情報の伝達が重要である。

しかし、住民に対するアンケート調査結果では、多くの市町村が行っている防災行政無線による住民への情報提供について、「屋外拡声器の音声が聞き取れない」、「戸外では戸別受信機の音声が聞こえない」、「情報が一方的に送られるだけなので、必要な情報を聞き逃す」など、住民が情報を入手できなかった事例が見受けられる。

中には、「町からのブルーシートの配布を知らなかった」、「弁当の配布を知らなかった」など、せっかくの被災者への支援情報が十分伝わらなかった事例も見受けられ、住民に対して情報を確実に伝達するための仕組みや、設備の充実整備と併せて、住民が情報を入手するための多様な手段を検討する必要がある。

また、知りたい情報として「余震の発生見込み」に対する要望が最も多く、いつ起こるか分からない地震に対する住民の不安の大きさの現れとみられる。住民の冷静な対応を促すためにも、余震の発生見込みなどの災害状況に関する県・市町村からの的確な情報提供が求められている。

(2) 防災関係機関における被害情報の共有化

防災関係者からは、「ライフライン被害情報とその復旧情報」をはじめとする被害情報が十分得られなかったとする回答が多く、被害情報を一元的に集約し、防災関係機関が被害情報を共有できるような仕組みを構築する必要がある。

2. 被災者の立場に立った災害対策の実施

住民に対するアンケート調査結果では、応急危険度判定と家屋の被害認定が混同されているケースなど、災害対策の制度内容が正しく理解されていないために生じたと思われる不満が多く見受けられる。

行政の行う支援制度は、多岐にわたり、また、適用要件が細かく規定されるなど、住民にとって必ずしも分かりやすいとはいえない面がある。場合によっては、制度内容の誤解により、被災者が支援を受ける機会を失うことも考えられることから、行政には、住民に対し積極的かつきめ細やかに支援策の周知を図ることが求められる。

また、住民からは、行政の適正な事務執行を望む回答や問い合わせへの対応が不十分であったという回答も多い。応急危険度判定、被害家屋の認定、各種支援制度などは、災害時にしか行わない事務であることから、行政の担当者自身が必ずしも制度内容等を熟知していないことも考え

られる。

このため、県・市町村においては、日頃から、職員に対して各種の支援制度等についても研修を行うなど、災害対策の実施体制を整備しておく必要がある。

さらに、こうした制度は災害時にしか適用されないため、実際に適用して初めて分かる制度運用上の問題点等もあると考えられることから、県及び市町村においては、このたびの震災の経験を踏まえて制度内容を検証し、必要に応じて見直しを行うことが必要である。

3. 防災意識の啓発と日頃の備え

アンケート調査結果では、住民の回答者の9割が地震の発生を予期しておらず、7割が地震に対する何の備えもしていないと回答している。阪神・淡路大震災を経験し、今回の震災にも遭遇した回答者が地震に対する備えをしていなかったという事例もあり、いつ、どこで起こるのか予想もできない地震災害に対する防災意識の一層の啓発が望まれる。

また、防災関係者についても回答者の9割が地震の発生を予期しておらず、半数は普段どおりに防災活動が行えなかったとしている。

このため、日頃から災害対策のマニュアルを作成するとともに、訓練を通じて自らの行動を検証し、防災意識を高めていくことが必要である。

4. 生活必需物資等の備蓄

震災時点で、市町村や県においては、地震災害を想定した物資の備蓄をほとんど行っていないため、避難者等に対する生活必需物資の供給が不十分な事例もあったが、災害の初期の段階において、市町村からの救援物資要請を県が全面的に支援したことにより、大きな混乱を防ぐことができた。

アンケート結果では、最も有効であった防災対策として「ビニールシートの配布」をあげる回答者が最も多いが、同時に「最も不満を感じた」とする回答者も多く、その理由として「配布枚数が少ない」、「配布開始が遅い」などがあげられている。

「弁当の供給」や「給水」について、不満を感じたとする回答は比較的少ないものの、震災後まもなくの間はそれらを受けることができなかったとする回答も一部にある。

このため、市町村においては、ビニールシート、非常食、飲料水等の生活必需物資をある程度備蓄しておき、災害発生時に迅速に被災者に配布できる体制を整備する必要がある。

5. 自主防災組織の育成支援

阪神・淡路大震災においても指摘されていることだが、大規模災害時には、防災関係機関だけでは災害対策に十分に対応できない。

平成12年鳥取県西部地震においては、消火や人命救助等の事例がほとんどなかったが、被害状況の把握、避難所の運営や生活必需物資等の配布など、行政、特に市町村の職員は非常に多くの業務に追われた。

市町村職員は自らも被災者でありながら、できる限り被災住民の支援を行ったが、一方で、限られた職員数で大量の被災者からの要望のすべてに対応することは困難であり、結果として、住民からのアンケート回答では、「対応が遅い」、「山間部は無視された」、「住民に対する情報の伝達が不十分」などの市町村に対する不満が多くみられる。

このため、住民の安心、安全を確保し、円滑できめ細かな災害対策を実施するための効果的な

方法として、自主防災組織をはじめとする住民組織と市町村による連携と分担を明確にした災害対策を推進する必要がある。

6. 継続的な防災への取り組み

県や市町村においては、平成12年鳥取県西部地震の体験を踏まえ、既に防災に関する取り組みが始められている。

市町村においては、39市町村による連携備蓄、職員防災マニュアルの作成、図上訓練への取り組み等が、県においては、防災情報の共有化を目的とした総合防災情報システム及び地域衛星通信ネットワークの整備、図上訓練の実施、鳥取県被災者住宅再建支援基金の設置等が行われている。

今後は、西部地震の貴重な経験を風化させることなく、前述の事項を貴重な教訓として継続的な防災への取り組みを行っていくことが重要である。

アンケート調査票

鳥取県西部地震震災体験調査

平成13年3月

企画 鳥取県生活環境部防災危機管理室
鳥取大学工学部 教授 西田良平
実施 (株)情報サービス鳥取

鳥取県西部地震に関して、県民の皆様の体験を収集・記録し、今後の地震防災対策の基礎資料として活用させていただくことを目的に、「鳥取県西部地震震災体験調査」を実施することになりました。お忙しいところ恐れ入りますが、よろしくお願ひします。

調査に回答する人

この体験調査では、御自宅を中心とした震災体験について、御家族の皆様で回答してください。

回答に当たってのお願い

- 調査内容は、大きく分けて、Ⅰ「地震発生時の状況」、Ⅱ「防災活動の状況」、Ⅲ「震災の体験談」の3項目あります。
- 回答に当たっては、それぞれの質問の指示に従って、順にお答えください。
- 選択方式の回答は、あてはまる番号を○印で囲んでください。
- 質問には、○印をつける数を指定していますので、注意してください。
- 「その他」の番号を選んだ場合や、「具体的に記入」とある質問は、空欄に記述してお答えください。
- どれとも決めにくい場合は、感じの近い方を選んで回答するなど、記入漏れがないようにしてください。
- 個人のお名前が公表されることはありませんので、安心して回答してください。

御回答いただきました調査票は、同封しました返信用封筒を使って、**3月27日(火)**までに投函していただきますようお願ひします。

【問い合わせ先】

鳥取県生活環境部防災危機管理室（担当：馬田又は吉野）
電話：0857-26-7873
株式会社情報サービス鳥取（調査担当：山中）
電話：0857-22-1651

I 「地震発生時の状況」について

平成12年10月6日(金)午後1時30分に、鳥取県西部地震が発生しましたが、その時の御自宅(自宅の敷地内やその周囲を含む。)での状況について、お答えください。

問1 あなたの自宅には、何人住んでいましたか。複数世帯の場合は、その合計人数をお答えください。(○印は一つだけ)

- ① 1人 ② 2人 ③ 3人 ④ 4人 ⑤ 5人 ⑥ その他()人

問2 地震発生時、自宅にいた人は、何人ですか。(○印は一つだけ)

- ① 0人 ② 1人 ③ 2人 ④ 3人 ⑤ 4人 ⑥ その他()人

問3 自宅にいた人は、自宅のどこにいましたか。(あてはまるものすべてに○印)

- ① 居間 ② 台所 ③ 自室
④ 庭 ⑤ 別棟・倉庫 ⑥ 自宅の周囲
⑦ その他()

問4 自宅にいた人は、何をしていましたか。(あてはまるものすべてに○印)

- ① 休憩 ② 家事 ③ 家事以外の仕事
④ テレビ ⑤ 食事 ⑥ その他()

問5 自宅にいた人で、自宅の2階以上にいた人は、何人ですか。(○印は一つだけ)

- ① 0人 ② 1人 ③ 2人 ④ 3人 ⑤ 4人 ⑥ その他()人

問6 自宅(母屋)の構造は、何ですか。(○印は一つだけ)

- ① 木造平屋建 ② 木造2階建
③ 鉄筋コンクリート造2階建 ④ 鉄骨造2階建
⑤ ブロック(レンガ)造2階建 ⑥ その他(造 階建)

問7 自宅(母屋)が建てられたのは、何年ですか。(○印は一つだけ)

- ① 昭和35年以前 ② 昭和36～45年 ③ 昭和46～55年
④ 昭和56～64年 ⑤ 平成元年以降

問8 自宅での地震の揺れ方は、どのように感じましたか。(○印は一つだけ)

- ① 縦揺れのみ
- ② 縦揺れと横揺れ(1回)
- ③ 縦揺れと横揺れ(2回以上)
- ④ 横揺れのみ
- ⑤ 感じた者がいなかった。
- ⑥ その他 ()

問9 揺れは、何秒くらい続いたと感じましたか。(○印は一つだけ)

- ① 5秒以内
- ② 5～10秒
- ③ 10～30秒
- ④ 30～60秒
- ⑤ 60秒以上
- ⑥ 感じた者がいなかった

問10 揺れを感じたとき、怖さの程度は、どのようなものでしたか。

(あてはまるものすべてに○印)

- ① 全く平気であった
- ② 少々怖いと思った
- ③ かなり怖いと思った
- ④ 非常に怖いと思った
- ⑤ 絶望的になった
- ⑥ 感じた者はいなかった

問11 自宅にいた人で、地震発生時に、とっさにとった行動は何ですか。

(あてはまるものすべてに○印)

- ① たばこの火の始末をした
- ② ガスの元栓を閉めた
- ③ 驚いて、何もできなかった
- ④ 閉じこめられたり、けがをして、動けなかった
- ⑤ そのまま様子をみた(何もしなかった)
- ⑥ テーブルの下にかくれた
- ⑦ 家の外に逃げた
- ⑧ その他 ()
- ⑨ 自宅に人がいなかった

問12 自宅で、どのような被害が発生しましたか。(あてはまるものすべてに○印)

- ① 家が全壊した
- ② 家が半壊した
- ③ 家の屋根、壁、床、建具等が一部破損した
- ④ 液状化の被害(家が傾いた)があった
- ⑤ 窓ガラスが破損した
- ⑥ 家具が転倒した
- ⑦ 食器・電化製品・装飾品等が損傷した
- ⑧ 塀、倉庫、車庫、工作物等が倒壊又は破損した
- ⑨ 電話が不通となった
- ⑩ 停電した
- ⑪ ガスがとまった
- ⑫ 水道が止まった
- ⑬ その他 ()
- ⑭ 何も被害はなかった

問13 家族の皆様に、けががありましたか。(あてはまるものすべてに○印)

- ① 全員けがはなかった
- ② 家の損壊、建具の破損、ガラスの破片でけがをした
- ③ 家具、電化製品、装飾品等の転倒、落下でけがをした
- ④ 避難途中に、つまずいたり、ぶつかったりして、けがをした
- ⑤ けががあったが、その原因はわからない
- ⑥ その他()

問14 自宅又は自宅付近で、鳥取県西部地震が発生する予兆(異常)を感じましたか。また、それはいつ頃ですか。(あてはまる項目について、具体的に記入)

- ① 自然現象や周辺環境(気象、天候、雲、草木、土石、水質等)に予兆を感じた()
- ② 動物(家畜やペット、鳥類、魚類、は虫類、昆虫類など)の行動に予兆を感じた()
- ③ その他の予兆を感じた()
- ④ 予兆は感じられなかった

問15 地震発生前に、地鳴りを聞きましたか。地鳴りを聞いた時期は、いつ頃ですか。(あてはまるものすべてに○印)

- ① 10月6日当日の地震発生前
- ② 10月1日～5日の間
- ③ 9月の間
- ④ 1月～8月までの間
- ⑤ それ以前から(平成11年以前)
- ⑥ 地鳴りを聞いた者はいない

問16 地震の直前あるいは直後に、しばしば屋外で発光現象(原因不明の光)の目撃が紹介されますが、見た人がいますか。(○印は一つだけ)

- ① いる(→問17へ)
- ② いない(→II「防災活動の状況」へ)

問17 発光現象を見た人(問16で「いる」と答えた方)に伺います。見た状況や現象を具体的にお答えください。

| | |
|--|---------------------------------|
| 時期： 時間： 方角： 高さ： 形： その他： | 場所： 位置： 距離： 大きさ： 色： |
|--|---------------------------------|

問5 地震の揺れがおさまった後、約2時間以内に行ったことは、何ですか。
(あてはまるものすべてに○印)

- ① けがの手当、救急通報
- ② 家族の安否確認、職場への連絡
- ③ 避難(避難の準備)
- ④ テレビ、ラジオによる情報収集
- ⑤ 市町村等行政機関へ問い合わせ
- ⑥ 消防団・自主防災会活動
- ⑦ 屋外や隣近所の状況把握
- ⑧ 自宅の片づけ、家の見回り、点検
- ⑨ そのまま様子をみた(何もしなかった)
- ⑩ その他()

問6 地震発生後に、真っ先に知りたかった防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 市町村別の震度情報
- ② 余震の発生見込み
- ③ 被害情報(死者、負傷者、倒壊家屋数等)
- ④ ライフライン(電気、水道、電話、ガス)被害情報とその復旧情報
- ⑤ 公共施設(道路、鉄道、空港、河川)被害情報とその復旧情報
- ⑥ 県、市町村の災害対策情報
- ⑦ 自衛隊、消防局などの救援活動情報
- ⑧ 生活支援情報
- ⑨ 避難所情報
- ⑩ その他()

問7 知りたかった防災情報は、十分得られましたか。十分でなかった防災情報、今後充実すべき防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 市町村別の震度情報
- ② 余震の発生見込み
- ③ 被害情報(死者、負傷者、倒壊家屋数等)
- ④ ライフライン(電気、水道、電話、ガス)被害とその復旧情報
- ⑤ 公共施設(道路、鉄道、空港、河川)被害とその復旧情報
- ⑥ 県、市町村の災害対策情報
- ⑦ 自衛隊、消防局などの救援活動情報
- ⑧ 生活支援情報
- ⑨ 避難所情報
- ⑩ その他()

問8 特に、県、市町村から提供すべき防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 市町村別の震度情報
- ② 余震の発生見込み
- ③ 被害情報(死者、負傷者、倒壊家屋数等)
- ④ ライフライン(電気、水道、電話、ガス)被害とその復旧情報
- ⑤ 公共施設(道路、鉄道、空港、河川)被害とその復旧情報
- ⑥ 県、市町村の災害対策情報
- ⑦ 自衛隊、消防局などの救援活動情報
- ⑧ 生活支援情報
- ⑨ 避難所情報
- ⑩ その他()

問9 御家族にとって、とても有効であった災害対策は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 炊き出し
- ② 弁当の供給
- ③ ビニールシートの配布
- ④ 給水
- ⑤ ボランティアの派遣
- ⑥ メンタルケアの実施
- ⑦ 義えん金の受給
- ⑧ 応急危険度判定の実施
- ⑨ り災証明書の発行
- ⑩ 住宅再建支援制度
- ⑪ 生活再建支援制度
- ⑫ 住宅解体助成制度
- ⑬ その他()

問10 御家族にとって、とても不満と感じた災害対策は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 炊き出し
- ② 弁当の供給
- ③ ビニールシートの配布
- ④ 給水
- ⑤ ボランティアの派遣
- ⑥ メンタルケアの実施
- ⑦ 義えん金の受給
- ⑧ 応急危険度判定の実施
- ⑨ り災証明書の発行
- ⑩ 住宅再建支援制度
- ⑪ 生活再建支援制度
- ⑫ 住宅解体助成制度
- ⑬ その他()

問11 差し支えなければ、不満であった災害対策の理由を、お答えください。
(具体的に記入)

[]

問12 近い将来、鳥取県の西部地域で、同様の規模（マグニチュード7.0以上）の地震が発生すると思いますか。（○印は一つだけ）

- | | |
|-------------------|------------------|
| ① 1月以内に発生 | ② 1月以上～1年以内に発生 |
| ③ 1年以上～10年以内に発生 | ④ 10年以上～50年以内に発生 |
| ⑤ 50年以上～100年以内に発生 | ⑥ 100年以上の遠い将来に発生 |
| ⑦ 発生するとは思わない | |

問13 今回の地震を契機に、御家族で取り組みたい防災対策は、何ですか。（○印は3つ以内）

- ① 非常持出袋、備蓄食糧、その他防災用品を準備すること
- ② 自宅の家具等を固定すること
- ③ 家族と災害時の避難場所、連絡方法など、家族で防災会議を開くこと
- ④ 地域の防災訓練や自主防災組織に積極的に参加すること
- ⑤ 地震や防災について勉強すること
- ⑥ 家を耐震化すること
- ⑦ その他（
- ⑧ 特になし

問14 今回の地震を契機に、県や市町村で早急に防災対策を強化すべきと考えることは、何ですか。（○印は5つ以内）

- ① 防災危機管理組織の充実
- ② 災害時の防災情報の充実
- ③ 防災関係機関の防災訓練の充実
- ④ 防災意識の普及啓発、日ごろの防災情報の提供
- ⑤ 地域住民の自主的な防災活動への支援
- ⑥ 備蓄物資の充実
- ⑦ 地震や活断層に関する調査研究
- ⑧ 学校等における防災教育の実施
- ⑨ 被災者住宅再建制度の充実
- ⑩ 被災者生活再建支援制度の充実
- ⑪ 公共施設、ライフラインの耐震化
- ⑫ 災害ボランティア制度の確立
- ⑬ 消防局、消防団の充実強化
- ⑭ その他（
- ⑮ 特になし

III 「震災の体験談」について

鳥取県西部地震の体験を通じて、思ったこと、感じたこと、よかったこと、悪かったこと、後々のために伝えたいこと、貴重な資料の存在など、自由にお答えください。

また、体験談の聞き取り希望の有無、震災に関する資料提供の可否について、どちらかお答えください。

※ この用紙でなく、別の用紙に記入されても構いません。(様式不問)

○思ったこと、感じたこと

○よかったこと、悪かったこと

○後々のために伝えたいこと

○貴重な資料の存在、など

※ 体験談の聞き取り希望について

① 有り

② 無し

震災資料の提供の可否について

① 可

② 不可

差し支えなければ、内容確認のため、連絡先を記入してください。

住 所

氏 名

年齢 歳代

電話番号

御協力ありがとうございました。記入漏れがないかどうか、もう一度確認をお願いします。

鳥取県西部地震震災体験調査

平成13年3月

企画 鳥取県生活環境部防災危機管理室
鳥取大学工学部 教授 西田良平
実施 (株)情報サービス鳥取

鳥取県西部地震に関して、防災関係者の体験を収集・記録し、今後の地震防災対策の基礎資料として活用させていただくことを目的に、「鳥取県西部地震震災体験調査」を実施することになりました。お忙しいところ恐れ入りますが、よろしくお願ひします。

調査に回答する人

この体験調査では、防災関係者御自身の震災体験（災害活動）について、回答してください。

回答に当たってのお願い

- 調査内容は、大きく分けて、Ⅰ「地震発生時の状況」、Ⅱ「防災活動の状況」、Ⅲ「震災の体験談」の3項目あります。
- 回答に当たっては、それぞれの質問の指示に従って、順にお答えください。
- 選択方式の回答は、あてはまる番号を○印で囲んでください。
- 質問には、○印をつける数を指定していますので、注意してください。
- 「その他」の番号を選んだ場合や、「具体的に記入」とある質問は、空欄に記述してお答えください。
- どれとも決めにくい場合は、感じの近い方を選んで回答するなど、記入漏れがないようにしてください。
- 個人のお名前が無断で公表されることはありませんので、安心して回答してください。

御回答いただきました調査票は、同封しました返信用封筒を使って、**3月27日(火)**までに投函していただきますようお願いいたします。

【問い合わせ先】

鳥取県生活環境部防災危機管理室（担当：馬田又は吉野）

電話：0857-26-7873

株式会社情報サービス鳥取（調査担当：山中）

電話：0857-22-1651

I 「地震発生時の状況」について

平成12年10月6日(金)午後1時30分に、鳥取県西部地震が発生しましたが、その時のあなたの状況、地震に対する意識について、お答えください。

問1 地震発生時、あなたはどこで何をしていましたか。
(差し支えない範囲で、具体的に記入)

()

問2 地震発生時のあなたの災害対策活動の役割は、何ですか。(具体的に記入)

()

問3 地震発生時のあなたの参集場所は、どこですか。また、地震発生後、そこには何分後に到着しましたか。(具体的に記入)

()

問4 鳥取県西部地震のような大きな地震が、近々発生すると思っていましたか。
(○印は一つだけ)

- ① 思っていた ② 思っていなかった

問5 地震が発生した時に、最も危険と感じたことは、何ですか。(○印は一つだけ)

- ① 家屋倒壊 ② 火災 ③ 崖崩れ
④ 津波 ⑤ その他 ()
⑥ 何も思わなかった

問6 近い将来、鳥取県の西部地域で、同様の規模(マグニチュード7.0以上)の地震が発生すると思いますか。(○印は一つだけ)

- ① 1月以内に発生 ② 1月以上～1年以内に発生
③ 1年以上～10年以内に発生 ④ 10年以上～50年以内に発生
⑤ 50年以上～100年以内に発生 ⑥ 100年以上の遠い将来に発生
⑦ 発生するとは思わない

問4 必要とした防災情報は、十分得られましたか。十分でなかった防災情報、今後充実すべき防災情報は何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 市町村別の震度情報
- ② 余震の発生見込み
- ③ 被害情報(死者、負傷者、倒壊家屋数等)
- ④ ライフライン(電気、水道、電話、ガス)被害とその復旧情報
- ⑤ 公共施設(道路、鉄道、空港、河川)被害とその復旧情報
- ⑥ 県、市町村の災害対策情報
- ⑦ 自衛隊、消防局などの救援活動情報
- ⑧ 生活支援情報
- ⑨ 避難所情報
- ⑩ その他()

問5 特に、県、市町村から提供すべき防災情報は、何ですか。(○印は3つ以内)

- ① 市町村別の震度情報
- ② 余震の発生見込み
- ③ 被害情報(死者、負傷者、倒壊家屋数等)
- ④ ライフライン(電気、水道、電話、ガス)被害とその復旧情報
- ⑤ 公共施設(道路、鉄道、空港、河川)被害とその復旧情報
- ⑥ 県、市町村の災害対策情報
- ⑦ 自衛隊、消防局などの救援活動情報
- ⑧ 生活支援情報
- ⑨ 避難所情報
- ⑩ その他()

問6 今回の震災対策で、特に有効であった災害対策は、何だと思えますか。(○印は3つ以内)

- ① 炊き出し
- ② 弁当の供給
- ③ ビニールシートの配布
- ④ 給水
- ⑤ ボランティアの派遣
- ⑥ メンタルケアの実施
- ⑦ 義えん金の受給
- ⑧ 応急危険度判定の実施
- ⑨ り災証明書の発行
- ⑩ 住宅再建支援制度
- ⑪ 生活再建支援制度
- ⑫ 住宅解体助成制度
- ⑬ その他()

問7 今回の震災対策で、不十分であったと思われる災害対策は、何だと思いませんか。
(○印は3つ以内)

- | | |
|--------------|--------------|
| ① 炊き出し | ② 弁当の供給 |
| ③ ビニールシートの配布 | ④ 給水 |
| ⑤ ボランティアの派遣 | ⑥ メンタルケアの実施 |
| ⑦ 義援金の受給 | ⑧ 応急危険度判定の実施 |
| ⑨ り災証明書の発行 | ⑩ 住宅再建支援制度 |
| ⑪ 生活再建支援制度 | ⑫ 住宅解体助成制度 |
| ⑬ その他 () | |

問8 問7で回答した災害対策が、不十分であったと思われる理由を、お答えください。
(具体的に記入)

()

問9 今回の地震を契機に、県や市町村で早急に防災対策を強化する必要があると考えられることは、何ですか。(○印は5つ以内)

- ① 防災危機管理組織の充実
- ② 災害時の防災情報の充実
- ③ 防災関係機関の防災訓練の充実
- ④ 防災意識の普及啓発、日ごろの防災情報の提供
- ⑤ 地域住民の自主的な防災活動への支援
- ⑥ 備蓄物資の充実
- ⑦ 地震や活断層に関する調査研究
- ⑧ 学校等における防災教育の実施
- ⑨ 被災者住宅再建制度の充実
- ⑩ 被災者生活再建支援制度の充実
- ⑪ 公共施設、ライフラインの耐震化
- ⑫ 災害ボランティア制度の確立
- ⑬ 消防局、消防団の充実強化
- ⑭ その他 ()
- ⑮ 特になし

III 「震災の体験談」について

鳥取県西部地震の体験を通じて、思ったこと、感じたこと、よかったこと、悪かったこと、後々のために伝えたいこと、教訓となったことなど、明日の防災につながる（つなげたい）提言等について、自由にお答えください。

また、体験談の聞き取り希望の有無、震災に関する資料提供の可否について、どちらかお答えください。

※ この用紙でなく、別の用紙に記入されても構いません。（様式不問）

思ったこと、感じたこと

よかったこと、悪かったこと

後々のために伝えたいこと

教訓となったこと、など

※ 体験談の聞き取り希望について ① 有り ② 無し

震災の資料提供の可否について ① 可 ② 不可

内容確認のため、あなたの連絡先を記入してください。

職場名 _____

職名・氏名 _____ 年齢 _____ 歳代 _____

電話番号 _____

御協力ありがとうございました。記入漏れがないかどうか、もう一度確認をお願いします。

平成12年鳥取県西部地震震災体験記録

平成13年10月発行

編集・発行 鳥取県防災危機管理課

住 所 鳥取市東町一丁目271番地

電 話 0857-26-7064
